

秋田県文化財調査報告書第224集

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

—待入Ⅲ遺跡—

1992・3

秋田県教育委員会

秋田県
埋蔵文化財
発掘調査報告書
第224集

秋田県文化財調査報告書第224集

秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II

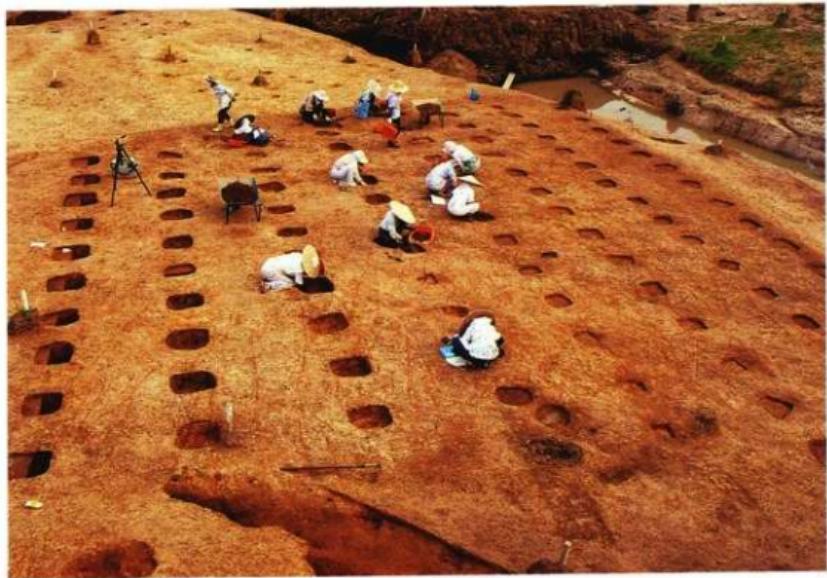
—待入Ⅲ遺跡—

1992・3

秋田県教育委員会



中央平坦部・丘櫛部を望む



据立柱建物跡調査状況

序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これらの文化遺産は現代に生きる私たちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局秋田工事事務所により、秋田市上北手から昭和町豊川に到る秋田外環状道路建設事業が計画されました。路線は周知の遺跡である待入田遺跡にもかかることが判明し、秋田県教育委員会では、工事に先立て発掘調査を実施いたしました。

その結果、中世の建物跡・井戸跡・火葬墓などが検出され、大きな成果を上げることができました。

本書はこの成果をまとめたものであります、県民各位の文化財に対する御理解と歴史研究の上でのご参考に役立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、建設省東北地方建設局秋田工事事務所、秋田市教育委員会、ならびに地域住民の皆様など、調査にあたり御指導、御協力下さった多くの方々に対し厚く御礼申し上げます。

平成4年2月27日

秋田県教育委員会
教育長 橋本 顯信

例　言

1. 本報告書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った秋田外環状道路建設事業に係る狩人田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書の編集は、秋田県埋蔵文化財センターが行った。
3. 本報告書に掲載した2万5千分の1・5万分の1の地形図は、建設省国土地理院発行の地形図を複製したものである。
4. 遺跡における層相の色調観察は、小山・竹原著『新版 標準土色帖』(1973)を使用した。

凡　例

1. 本報告書の挿図ならびに図版は、次の要項に従って作成されている。

1) 遺構の記述について

遺構実測図は、構成上不定縮尺である。

遺構実測図の中の矢印は、国家座標第X系座標北をしめす。

遺構確認面は、平行線のスクリーントーンで示した。

遺構埋土の上性区分については、厳密な基準にもとづく標記ではなく、砂・シルト・粘土の3区分で分け、対応する性質を付記した。また硬度についても、埋土における相対的な区分であり、ちみつ・やちみつ・粗しうの3区分のいずれかを付記した。

土坑・火葬墓・井戸跡については、() 内が現場での注記番号であり、本書では新たな番号をつけて編集した。

2) 遺物の記述について

本報告書に掲載した遺物は、発掘調査によって得た資料のすべてではない。

実測図は次の縮尺に統一してある。

〔土製品〕 壺器：1/3、陶磁器：1/2、その他の土製品(土鍾等)：1/2

〔石製品〕 石器(石鏃・石匙・石鎧)：1/2、礫石器・砥石：1/2、

挿図番号の下には、グリッド名・層位を付記した。層は各地区の模式図番号に対応する。

写真図版の縮尺は、土器以外は実測図とは同じである。

目 次

序	i
例言・凡例	ii
目次	iii
挿図目次	iv
図版目次	v + vi

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 遺跡周辺の地形	2
第2節 周辺の遺跡	3
第3章 調査の概要	7
第1節 遺跡の概観	7
第2節 調査方法	7
第3節 調査日誌	8
第4章 調査の記録	11
第1節 調査区の地形と層位	11
第2節 検出遺構と出土遺物	12
第3節 遺構外の出土遺物	41
第5章 まとめ	69
第1節 遺構の立地と年代	69
第2節 遺跡の性格	70
付 編	72

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の地形分類	2	第27図 遺構外出土遺物—須恵器<壺>	52
第2図 周辺の遺跡分布図	5	第28図 遺構外出土遺物—須恵器<壺>	53
第3図 遺跡位置図	6	第29図 遺構外出土遺物—須恵器<壺>、 灰釉陶器<淨瓶>	54
第4図 グリッド配置図	9		
第5図 土層模式図	11	第30図 遺構外出土遺物—須恵系中世陶器 <鉢・擂鉢>	55
第6図 第1~3号火葬墓、第1~3号土坑	13		
第7図 I区遺構位置図	15・16	第31図 遺構外出土遺物—須恵系中世陶器 <擂鉢>	56
第8図 第1号井戸跡出土遺物	17		
第9図 第1号井戸跡、第4・5号土坑	18	第32図 遺構外出土遺物—須恵系中世陶器 <擂鉢>、瓦質土製品	57
第10図 第2号~4号井戸跡、第6号土坑	21		
第11図 第2・3号井戸跡出土遺物	22	第33図 遺構外出土遺物—須恵系中世陶器 <壺・瓶>	58
第12図 第4号井戸跡、6号土坑出土遺物	23		
第13図 II区遺構位置図	25・26	第34図 遺構外出土遺物—須恵系中世陶器 <壺・小壺>	59
第14図 掘立柱建物跡	27		
第15図 第5号井戸跡、第7・8号土坑	29	第35図 遺構外出土遺物—輸入磁器、 施釉陶器	60
第16図 第5号井戸跡出土遺物	30		
第17図 第7・8号土坑出土遺物	31	第36図 遺構外出土遺物—染付け陶磁器	61
第18図 III区遺構位置図	33		
第19図 第4~7号火葬墓・出土銅錢	38	第37図 遺構外出土遺物—土錘、陶錘	62
第20図 第8~15号火葬墓・出土銅錢	39	第38図 遺構外出土遺物—ふいご羽口・埠	
第21図 第16~22号火葬墓	40		63
第22図 遺構外出土遺物—土師器・赤焼上器	47	第39図 遺構外出土遺物—石器	65
		第40図 遺構外出土遺物—石器	66
第23図 遺構外出土遺物—赤焼上器	48	第41図 遺構外出土遺物—砥石	67
第24図 遺構外出土遺物—須恵器<杯>	49	第42図 遺構外出土遺物—錢貨	68
		付編 柱間寸法	73
第25図 遺構外出土遺物—須恵器<杯・蓋>	50		
		復元平面図・復元図	74
第26図 遺構外出土遺物—須恵器<壺>	51		

図版目次

図版1 遺跡遠景	第1号井戸跡完掘状況
遺跡遠景	図版12 丘下東谷部調査風景
図版2 丘中腹から中央平坦部調査前の状況	丘下谷部調査状況
丘北側および谷部調査前の状況	図版13 丘下東谷部調査状況
図版3 丘頂部調査状況	丘下東谷部木材検出状況
丘中腹部東側調査状況	図版14 丘下東谷部木材
図版4 丘頂部調査状況	丘下西谷部坑検出状況
丘掘部調査状況	丘下西谷部木材検出状況
図版5 丘中腹から谷部調査状況	図版15 丘下西谷部土層断面
丘中腹部北側調査状況	丘下西谷部完掘状況
図版6 第1号火葬墓確認状況	図版16 第2号井戸跡検出状況
第2号火葬墓確認状況	第2号井戸跡断面
第3号火葬墓確認状況	第2号井戸跡木製品出土状況
図版7 第1号火葬墓断面	図版17 第2・3号井戸跡近景
第2号火葬墓断面	第4号井戸跡断面
第3号火葬墓断面	第7号上坑完掘状況
図版8 第1号土坑確認状況	図版18 掘立柱建物跡確認状況
第2号土坑断面	掘立柱建物跡調査風景
第3号土坑断面	図版19 建物跡掘り方断面
図版9 第1号土坑完掘状況	建物跡東辺溝跡断面
第2号土坑完掘状況	東辺溝跡完掘状況
第3号土坑完掘状況	図版20 掘立柱建物跡完掘状況
図版10 第4号土坑断面	掘立柱建物跡全景
第4号土坑完掘状況	図版21 平坦部南側調査風景
第5号土坑完掘状況	平坦部北側調査風景
図版11 第1号井戸跡断面	図版22 第7号土坑断面
第1号井戸跡底面	第8号土坑断面

第5号井戸跡断面	図版33 遺構内出土遺物—第4号井戸跡、 西谷部一
図版23 第7号土坑完掘状況	図版34 遺構内出土遺物—第5号井戸跡一
第8号土坑完掘状況	図版35 遺構内出土遺物—第8号土坑、 第6・11号火葬墓—
第5号井戸跡完掘状況	図版36 遺構外出土遺物—赤焼土器一
図版24 中腹斜面調査状況	図版37 遺構外出土遺物—赤焼土器一
中腹斜面調査状況	図版38 遺構外出土遺物—須恵器<杯>一
図版25 火葬墓群確認状況	図版39 遺構外出土遺物—須恵器<杯・蓋>一
火葬墓群確認状況	図版40 遺構外出土遺物—須恵器<甕・壺>一
火葬墓群完掘状況	図版41 遺構外出土遺物—須恵器<甕>一
図版26 第4号火葬墓完掘状況	図版42 遺構外出土遺物—須恵器<壺>、 灰陶陶器<淨瓶>一
第8・9号火葬墓完掘状況	図版43 遺構外出土遺物—須恵系陶器 <鉢・擂鉢・小壺>一
第8号火葬墓銅錢出土状況	図版44 遺構外出土遺物—須恵系陶器<擂鉢>一
図版27 第4・7号火葬墓完掘状況	図版45 遺構外出土遺物—須恵系陶器<擂鉢>一
第8・9号火葬墓断面	図版46 遺構外出土遺物—須恵系陶器 <甕・壺>一
図版28 第14号火葬墓断面	図版47 遺構外出土遺物—須恵系陶器 <甕・壺>、瓦質土製品一
第15号火葬墓確認状況	図版48 遺構外出土遺物—輸入磁器、施釉陶器一
第16号火葬墓断面	図版49 遺構外出土遺物—染付け陶磁器一
図版29 第17号火葬墓確認状況	図版50 遺構外出土遺物—土鍤、陶鍤、壺、 &羽口、鐵塊一
第18号火葬墓断面	図版51 遺構外出土遺物—石器一
第19号火葬墓確認状況	図版52 遺構外出土遺物—石器、砥石一
図版30 第20号火葬墓確認状況	
第21号火葬墓断面	
第22号火葬墓断面	
図版31 遺構内出土遺物—第1号火葬墓、 第1号井戸跡一	
図版32 遺構内出土遺物—第2・3号井戸跡一	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

秋田外環状道路は、秋田市内の交通混雑の解消をはじめ、交通量の増加にともなう国道沿線の生活環境の改善等を目的として、建設省東北地方建設局秋田工事事務所から計画が提出されたものである。

昭和61年4月には、秋田市上北手古野から昭和町豊川龍毛にかけて26.2kmの路線が決定された。その路線決定にしたがって、秋田県教育委員会では、ルート上の遺跡分布調査および範囲確認調査を継続的に行い、6ヶ所の遺跡を確認した。

本報告書にとりあげる待入Ⅲ遺跡は秋田市西北部で確認された遺跡で、神社の移転が終了した平成3年に発掘調査を実施したものである。

第2節 調査要項

遺跡名称	待入Ⅲ遺跡 ※遺跡記号 5M I - III
所在地	秋田県秋田市金足片田字待入505外
遺跡状況	畑地、山林
調査対象面積	5,800m ²
調査面積	5,800m ²
遺跡性格	縄文時代遺物散布地、古代遺物包含地、中世館跡・墓地 近世遺物散布地
遺跡時期	縄文時代、古代、中世、近世
調査目的	秋田外環状道路建設事業にかかる事前調査
調査期間	平成3年6月17日～9月19日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当	庄内昭男 (秋田県埋蔵文化財センター文化財主査) 小畠 嶽 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主査)
調査総務担当	佐田 茂 (秋田県埋蔵文化財センター主査) 佐々木真 (秋田県埋蔵文化財センター主任)
調査協力機関	建設省東北地方建設局秋田工事事務所 秋田市教育委員会

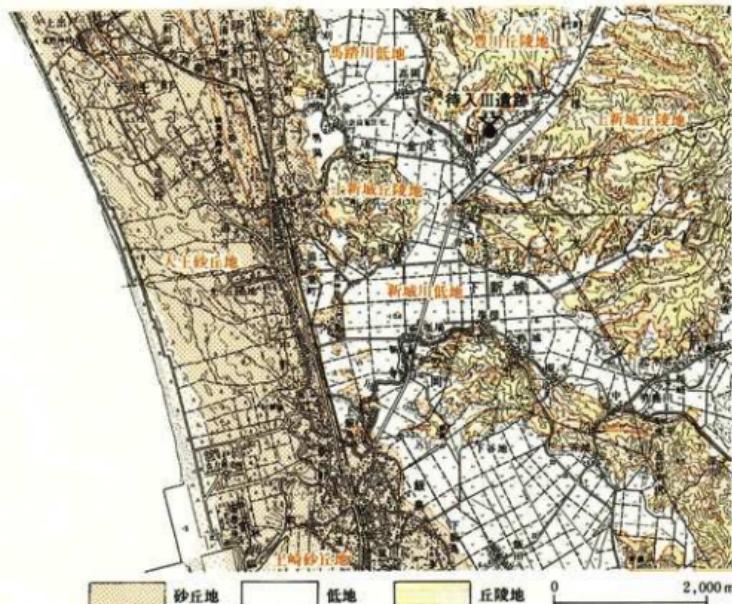
第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡周辺の地形

秋田市待入Ⅲ遺跡の位置は、北緯 $39^{\circ} 49' 14''$ ・東経 $140^{\circ} 5' 30''$ にあたる。

遺跡の位置する日本海に沿った秋田県中央部の地形を東側からみると、標高200m以上の山地、標高50~100m前後の丘陵地、標高10m前後の低地、海岸に沿った砂丘地に分けられる。

秋田市金足片田待入地区は俎山を主峰とする山地から、その裾に広がる標高50~100mの豊川丘陵地の南端にあたる。丘陵地は小さな起状をもった地形で、山頂から山腹にかけて緩斜面が発達し、小支谷の密度が高い様相を示している。したがって、丘陵地の東面する傾斜地にある待入地区においても76.8mを頂点とする丘陵頂部から東に走る小支谷がいくつかあり、起状にとんだ地形となっている。また黒川方向から南西に向って流れる馬踏川が、この丘陵端部で北西方向に流れをかえる地点でもあり、馬踏川によって平野部と画されている。



第1図 遺跡周辺の地形分類

第2節 周辺の遺跡

ここでは、待入III遺跡の歴史的環境を理解するために、秋田市北西部の新城川・馬踏川流域の遺跡について概観したい。

第2図は、待入III遺跡と秋田市北西部の遺跡群を秋田県遺跡地図に基づいて作成したものである。文章中の遺跡名の後についた（ ）は地図上の番号である。

縄文時代の遺跡

金足片田地区では片田（1）、浅田（2）が縄文土器の散布地として知られている。片田遺跡については金足東小学校に保管されている遺物から縄文時代後期に推定される。下新城青崎・小友地区では竹子山I（3）、梵天長根（4）、青崎（5）、蚕沢（6）が知らされており、竹子山Iでは石器、その他は縄文土器が採集されている。なお梵天長根遺跡は、1990年に秋田市教育委員会が主体となって緊急調査を行い、墓と推定される縄文時代後期の土塚17基・土器壙設遺構1基が検出された。上新城五十丁地区の羽田台I（7）、長面III（8）、谷地II（9）、松木台II（10）、杉ノ崎12号（11）では、いずれも縄文土器が採集されており、松木台II遺跡については、縄文時代晩期の年代が推定される。

弥生時代の遺跡

図中にはいっていないが、待入III遺跡の西方2kmの小泉湯周辺で弥生土器が採集されている。

古代の遺跡

金足高岡地区の蟹沢（12）、金ヶ崎（13）、一本松（14）では須恵器が採集されている。片山地区では待入I・II（15・16）が今回調査が行われた待入III遺跡と同じ丘陵上にある。北に馬込川I・II（17・18）、東に羽中（19）、松ノ下I・II（20・21）があり、須恵器・赤焼土器が採集されている。南にある竹子山II（22）、蚕沢（6）では、縄文土器とともに須恵器・土師器が採集され、複合遺跡の可能性がある。

下新城小友・岩城地区では1km圏内に古代の遺跡が集中している。塩田沢（23）、羽田台II（24）、末沢（25）、長面I・V（26・27）、家ノ前II（28）、末沢I・II（30・31）、谷地I（32）、堂前（34）、松木台II（10）で須恵器・赤焼土器が採集されている。これらの遺跡群は末沢（29）、大沢I（33）、谷地II（9）で須恵器の窯跡群が確認されていることから、土器生産に関連する遺跡群である可能性が高い。

中世の遺跡

ほぼ4km圏内に7つの館跡が確認されている。詳細について不明なものがあるが、ここでは時代を推定できる発見遺物を中心によこめた。待入III遺跡の北には、こぐさ館(35)、片田館(36)があり、すぐ西には高岡館(37)がある。片田館では、龍の神社に南北朝時代のものと推定される板碑・五輪塔が確認されている。

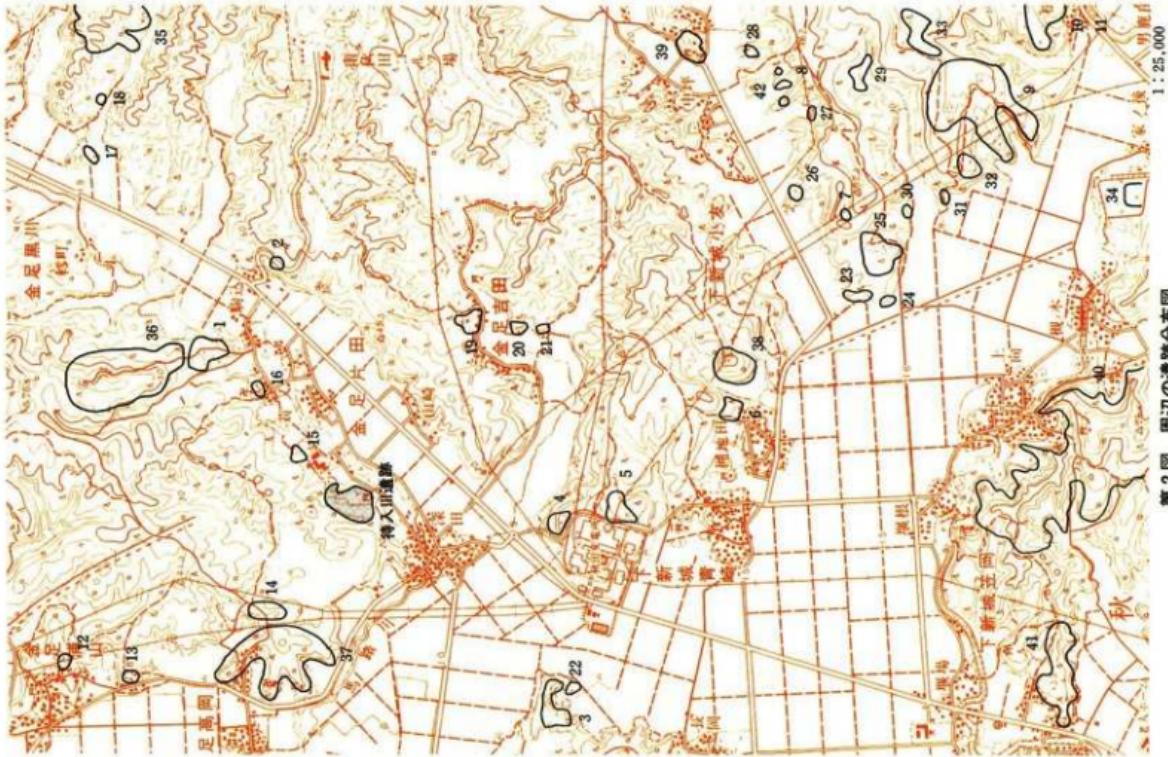
待入III遺跡の南、下新城小友・岩城地区では箱館(38)、家ノ前館(39)、岩城館(40)、笹岡館(41)がある。箱館西方の下小友部落内で室町時代の板碑、鎌倉時代と推定される五輪塔が確認されている。岩城館は周辺の館跡としては最も規模が大きく、三つの郭面がみてとれる。かつて室町時代前期と推定される宝鏡印塔が周辺から出土している。

※周辺地形に関する参考文献

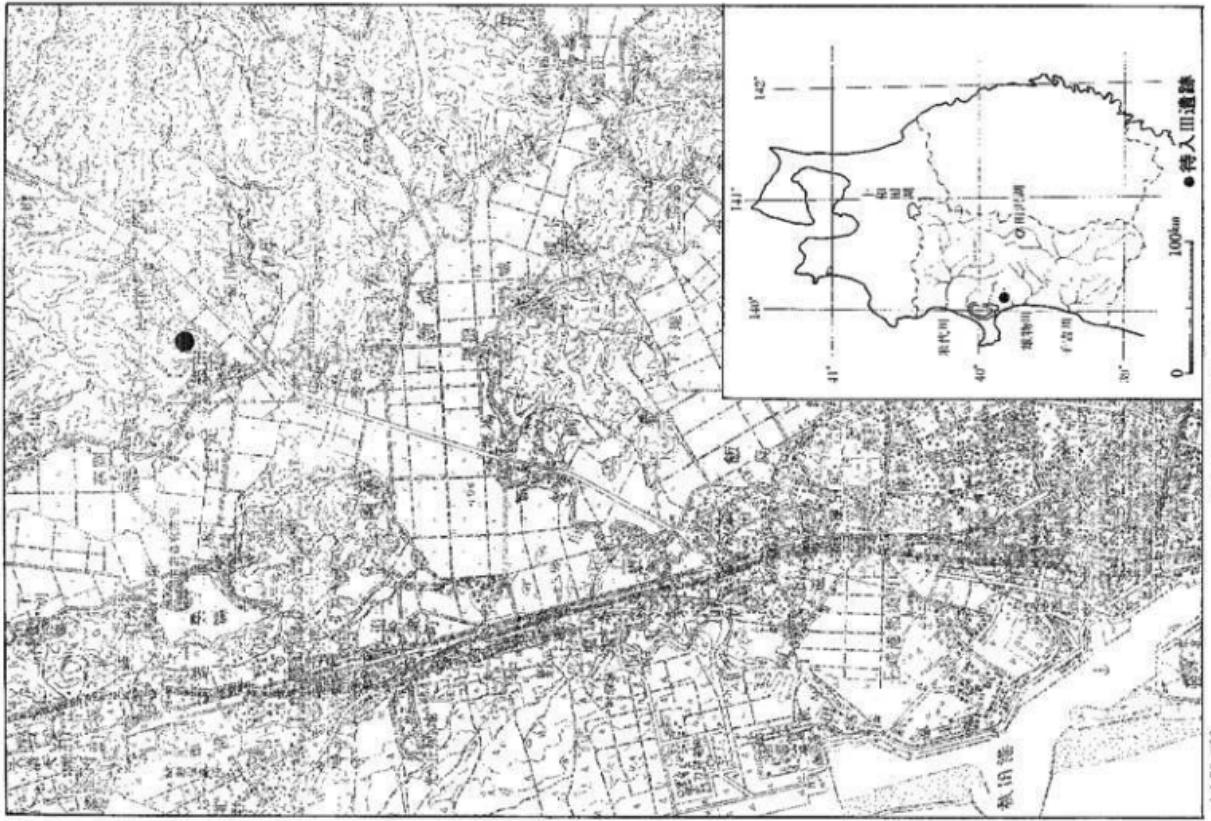
1. 経済企画庁『土地分類基本調査—秋田—5万分の1』

※周辺遺跡に関する参考文献

1. 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成2年）
2. 東北電力株式会社秋田支店・秋田市教育委員会『秋田市梵天長根遺跡—秋田変電所増設に伴う緊急発掘調査報告書—』1991（平成3年）
3. 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館—秋田県文化財調査報告書第86集—』1981（昭和56年）
4. 磐村朝次郎「秋田県における中世宝鏡印塔の型式と分布—特に八郎潟周辺の場合を中心として—」『秋田県立博物館研究報告第11号』1986（昭和61年）



第2図 周辺の道路分布図



第3章 調査の概要

第1節 遺跡の概観

待人Ⅲ遺跡は、北緯 $39^{\circ} 49' 14''$ ・東経 $140^{\circ} 5' 30''$ に位置し、秋田市金足片田字待入505外に所在している。

秋田市の北西部にある遺跡までの交通手段を説明すると、最寄りの駅はJR奥羽本線追分駅であるが、1つ手前の飯島駅より黒川行きのバスを利用し、金足東小学校前入口で乗りとよい。バス停から西に徒歩10分程であり、小学校の南側が遺跡となっている。

遺跡は丘陵地の東に面する中腹部に立地しており、裾部に福田部落へ通ずる市道が走っている。市道から20m程東に馬踏川が流れおり、調査期間中に2度の道路冠水を経験した。

遺跡の調査前の状況は、小高い山を呈する南側に金比羅神社が建立されており、その周辺が山林となっていた。北側はゆるやかな傾斜地であり、畠地として使用されていた。戦前はほとんど山林であったといわれ、畠地として開墾されたのは戦後とのことであった。なお西から東に走る3条の谷が入っているが、その最下位面は水田として使用されており、馬踏川岸へ向けて広がっている。

第2節 調査方法

1. 調査区の設定

調査を計画的に進めるために調査対象区に一区画 4×4 mのグリッドを設定した。

遺跡内に所在する道路計画センター杭NO. 253を原点として国家座標第X系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Y軸とし、これに直行するラインを東西基線X軸とした。基準交点NO. 253をMA50とし、Y軸に2桁の算用数字、X軸に2文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。なお発掘調査では、範囲確認調査の結果をふまえて、南側旧金比羅神社周辺、中央平坦部、北側中腹斜面の大きく3地区に分けて遺構の広がりを確認していった。

2. 発掘方法および記録作成

南側山頂部からはじめて北側へ調査を進めていった。地山の明黄褐色土層で遺構確認を行った。遺物は表上から地山まで掘り下げる間に出土したものをとりあげた。

〈遺物の記録〉そこで遺物の記録作成・取り上げは次の方法で行った。南東隅の杭を基準としてグリッド内における位置を記録し、遺跡内における遺物番号を付して取り上げた。

第3章 調査の概要

＜実測図の作成＞精査した遺構は、調査区内に打設した方眼杭を基準として簡易な造り方測量によって図面を記録した。遺構の平面図・断面図は、1/10・1/20の縮尺で作成した。

遺跡全体の上層図は、南側神社周辺では東西19ラインと26ライン、中央平坦部では東西37ライン、北側中腹斜面では東西63ラインを延長して作成した。土層図は1/20の縮尺で作成し、色調・土性・硬さ・混在粒子等の特徴を記載した。

＜写真＞現場の写真是 6×4.5 と3.5mm判のカメラを用い、広角・標準レンズを適宜使用した。現場撮影用のフィルムはモノクロ、およびカラーリバーサルの2種類を使用した。撮影コマ数は874である。遺物の写真撮影は35mm判のカメラを使用し、モノクロで行った。

3. 遺物整理の方法

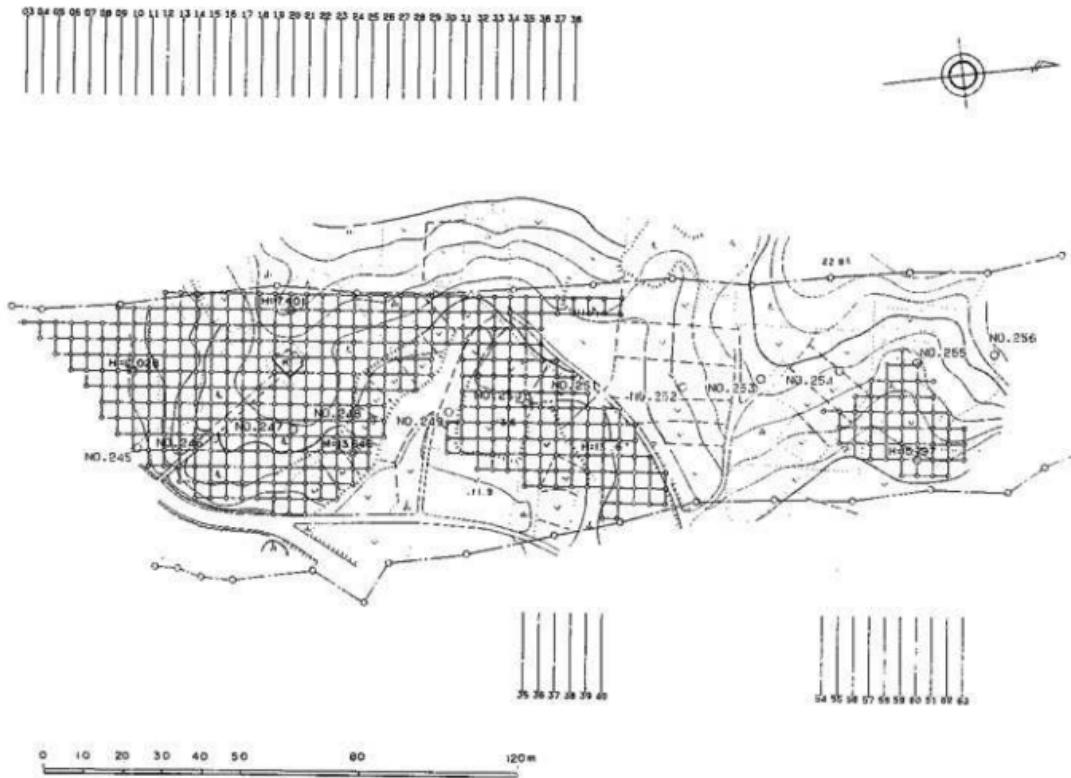
＜遺物の整理＞出土した遺物は $55 \times 34 \times 15$ cmのコンテナが35箱である。遺物は素材の種類から大きく土製品と石製品・金属製品・木製品に分けられ、土製品は素焼きの焼き物である須恵器・赤焼土器が大部分であり、他に陶磁器がある。石製品は、石器と石器素材、砥石である。金属製品として銭貨がある。木製品には箸の他棒状・板状のものがある。

これらの遺物を洗浄し、土器・陶磁器は接合作業を行った。なお上製品と石製品には、グリッド名・層位・出土年月日を注記した。金属製品はプラスチックケース内に、木製品は水没の状態で保管している。

＜土器・石器の実測図作成＞4分の1以上遺存する土器・陶磁器を1/1で図化した。また主な土器破片と銭貨の拓影をとる。また石製品・木製品もすべて1/1で図化した。

第3節 調査日誌

- 6月17日 ベルトコンベアー他発掘器材のそなえつけ準備をする。
- 6月18日 旧神社周辺を中心として調査区内の伐木除去。調査前の写真撮影。
- 6月21日 旧神社の北西側MD20とLT25グリッドから粗掘りをはじめた。丘頂から下の沢へ向けて表土を除去して行くつもりである。
- 6月26日 MB25グリッド周辺が深くなり、遺物の量も多くなる。
- 7月4日 旧神社北西側の粗掘りが大部分終了し、旧神社参道の北と北東側へベルコンを移動、再び粗掘りをはじめた。LS30グリッド付近は谷地形のため深く、継続して削り下げる。
- 7月9日 MG18・19グリッドで木炭がまとまった火葬墓が検出された。
- 7月12日 旧神社参道より北側斜面の表土除去が終了した。
- 7月15日 丘頂平坦部の表土除去を行う。西谷部は東側に拡張していった。



第2回 調査の方法

第3章 調査の概要

- 7月19日 MC26・MB26グリッドを中心とする東谷部、MA30・31グリッドを中心とする西谷部の掘り下げを行う。丘頂で確認した溝状の落ち込みを掘り下げる。ほとんどが煙の開墾によるものであった。
- 7月24日 雨にそなえ、参道南側にベルトコンベアを設置する。
- 7月25日 西谷部で泥炭層がみつかり、木材が出土。さらに縁辺で2基の井戸跡を確認した。
- 7月31日 13ラインから南へ参道南側の表土除去をはじめる。西谷部・東谷部は連日の雨のため掘り下げができなくなった。
- 8月7日 参道南側の表土除去を終え、地山面を精査していく。
- 8月10日 旧神社があった丘の部分について頂から裾にかけての精査が終了。これまで確認された土坑を掘り下げていく。
- 8月19日 35ライン北側平坦部の表土除去をはじめる。旧神社周辺の遺構を掘り下げる。
- 8月22日 旧神社周辺の地形測量をはじめる。
- 8月28日 雨と流水で水没していた西谷部・東谷部を掘り下げ木材を出していく。加工材はみあらず、自然の流木・倒木が埋没したものと考えられた。平坦部では、LQ35・36グリッドが谷間にあたり深くなる。
- 8月30日 33ラインより北の平坦部で方形の掘り方がみつかり建物跡を検出した。
- 9月3日 平坦部北側の谷縁辺上位で検出した土坑3基を掘り込んだ。そのうち1基が井戸跡と考えられ、中から加工材が出上した。
- 9月4日 由利工業高校の五十嵐教諭来跡、建物跡について御教示をいただく。
- 9月5日 調査区北側中腹斜面の粗掘りを行う。木炭がまとまった3基の火葬墓を確認する。
- 9月6日 建物跡の掘り下げが完了、写真撮影を行う。北側中腹斜面は北へ拡張する。
- 9月11日 火葬墓群のセクション図作成して、木炭等掘りあげる。
- 9月13日 平坦部は建物跡を中心に精査終了、全景写真撮影を行う。
- 9月19日 器材等のあとかたずけをすませ、調査を終了した。

Ⅲ区川崎村のある丘頂部の土層

- 1 黒褐色(10Y R 8%)シルト質・耕作土
2 明黄褐色(10Y R 5%)シルト粘土質・地山=
- * Ⅳ区の東谷部の土層
1 にじみ黄褐色(10Y R 8%)シルト粘土質・耕作土
2 暗褐色(10Y R 8%)シルト質
3 黑褐色(10Y R 8%)シルト質 地山ブロック密に混在
4 黑褐色(10Y R 8%)粘土質 下位に遺物包含
5 明黄褐色(10Y R 5%)シルト粘土質=地山=

Ⅳ区平出部の7層

- 1 にじみ明黄褐色(10Y R 8%)シルト粘土質=耕作土=
2 明黄褐色(10Y R 5%)シルト粘土質=地山=

Ⅴ区谷部の上層

- 1 にじみ明黄褐色(10Y R 8%)シルト粘土質=耕作土=
2 暗褐色(10Y R 8%)シルト質
3 黑褐色(10Y R 8%)粘土質
4 灰黒褐色(10Y R 8%)粘土質=地山=

Ⅳ区川崎村のある丘頂部の土層

- 1 黒褐色(10Y R 8%)シルト質・耕作土
2 暗褐色(10Y R 8%)シルト質
3 暗褐色(10Y R 8%)シルト質
4 黑褐色(10Y R 8%)シルト質
5 明黄褐色(10Y R 5%)シルト粘土質=地山=
- * Ⅳ区の西谷部(西側)の七層
1 黒褐色(10Y R 8%)シルト質・耕作土
2 暗褐色(10Y R 8%)シルト質
3 黑褐色(10Y R 8%)シルト質 下位に遺物包含
4 明黄褐色(10Y R 8%)シルト粘土質
5 にじみ黄褐色(10Y R 8%)粘土質
6 明黄褐色(10Y R 5%)シルト粘土質=地山=

Ⅳ区の北東側平坦部の上層

- 1 黄褐色(10Y R 8%)シルト質=耕作土
2 灰白色(10Y R 8%)粘土質=地山=
- * Ⅳ区の西谷部(中央)の七層
1 にじみ黄褐色(10Y R 8%)シルト質
2 灰褐色(7.5Y R 8%)粘土質
3 黑褐色(10Y R 8%)粘土質
4 沈積層 不本入る
5 青灰色(5G Y 8%)粘土質=地山=

※区の中敷斜面部の土層

- 1 黒褐色(10Y R 8%)シルト質=耕作土
2 明黄褐色(10Y R 8%)シルト粘土質=地山=

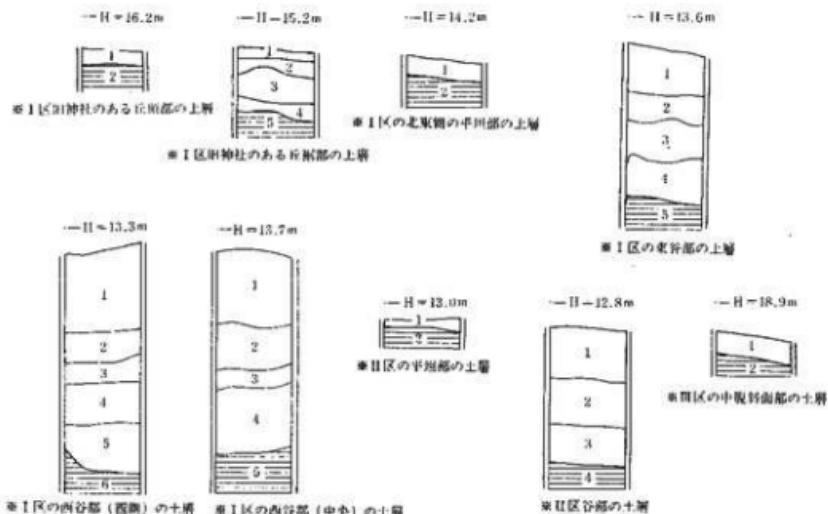
第4章 調査の記録

第1節 調査区の地形と層位

待入田遺跡は北に長い馬背状の丘陵部の東側に立地している。丘陵部西側の最高部は標高33mを測る。北側の最高部は一段と高い標高45mであり、遺跡を両している。丘陵部は標高20mまでは急斜面で、それ以下は比較的なだらかな山腹斜面が発達している。その東面する長さ200mの斜面が遺跡の範囲であり、調査の対象となつた。南側から北側にかけて微地形について説明を加えたい。なお調査を進める上で調査対象地を地形に合わせて、I・II・III区に仮設定したので説明もそれに順ずる。

I区の旧金比羅神社が建っていた丘は、標高17m以下で東に幅30m程の張り出しをもち、小山状を呈している。その北側がII区で標高14m以下の平坦面となっており、下の水田面との比高も2m前後である。平坦面の北と南に谷が入り込んでおり、北側がより深い。さらにその北は西から尾根状の高まりがのびており、遺跡の北を曲する大きな高まりとの間に小さな尾根が入る。その尾根の傾斜がなだらかとなっている部分をIII区とした。標高18~15mの間にある。

各地区的層位は谷の部分を除いて上面が削平されている状態であり、プライマリーな状況での層位は把握できなかった。下図に表十と遺構確認面の状況について概略を模式化した。



第5図 土層模式図

第2節 検出遺構と出土遺物

それぞれの地区で次のような遺構が検出された。

※I区 火葬墓3基、井戸跡4基、土坑6基、溝跡1条

※II区 掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土坑2基、小穴群

※III区 火葬墓19基

これらの検出遺構等の記述にあたっては、遺跡の南側から順に、次のような構成で行った。

I区【丘の上の遺構と出土遺物】【丘裾半坦部の遺構と出土遺物】【東谷部の状況】

【西谷部の遺構と出土遺物】

II区【中央平坦部の遺構と出土遺物】 III区【中腹斜面における火葬墓群】

なお遺構内の遺物については、それぞれの項目で説明を行ったが、遺構外のものについては、ここで出土状況を知らせるにとどめ、第3節で分類・考察を行った。

【丘の上の遺構と出土遺物】

いずれも黒褐色土の表土下にある地山明黄褐色土層面で確認した遺構であり、埋土中の出土遺物は少ない。遺物は、北西側の谷に向って落ちる斜面で赤焼土器・須恵器が広い範囲で出土した。また北東側の平場におちる段の部分で石器剝片が出土地した。

丘頂から裾部にかけてほぼ1直線にならぶように3基の火葬墓を検出した。

第1号火葬墓（KS B01）

＜位置・確認状況＞丘裾部のMG18グリッド北側で、木炭が混在した黒色土をみつけ確認した。

＜平面形・規模＞橢円形を呈している。東西に長軸方向をもっており、長径48cm、短径40cmである。中央部が丸く窪んでおり、確認面から最深部まで12cmを測る。

＜埋土の状況＞丘側の上面を確認の際、掘り込んでしまったが、上位は暗褐色土、下位は木炭が入った黒色土であり、いずれもかなり硬くなっていた。

＜壁・底面の状況＞斜めに浅く掘り込まれており、中央に向って窪んでいる。

＜遺物・その他＞埋土上面より赤焼土器甕（第6図1）の胸部破片が出土した。

第2号火葬墓（KS B02）

＜位置・確認状況＞中腹部のME18グリッド北側で、木炭が混在した黒色土をみつけ確認した。

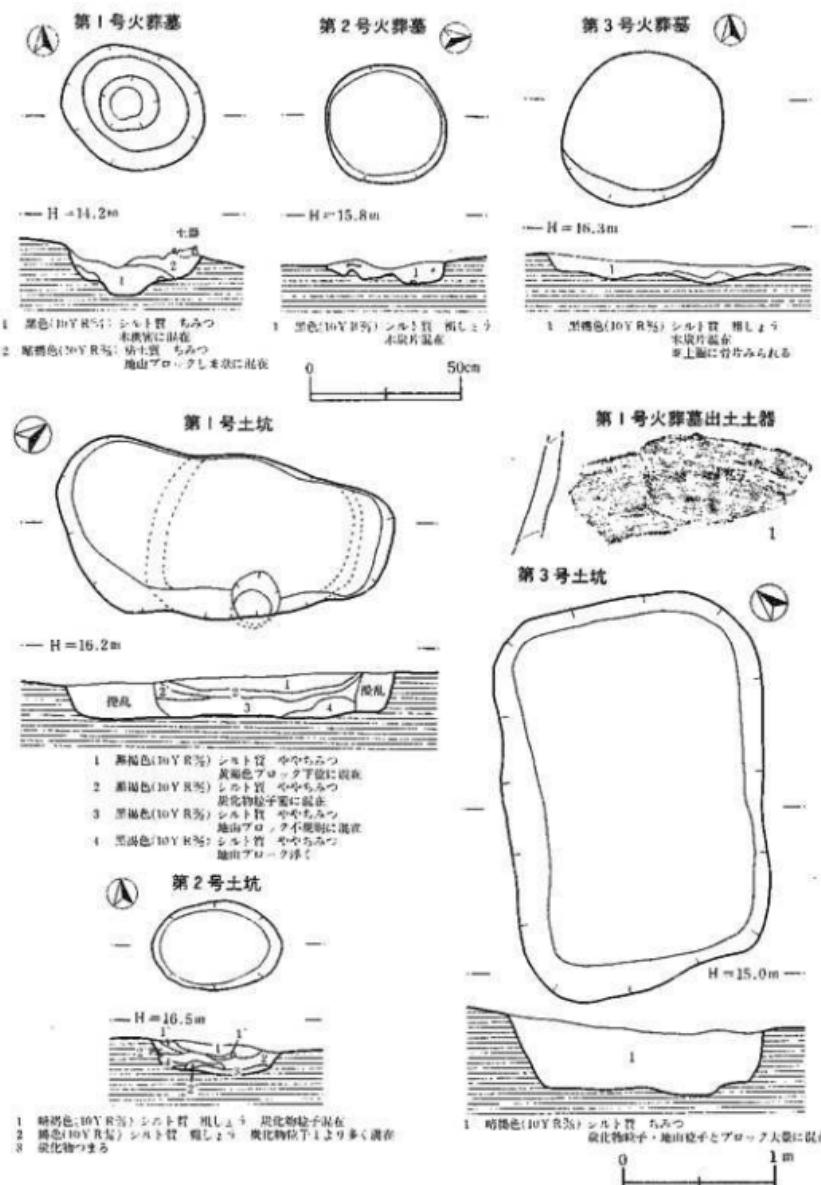
＜平面形・規模＞円形を呈している。直径40cmで、確認面から最深部まで8cmを測る。

＜埋土の状況＞木炭が混在した軟い黒色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞浅い掘り込みであり、根による搅乱のためか凹凸がある。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在していた。

第2節 掘出遺構と出土遺物



第6図 第1～3号火葬墓、第1～3号土坑

第3号火葬墓（K S B03）

＜位置・確認状況＞頂上に近いMD19グリッド南西隅で、わずかに木炭が混在した落ち込みをみつけ確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈している。直径55cm、確認面からの深さは5cm前後である。

＜埋土の状況＞1cm前後のこまかい木炭が混在した黒褐色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞掘り込みがきわめて浅く判然としない。

＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在していた。

第1号土坑（S K02）

＜位置・確認状況＞MD18グリッド北側で、北東から南西に細長いプランを確認した。

＜平面形・規模＞木根により搅乱があり、北東側と南西側の壁の立ち上がりは断面で確認するにとどまった。平面形は不整長方形と推定され、北東一南西方向が推定138cm、それと直交する方向が110cm、確認面から最深部まで25cmを測る。

＜埋土の状況＞4層に分層され、4層以外は炭を含む点に特徴が認められる。地山ブロックも混在することから、自然堆積ではなく、人為的に埋め戻されたと推定される。

＜壁・底面の状況＞壁の掘り込みは垂直で、底面はほぼ平坦である。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第2号土坑（S K03）

＜位置・確認状況＞L Q18グリッド北側の地山面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞梢円形を呈し、東西に長軸方向がある。長径80cm、短径65cmであり、確認面から最深部まで19cmを測る。

＜埋土の状況＞暗褐色土、褐色土、炭化物層の3つに分けられる。

＜壁・底面の状況＞壁はやや斜めに掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。壁・底面ともに焼土化しており、最下位の炭化物層の存在と相俟って、火が焚かれたことが推定できる。

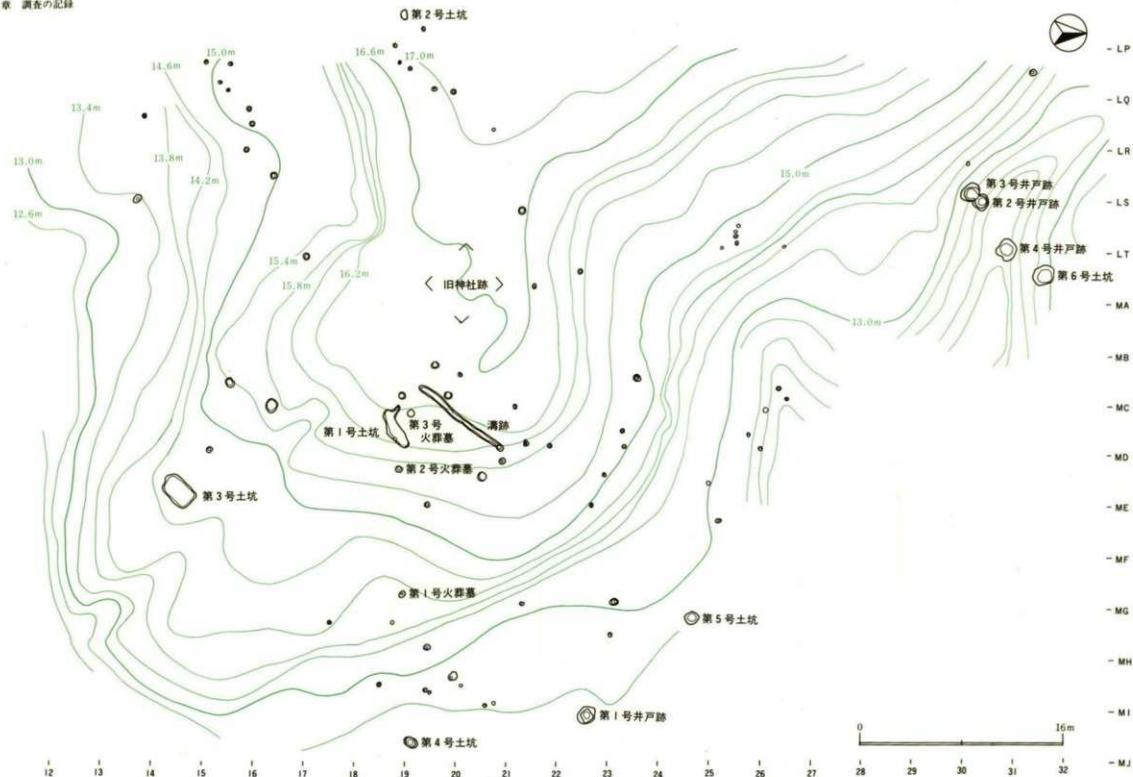
＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第3号土坑（S K04）

＜位置・確認状況＞ME14グリッドのはば中央で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞長方形を呈し長辺260cm、短辺173cm、確認面から最深部まで41cmを測る。

＜埋土の状況＞硬質の暗褐色土1層のみで地山粒子、同ブロックを大量に含むことから、人為的に埋め戻されたと推定される。



第7図 I区遺構位置図

＜壁・底面の状況＞断面形は鍋底状を呈し、底面は部分的に凹凸が認められる。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

溝跡

＜位置・確認状況＞MB19グリッド北側で、北東方向にのびる黒褐色土の落ち込みを確認した。

＜規模＞幅40cm前後で、長さが8mある。確認面からの深さは10cm前後で浅い。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

〔丘裾平坦部の遺構と出土遺物〕

遺構確認面は黄灰色粘土層であり、斜面を削り出して平坦面を造成したものと考えられる。

丘下で須恵系の中世陶器がまとまって出土した。

第1号井戸跡（SK06）

＜位置・確認状況＞M122、M122南グリッドにまたがる黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞地山面で確認されたプランはほぼ円形であるが、中位から方形プランを呈する。開口部の直径は130～140cmで、確認面から最深部まで151cmを測る。

＜埋土の状況＞大きく4層に分けられ、黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積している。いずれも粘土質で硬いが、なかでも1層が最も硬くしまっていた。

＜壁・底面の状況＞底面は丸く窪んでいる。断面をみると、中位から下が袋状を呈し、中位でゆるくすぼまったくのちりが大きく外に開いている。

＜遺物・その他＞方形掘り方の南辺隅で丸太に近い柱材が立っている状況で検出された。遺存している部分は、長さ10～17cmで、12cm程の厚さがある。その柱材の間に長さ12～20cm、幅7～14cm、厚さ1cm前後の薄い板材もみつかった。丸太に近い部材が隅柱、薄い板材が側板になると思われる。埋土中から須恵系中世陶器の擂鉢（第9図1）甕胴部破片（2、3）が出上している。



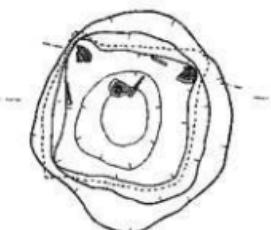
第8図 第1号井戸跡出土遺物

第4章 調査の記録

第1号井戸跡

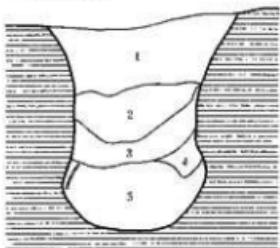


— H = 12.6m



南壁側面

— H = 12.7m

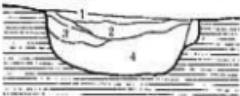


- 1 黄褐色(10Y R 5/6) シルト・粘土質 らみつ
炭化物粒子・地山粒子多量に混在
- 2 黒褐色(10Y R 5/6) シルト質 らみつ
炭化物粒子・地山ブロック混在
- 3 にじみ・灰褐色(10Y R 5/6) シルト・粘土質 らみつ
炭化物粒子・地山ブロック混在
- 4 にじみ・灰褐色(10Y R 5/6) シルト・粘土質 らみつ
より炭化物粒子混在量少ない
- 5 黑褐色(10Y R 5/6) 粘土質 らみつ
炭化物粒子・地山粒子混在

第4号土坑



— H = 14.2m



- 1 黄褐色(10Y R 5/6) シルト・粘土質 らみつ
炭化物粒子・地山粒子・地山ブロック混在
- 2 黑褐色(10Y R 5/6) シルト質 らみつ
地山粒子・地山ブロック混在
- 3 黄褐色(10Y R 5/6) シルト・粘土質 らみつ
より炭化物粒子の混入少なく、地山粒子の
量多い割合多い
- 4 黑褐色(10Y R 5/6) シルト質 らみつ
地山粒子・地山ブロック・大量の地山ブロック混在

第5号土坑



— H = 13.0m



- 1 黑褐色(10Y R 5/6) シルト質 らみつ 炭化物粒子・地山粒子混在



第9図 第1号井戸跡、第4・5号土坑

第4号土坑（SK05）

＜位置・確認状況＞丘陵部東側の裾にあたるM J 19グリッド南側の地山面で確認した。

＜平面形・規模＞平面形は橢円形を呈している。長辺102cm、短辺79cmであり、確認面から最深部まで39cmを測る。

＜埋土の状況＞いずれも粘土質で硬く、掘り上げるのが非常に困難であった。上位は灰黄褐色土であり、中位は黒褐色土である。

＜壁・底面の状況＞断面は鍋底状を呈し、壁・底面ともなめらかであった。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第5号土坑（SK07）

＜位置・確認状況＞MH24グリッド北西隅、谷の南縁に位置している。確認の際、掘りすぎのため埋土の半分以上が取り除かれてしまった。

＜平面形・規模＞確認面でのプランは不整形であるが、これは壁の崩落により変形したものであり、本来は長方形を呈していたものと考えられる。規模は、長辺90cm、短辺70cm程であり、確認面から最深部まで62cmを測る。

＜埋土の状況＞下位の埋土は黒褐色土である。

＜壁・底面の状況＞断面形は鍋底状を呈し、底面は北から南へ傾斜している。

＜遺物・その他＞出土遺物はない。

[東谷部の状況]

MB25・26・27、MC25グリッド周辺が半円状の窪地となり、下の谷間へとつながっている。にぶい黄褐色土の下に50cm前後の厚さで堆積する黒褐色土があり、その下位から須恵器・赤焼土器が多量に出上した。さらに50cm程の厚さの黒色粘土層を掘り下げるとき、泥炭層に達した。30m²の範囲で泥炭層中の木材を精査したが、すべてが皮のついた埋れ木であった。

[西谷部の遺構と出土遺物]

30～33グリッド列の西側に走る谷の縁辺に確認された遺構であり、確認面は青灰色粘土層である。遺物は黒褐色土の下層から、黒色粘土にかけて多量に出上した。大部分が須恵器および赤焼土器であり、中世の陶磁器は少ない。

谷の縁辺にある3基の井戸跡については、第2号井戸跡（SE02）が上位に石を集合された施設をもつていてこと、SE01、SE03が第2号井戸跡（SE02）と立地・形状が類似していることから井戸跡とした。

第2号井戸跡 (S E 02)

＜位置・確認状況＞谷部を掘り下げる過程で礫の集合と板材の存在が確認されていたため、その部分を残す形で掘り下げる行き、円形の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈している。開口部の直径124cm、板材のあった位置から最深部まで68cmを測る。

＜埋土の状況＞きめのこまかい黒色土が充填していた。

＜壁・底面の状況＞板材の位置が井戸の東壁にあたると考えられ、第3号井戸跡と接する側はやや斜めに掘り込まれており、底面は凹凸がある。

＜遺物・その他＞埋土中より第11図2～11に示した木製品が出土している。2～5は箸、6・7は串である。8・9はうすい板状のもの、10は杭、11は厚い板である。

第3号井戸跡 (S E 01)

＜位置・確認状況＞LS30グリッドの南側、谷部南縁にある。谷間がいくぶん湾曲する場所で、第2号井戸跡の上位で確認した。

＜平面形・規模＞ほぼ円形を呈している。開口部の直径は152cmで、確認面から最深部まで104cmを測る。

＜埋土の状況＞上面でプランをみつけられなかったため底面付近にきめのこまかい黒色土があるのを確認しただけである。黒色土中に青白色粘土が混在し、護みがあったと考えられる。

＜壁・底面の状況＞谷がやや落ち込んだところに構築されており、壁は斜めに掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。

＜遺物・その他＞第11図1の折れた箸が1点出土した。

第4号井戸跡 (S E 03)

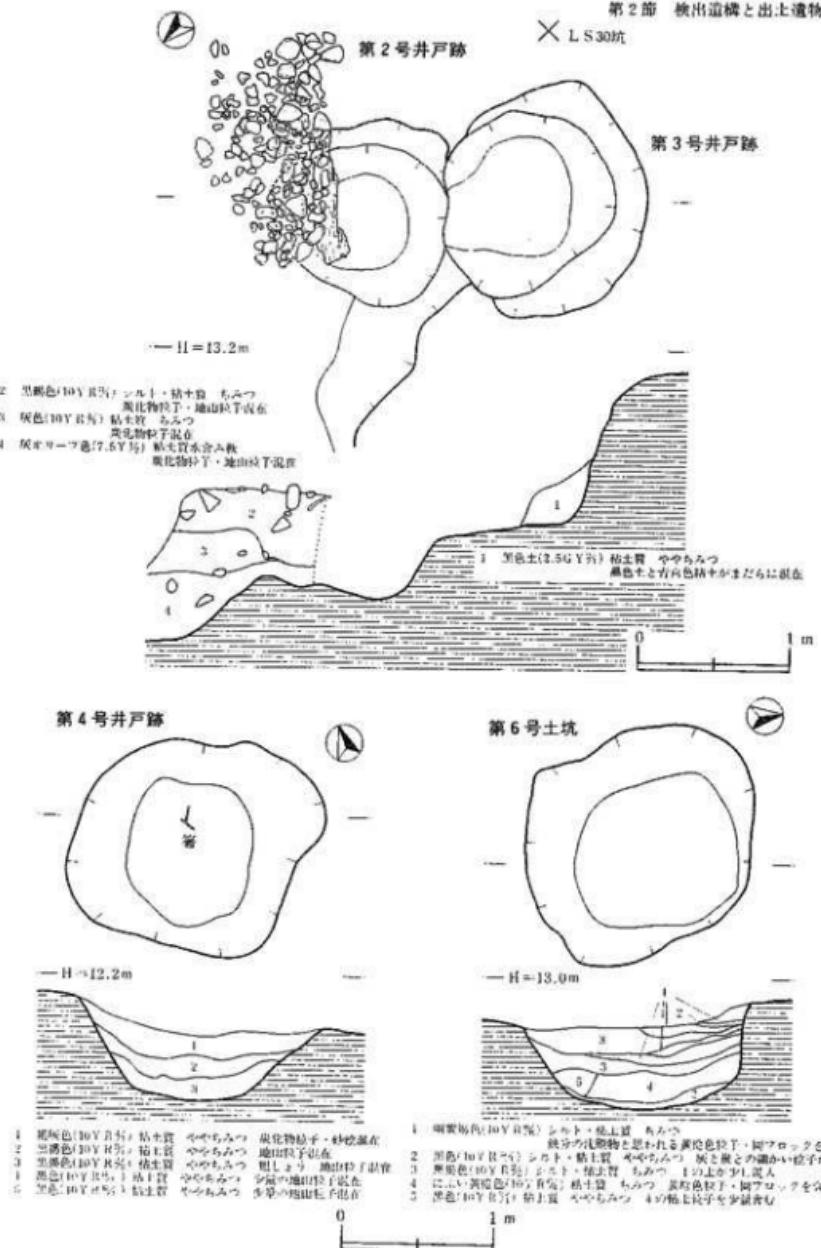
＜位置・確認状況＞LS31グリッドの杭下で、谷の壁面を精査中に、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞円形を呈しており、開口部の直径が140cm前後である。谷縁の確認面から最深部まで64cmを測り、表土からは112cmである。

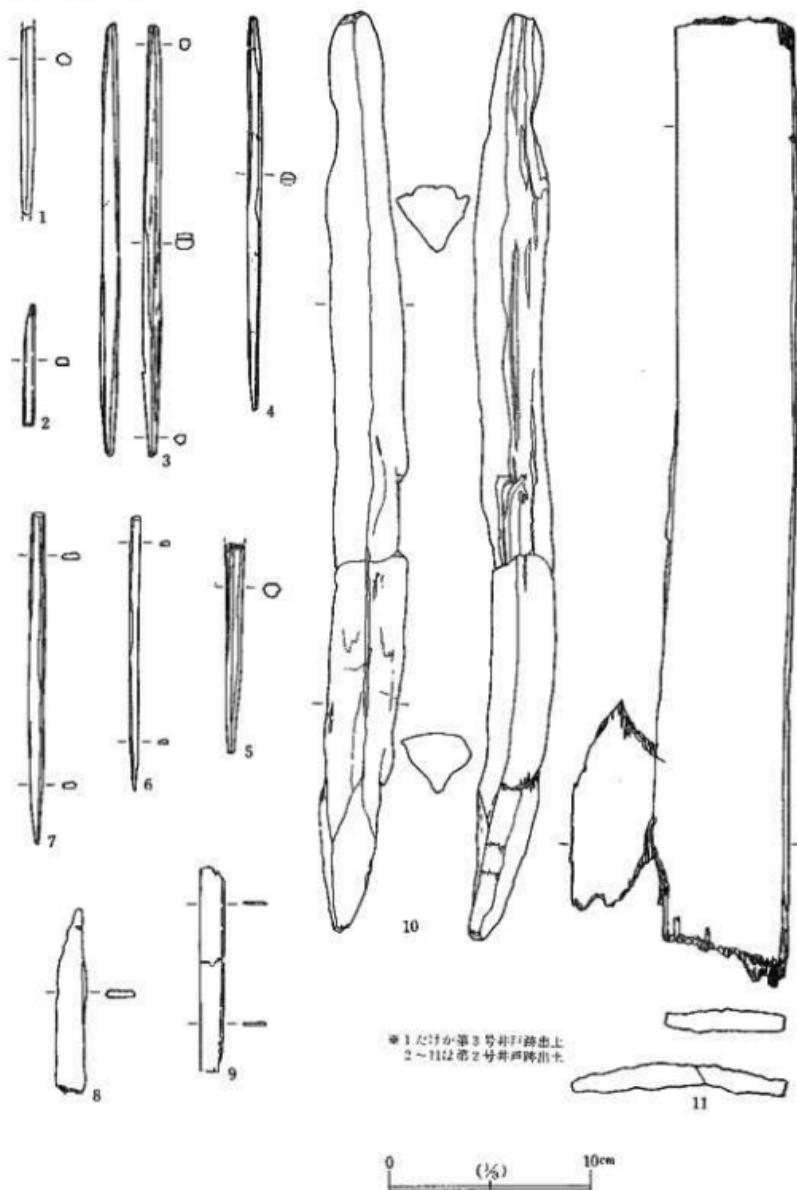
＜埋土の状況＞上面は黒褐色土が覆い、その下は軟質できめのこまかい黒色土が堆積していた。＜壁・底面の状況＞谷縁より斜めに掘り込まれており、底面も丸みをもつ。

＜遺物・その他＞埋土中および底面近くより、第12図1・2の箸と3のうすい板が出土した。なお底面より赤焼土器杯の底部破片が1点出土した。

第2節 掘出遺構と出土遺物



第10図 第2～4号井戸跡、第6号土坑



第11図 第2・3号井戸跡出土遺物

第6号土坑 (SK01)

<位置・確認状況>西谷部を調査中に、MA31グリッド北側の地山面で確認した。

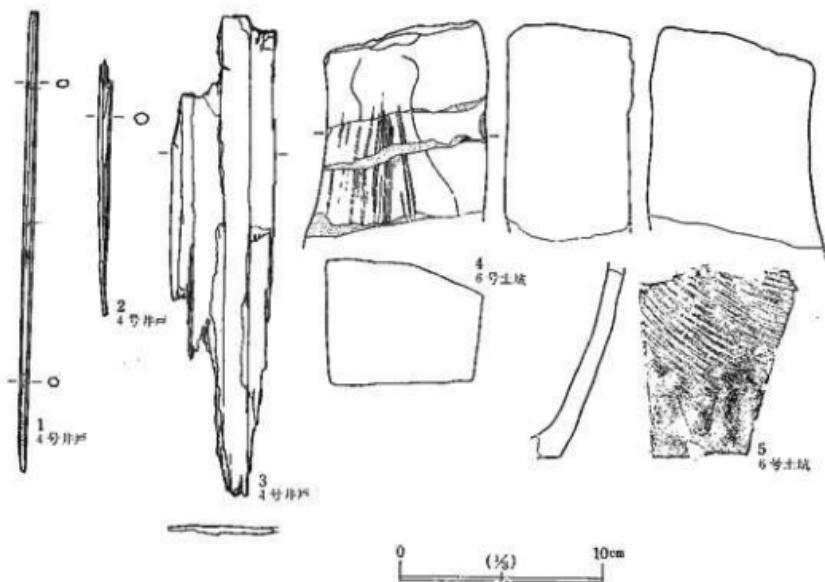
<平面形・規模>不整形を呈している。東西141cm、南北155cmで、確認面から最深部まで56cmを測る。

<埋土の状況>上位から中位にかけて地山粒子・同ブロックからなる明黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積し、最下位にうすく黑色土が認められる。最下位を除き各層とも硬質である。

<壁・底面の状況>壁・底面とも堅致である。断面形は鍋底状を呈し、底面は平坦である。

<遺物・その他>埋土中から第12図5の須恵器甕の底部破片と4の砥石が出土した。砥石は4面の磨面があり、広い一面にはシャープに刻まれた線条の刻みがある。

第2号井戸跡と第4号井戸跡の中間で、泥炭層に突き刺さった状態で2本の杭と、他の木製品がみつかっており、図版33に示した。



第12図 第4号井戸跡、6号土坑出土遺物

[中央平坦部の遺構と出土遺物]

西谷部をはさんで北側に、東に向けて長く張り出す標高14m前後の平坦面があり、西側のつけ根の部分で建物跡を検出した。その平坦面の北側に深い谷が入り込んでおり、谷の落ち際で井戸跡・土坑を検出した。さらに北側にはせまい平坦面があり、小ピット群を検出した。

I区西谷部への落ち際で須恵器・須恵器・赤焼上器が出土し、北側にある谷の落ち際でも須恵器・赤焼土器が多く出土した。

掘立柱建物跡（S B01）

<位置・確認状況> MA32グリッド周辺は表土が20cm前後と浅く、地山の明黄褐色土層を稍者中に褐色土が充填した方形の掘り方をみつけ確認した。建物跡が立つ部分は、長方形の平場となっており、西側のつけ根の一段高い部分にきっちりはまり込んだように立地している。

<規模> 掘り方はほぼ方形を呈し、北側の掘り方が大きくて一边が55~60cm、南側のものは小さく一边35~40cmである。北辺の掘り方中心間の距離は10m、南辺は15m、南北間は12mである。掘り方の東西間における距離は1.2mと一定している。掘り方列は北側より1・2列めが10コ、3・4列めが12コ、5列めが12コ、6~8列めが16コであり、北から南へ拡大している。ただし、南北間における中心距離は、北側から1~5列間は1.8mであるが5~8列間は、1.6~1.7mとせまくなる。また掘り方どうしのならびについては、南北の中心が1~6列までとおるが、7・8列は片寄りとくに7列は6列と8列の中間に入ってくる。

<遺物・その他> 掘り方中位で須恵器の小破片が一点出土したが、後世に混入したものである。

第7号土坑（S K08）

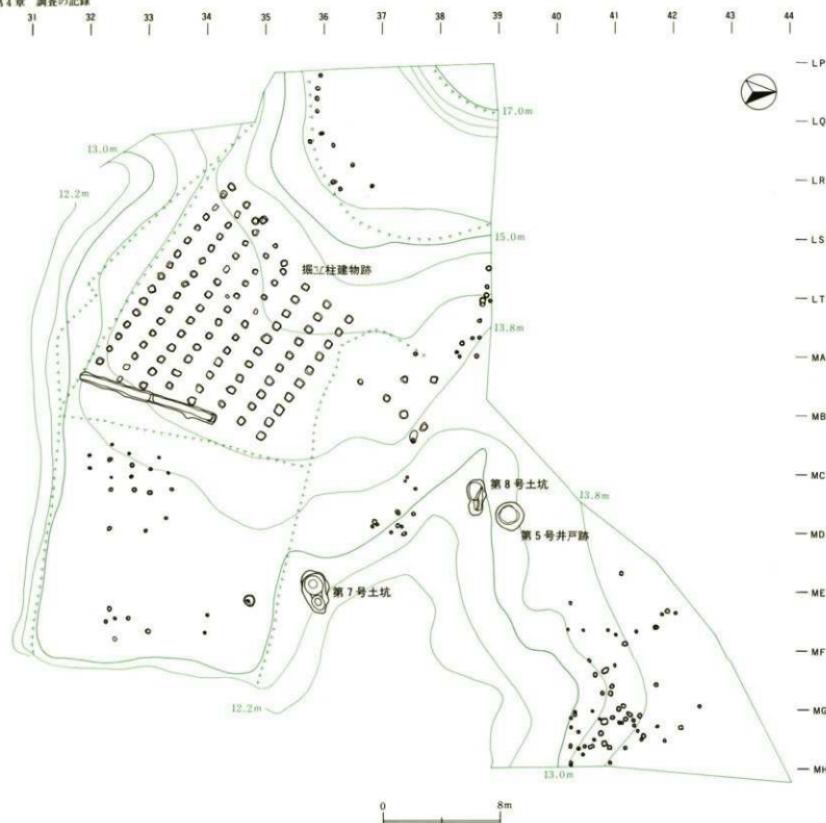
<位置・確認状況> ME35グリッドの北東隅、谷の落ち際にあり、青白色粘土層で黒褐色土上の落ち込みとして確認した。上面を構成した段階で2基の土坑の重なりがみとめられ、東側の小さい方（aと呼称）が西側の大きい方（bと呼称）に切られていた。

<平面形・規模> a・bとともに平面は不整円形を呈しており、aは直径142cm、bは直径184cmであり、確認面から最深部までaは50cm、bは74cmを測る。

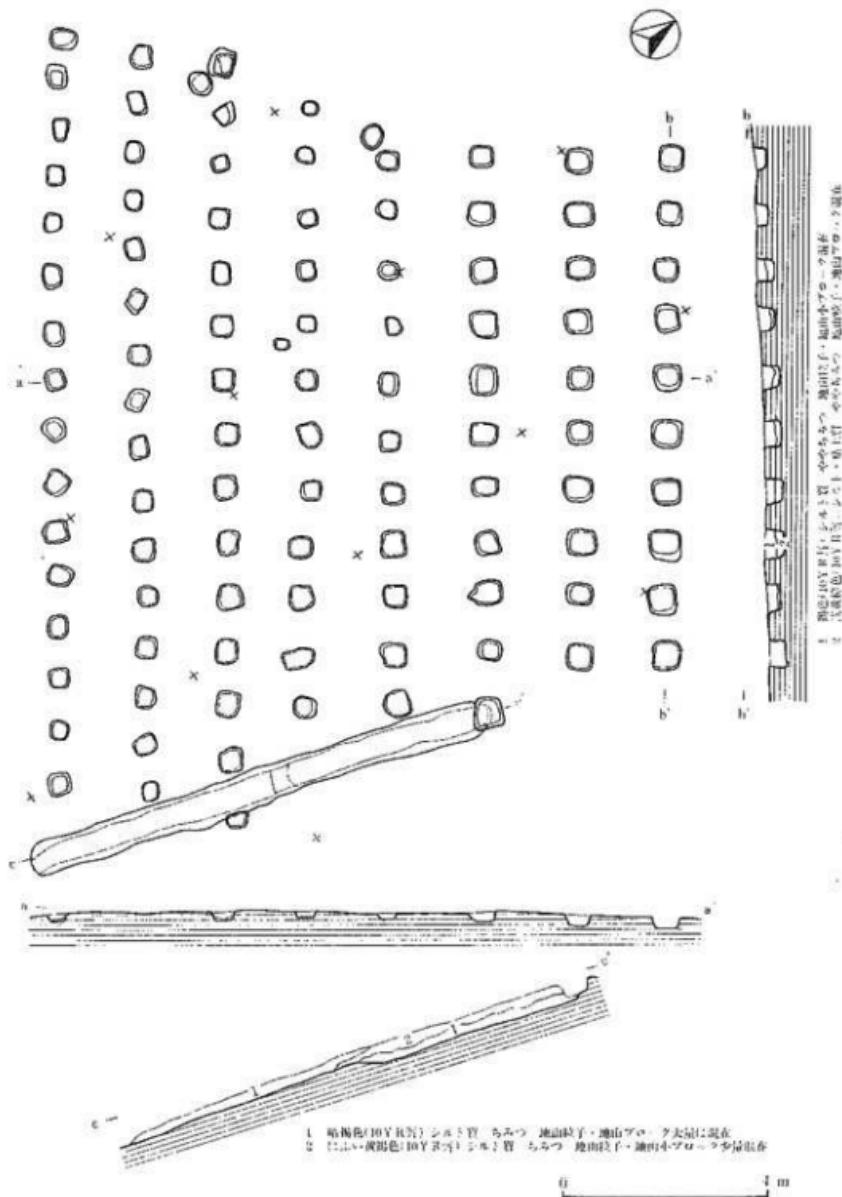
<埋土の状況> a・bともに灰黄褐色土がレンズ状の堆積をしており、青白色粘土が間にはいつている。

<壁・底面の状況> aは深く丸く掘り込まれている。bは壠鉢状を呈しており、西寄りが深くなる。

<遺物・その他> bの埋土中位で、第17図1の須恵器甕口縁部破片、2の須恵器壺腹部破片と3の中中国産の白磁皿破片が出土した。



第13図 II区造構位置図



第14図 堀立柱建物跡

第8号土坑（SK09）

＜位置・確認状況＞MD38グリッドの東側、西から東に下る縁辺にある。地山の浅黄色粘土層で灰褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞橢円形が2つ合わさったような形をしており、長軸方向を東西にもっている。長さ242cm、幅120cm、確認面から最深部まで110cmを測る。

＜埋土の状況＞シルト・粘土質の灰黄褐色をベースとする上が上位を覆い、灰白色の粘土をはさんで下は、小礫および砂利である。

＜壁・底面の状況＞西壁はほぼ垂直に、東壁はゆるやかに落ち込む。小礫・砂利をのぞいた底面は灰白色粘土であり、西側には丸い、東側には溝状の落ち込みがある。

＜遺物・その他＞埋土中より第17図4の須恵器壺胴部破片、5の四面に磨面をもつ砥石、6の棒状の木製品が出土した。

第5号井戸跡（SK10）

＜位置・確認状況＞MD38グリッドの北東側、地山の浅黄色粘土層で灰褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞開口部は直径196cmの円形を呈し、底面がせまく直径110cm前後である。確認面から最深部まで138cmを測る。

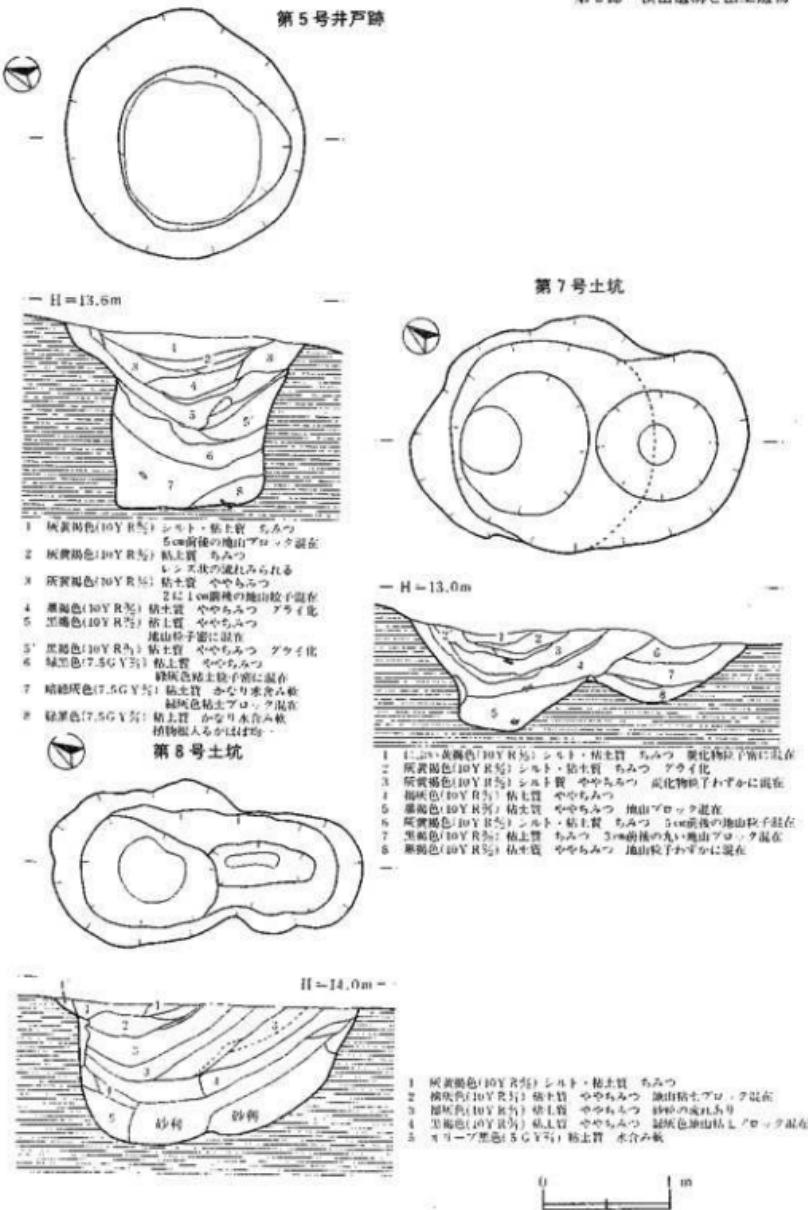
＜埋土の状況＞上位に灰黄褐色土、中位に黒褐色土がレンズ状の堆積をしており、下位に青灰色粘土と緑黒色土が混在する。下位は水を多く含みドロドロの状態であった。

＜壁・底面の状況＞開口部より40cm程斜めに落ちる。それより下の壁はほぼ垂直で底面に達する。底面も平坦で、壁との境もはっきりしている。

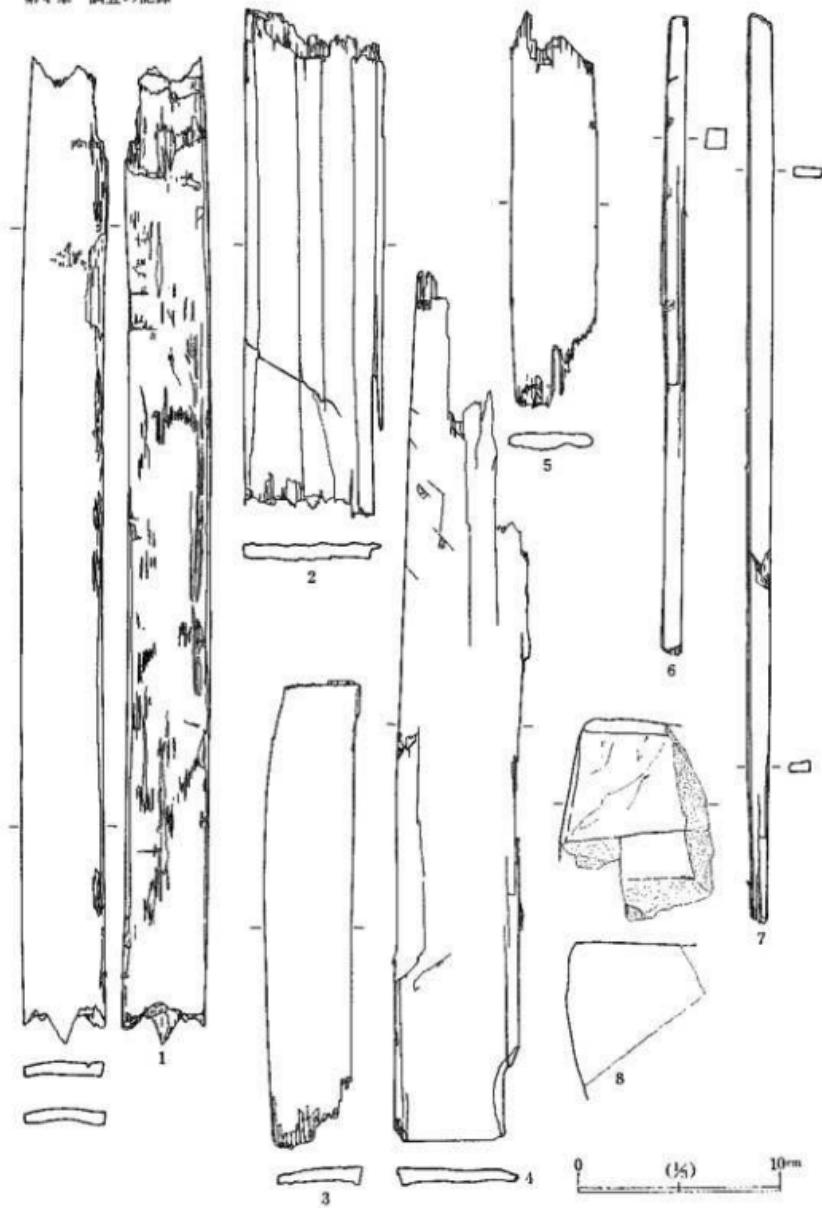
＜遺物・その他＞中位に20cm前後の石が数点みつかっており、縁辺に使用していたものが落ちてきたと思われる。また下位より、第16図に示した木製品・砥石が出土した。1は曲げ物の縁と思われるもので、幅4cm、厚さ1cmで表面がなめらかである。2～5は板、6・7は細い棒である。8は砥石で一面が磨面となっている。

小穴群

＜位置・確認状況＞MF40・MG40グリッドの平坦部で、明黄褐色土層面を精査して、直径20cm前後の小さい穴を20個確認した。浅い柱穴状の掘り込みであったが、配列に規則性は認められなかった。

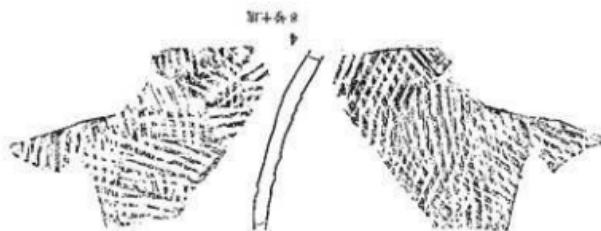
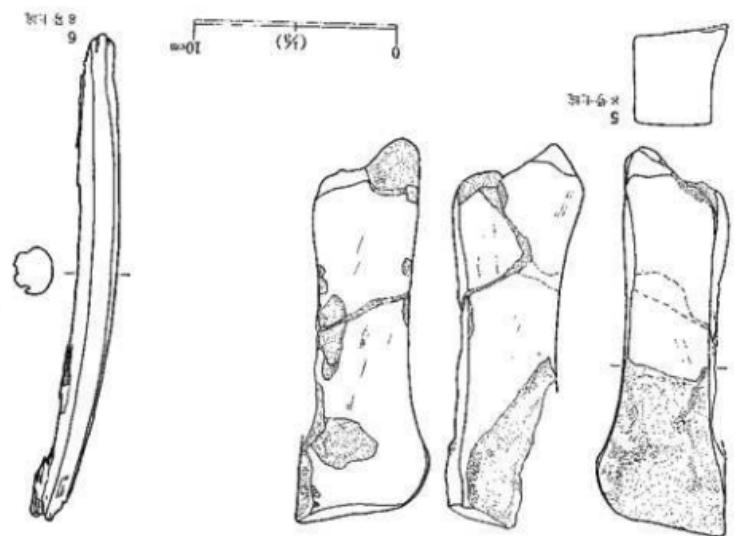


第15圖 第5号井戸跡、第7・8号土坑



第16図 第5号井戸跡出土遺物

第17圖 第7・8號土坑出土遺物



第2圖 敦出露頭上出土遺物

[中腹斜面における火葬墓群]

東向き斜面の中腹部にまとまっており、標高18~15mの範囲にある。いずれも表土が浅く、すぐ下の地山の明黄褐色土層で確認した。大部分は削平されているものと考えられる。周辺からの出土遺物はきわめて少ない。

第4号火葬墓 (S X01)

<位置・確認状況>ME 60グリッドの南東側で、木炭が充填した穴として確認した。

<平面形・規模>橢円形を呈しており、東西に長軸方向をもっている。長径66cm、短径54cmであり、確認面から最深部まで12cmを測る。

<埋土の状況>木炭が大量に入った褐色土が充填していた。

<壁・底面の状況>地山を浅く皿状に掘り込んでおり、底面中央までゆるやかに落ち込む。

<遺物・その他>埋土中に木炭とともに骨片がわずかに含まれていた。

第5号火葬墓 (S X03)

<位置・確認状況>MF 60坑周辺で、広範囲に木炭が入る黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>東側が削平されている。北東にコーナーをもつことから長方形の掘り込みとも考えられる。東西に長軸方向をもっている。長さ370cm、最大幅140cmであり、確認面から最深部まで16cmを測る。

<埋土の状況>薄いが3層に分かれる。上位で南西側と北東側に分かれて直径50cm前後の木炭のまとまりがあり、中位は炭が入った褐色ないし黒褐色土で5cm前後の厚さがある。下位は地山ブロックが混在した黄褐色土である。

<壁・底面の状況>掘り込みが浅く底面は平坦である。長軸ラインの中央に直径20cmの小さな落ち込みがある。

<遺物・その他>出土遺物はない。

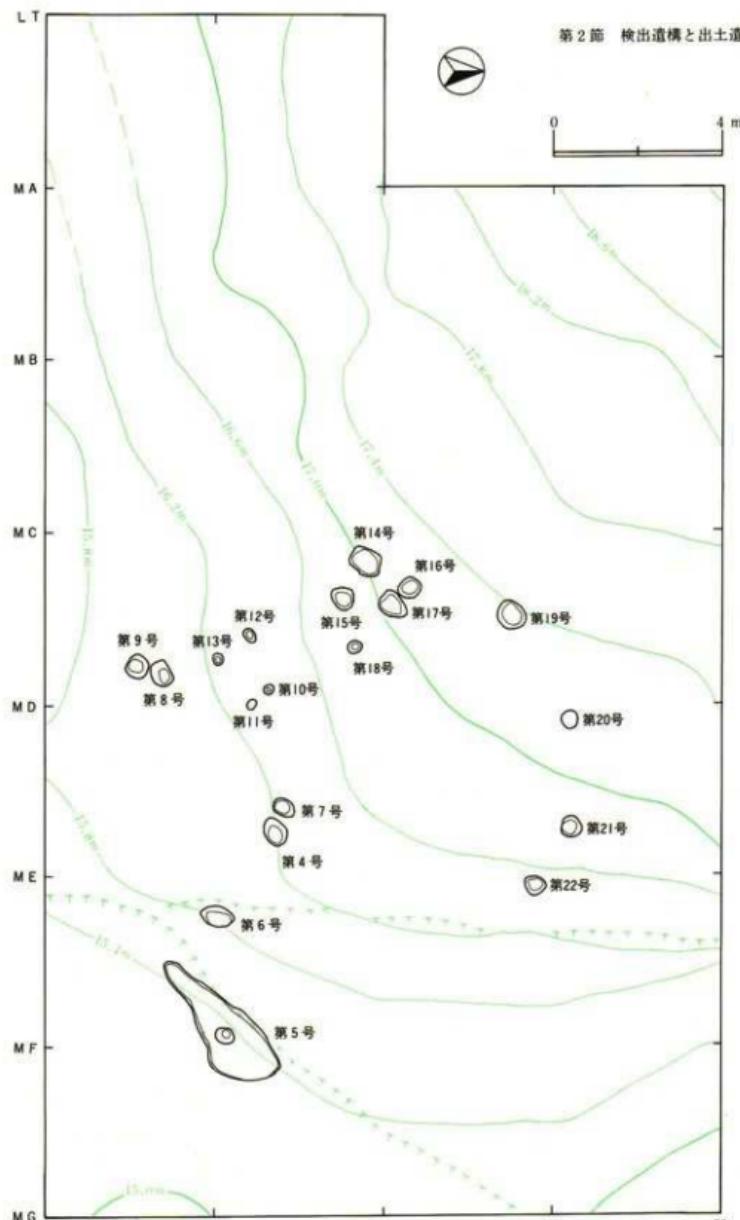
第6号火葬墓 (S X04)

<位置・確認状況>MF 60グリッドの南側で、東側が削平され、木炭・焼土を含む土が地山の明黄褐色土層より盛り上がった状態で確認された。

<平面形・規模>橢円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径78cm、短径48cmであり、確認面から最深部まで12cmを測る。

<埋土の状況>東西で分かれる。東側は黄褐色ないし褐色土で、西側には黒褐色土が覆う。東側では木炭および焼土がまばらに混在し、西側には木炭がわずかに混在している。底面中央にうすく木炭が混在する黒色土が入る。

第2節 検出遺構と出土遺物



第18図 III区遺構位置図

第4章 調査の記録

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれており、底面中央がわずかに落ち込んでいる。
＜遺物・その他＞埋土中に骨片が混在しており、底面よりやや浮いた状態で「政和通宝」1点
と他の銅錢（文字不明）1点が重なって出土した。

第7号火葬墓（S X05）

＜位置・確認状況＞ME 60グリッドの北東側で、第4号火葬墓のすぐ西隣に位置している。わずかに炭を含む褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径50cm、短径38cm
であり、確認面から最深部まで10cmを測る。

＜埋土の状況＞浅く褐色土が覆っている。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。底面中央がゆるく落ち込む。

＜遺物・その他＞埋土中に骨片が多く混在していた。

第8号火葬墓（S X06）

＜位置・確認状況＞MD59グリッドの東側で、第9号火葬墓のすぐ北隣に位置している。暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈しており、東西に長軸方向をもっている。長径63cm、短径54cm
であり、確認面から最深部まで10cmを測る。

＜埋土の状況＞上は東西に分けられる。東側には軟質の暗褐色土が、西側はやや硬質の黒褐色土
上が覆う。下は底面より盛り上がった状態で焼土・木炭粒子が混在した暗褐色・黒褐色土がある。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれおり、底面中央がわずかに落ち込んでいる。

＜遺物・その他＞東寄りの底面よりやや浮いた状態で銅錢（文字不明）が出土した。骨片は最
が多く、底面西側にまとまっていた。

第9号火葬墓（S X07）

＜位置・確認状況＞MD59グリッドの南側、第8号火葬墓のすぐ南隣に位置している。木炭
が充填した落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞楕円形を呈している。長径60cmであり、確認面から最深部まで12cmを測る。

＜埋土の状況＞上位は、木炭が細く碎けたものを含む黒色土が覆い、その南西側に焼土ブロック
が混在していた。下位は黒褐色土であり、木炭片・焼土粒子が混在していた。

＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれおり、底面は平坦である。

＜遺物・その他＞木炭とともに、上位と下位の埋土に骨片が混在していた。

第10号火葬墓（S X 08）

- ＜位置・確認状況＞MD60グリッドの南東側にまとまる小穴状の火葬墓群の一つである。わずかに木炭が混在した落ち込みとして確認した。
- ＜平面形・規模＞直径20cmの円形を呈している。確認面から最深部まで13cmを測る。
- ＜埋土の状況＞黒色土が充填していた。
- ＜壁・底面の状況＞すり鉢状に落ち込み両側がやや深い。
- ＜遺物・その他＞出土遺物はない。

第11号火葬墓（S X 09）

- ＜位置・確認状況＞MD60グリッドの南東側で、木炭のまとまりとして確認した。
- ＜平面形・規模＞直径20cmの円形を呈している。確認面からの深さは2cm程度であった。
- ＜埋土の状況＞細かく碎けた木炭がまとまっていた。
- ＜壁・底面の状況＞削平されているが、皿状の浅い掘り込みと思われる。
- ＜遺物・その他＞底面で銅鏡（文字不明）が出土した。

第12号火葬墓（S X 10）

- ＜位置・確認状況＞MD60グリッドの南東側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。
- ＜平面形・規模＞直径30cmの円形を呈している。確認面から最深部まで7cmを測る。
- ＜埋土の状況＞上位にうすく木炭片が混在した黒褐色土が覆い、下位は褐色土と黄褐色土が混じり合っており、木炭片がわずかに入る。
- ＜壁・底面の状況＞地山が浅く皿状に掘り込まれている。
- ＜遺物・その他＞埋土中にわずかに骨片が混在していた。

第13号火葬墓（S X 11）

- ＜位置・確認状況＞MD60グリッドの南東側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。
- ＜平面形・規模＞直径26cmの円形を呈している。確認面から最深部まで14cmを測る。
- ＜埋土の状況＞軟質の黒褐色土が覆い、下位に明黄褐色土ブロックが混在していた。
- ＜壁・底面の状況＞地山を浅く掘りくぼめている。
- ＜遺物・その他＞埋土中にわずかな骨片が混在していた。

第14号火葬墓（K S B 11）

- ＜位置・確認状況＞MD60グリッドの北西側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

第4章 調査の記録

- <平面形・規模>椭円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径71cm、短径60cmで確認面より最深部まで12cmを測る。
- <埋土の状況>比較的軟質の黒褐色土、暗褐色土が覆い、南側に木炭片がまとまっていた。
- <壁・底面の状況>地山が浅く皿状に掘り込まれている。
- <遺物・その他>出土遺物はない。

第15号火葬墓（K S B12）

- <位置・確認状況>MD60グリッドの北西側で、黒色土の落ち込みとして確認した。
- <平面形・規模>ほぼ円形を呈している。直径51cmで、確認面から最深部まで6cmを測る。
- <埋土の状況>東西で分かれ、東側は木炭が混在した黒色土、西側は暗褐色土が充填していた。
- <壁・底面の状況>地山が浅く皿状に掘り込まれている。
- <遺物・その他>埋土中にわずかな骨片が混在している。

第16号火葬墓（K S B13）

- <位置・確認状況>MD61グリッドの南側で、黒色土の落ち込みとして確認した。
- <平面形・規模>直径42cmの円形を呈している。確認面から最深部まで26cmを測る。
- <埋土の状況>東側では木炭が混在する軟質の黒色土が、西側には焼上ブロックが混在する黒褐色土が覆う。
- <壁・底面の状況>地山が丸みをもって深く掘り込まれている。
- <遺物・その他>埋土中にわずかな骨片が混在していた。

第17号火葬墓（K S B14）

- <位置・確認状況>MD61グリッドの南側で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。
- <平面形・規模>椭円形を呈しており、東西に長軸方向をもっている。長径66cm、短径50cmであり、確認面から最深部まで8cmを測る。
- <埋土の状況>軟質の黒色土が覆い、南側の底面に木炭が混在している。
- <壁・底面の状況>地山が浅く皿状に掘り込まれている。
- <遺物・その他>出土遺物はない。

第18号火葬墓（K S B15）

- <位置・確認状況>MD61グリッドの北側で、木炭が混在する黒褐色土の落ち込みを確認した。
- <平面形・規模>直径58cmの円形を呈している。確認面から最深部まで7.5cmを測る。

<埋土の状況>木炭片が密に混在する黒褐色土が充填していた。

<壁・底面の状況>南側の壁がゆるやかに落ち、底面は平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。

第19号火葬墓（K S B17）

<位置・確認状況>MD61グリッドの北側で、木炭片が多く混在する黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>梢円形を呈しており、南北に長軸方向をもっている。長径68cm、短径58cmであり、確認面から最深部まで20cmを測る。

<埋土の状況>木炭片が多く混在する黒褐色土が充填していた。

<壁・底面の状況>地山が皿状に掘り込まれている。

<遺物・その他>埋土中にわずかな骨片が入っていた。

第20号火葬墓（K S B18）

<位置・確認状況>MC62グリッドの南西隅で、地山に木炭が付着した状態で確認した。

<平面形・規模>直径40cmのほぼ円形を呈している。

<遺物・その他>出土遺物はない。

第21号火葬墓（K S B19）

<位置・確認状況>ME62グリッドの南西側で、木炭が混在した黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>直径42cmの円形を呈している。確認面から最深部まで7cmを測る。

<埋土の状況>5mm前後の木炭片が充填していた。

<壁・底面の状況>地山が浅く皿状に掘り込まれている。

<遺物・その他>埋土中に骨片が混在していた。

第22号火葬墓（K S B20）

<位置・確認状況>MF61グリッドの北西隅で、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

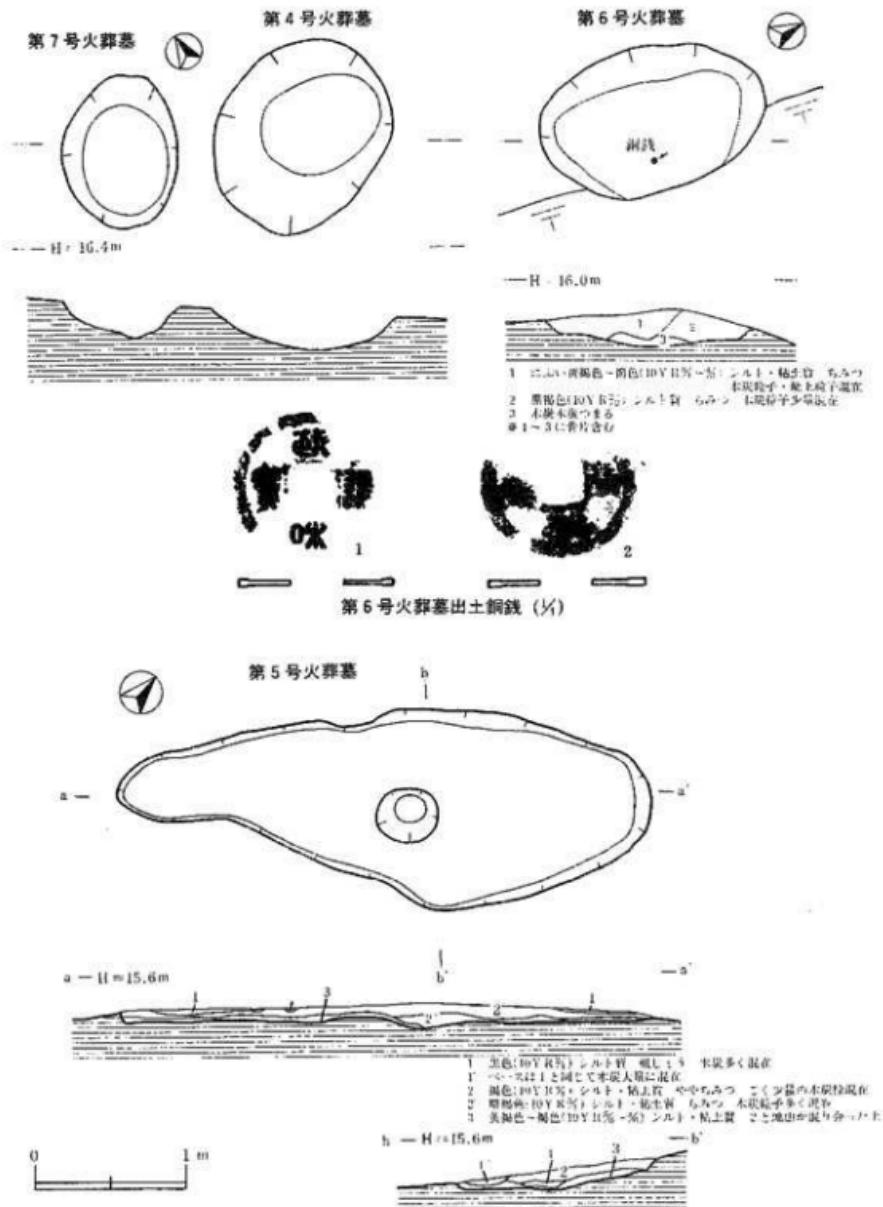
<平面形・規模>不整円形を呈し、最大径44cmである。確認面から最深部まで7cmを測る。

<埋土の状況>木炭粒子と焼土粒子が混在する黒褐色土が充填していた。

<壁・底面の状況>西側がやや深く垂直に掘り込まれており、東側は平坦である。

<遺物・その他>出土遺物はない。

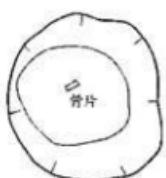
第4章 調査の記録



第19図 第4～7号火葬墓・出土銅錢

第2節 検出構造と出土遺物

第9号火葬墓



— H = 16.5m —

第8号火葬墓



骨片



- 1 強かく研げた木炭層、南西端で地土ゾックあり
- 2 黒褐色(10Y R 5%) シルト質 ややちみつ
- 3 地山に下層かに混在。本炭部下部に多い。
- 4 黑褐色(10Y R 5%) ネット質 粗じょう
- 5 上層子、本炭粒子を多く混在

■ 1 ~ 3 に骨片含む

- 1 喀褐色(10Y R 5%~7%) シルト・粘土質 粗じょう
- 2 黒褐色(10Y R 5%) シルト質 ややちみつ
- 3 喀褐色(10Y R 5%~7%) シルト・粘土質 粗じょう
- 4 地山粒子、地上粒子、本炭粒子を多く混在

■ 3 に骨片含む

④ 第11号火葬墓



— H = 16.5m —



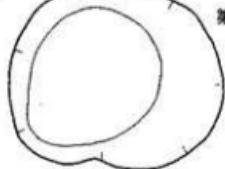
1

第8号火葬墓出土銅鏡 (1/2)



- 1 喀褐色(10Y R 5%) シルト質 粗じょう 本炭粒子混在

第14号火葬墓



— H = 17.25m —

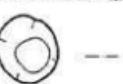
地山ブロック



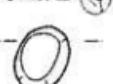
- 1 喀褐色土(10Y R 5%) シルト質 粗じょう 本炭内混在
- 2 喀褐色土(10Y R 5%) シルト質 粗じょう
- 3 本炭まとま

第20図 第8~15号火葬墓・出土銅鏡

① 第10号火葬墓 第13号火葬墓



— H = 16.4m —



— H = 16.4m —

- 1 黒褐色(10Y R 5%) シルト質 本炭粒子、骨片を混在
- 2 喀褐色(10Y R 5%) シルト・粘土質 ややちみつ
- 3 地山ブロックが混じり合う

第12号火葬墓

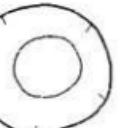


— H = 16.5m —



- 1 黒褐色(10Y R 5%~7%) シルト質 粗じょう 本炭粒子混在
- 2 に赤い黄褐色(10Y R 5%) シルト・粘土質 ややちみつ
- 3 地上と喀褐色粘土が混じり合う
- 4 地底はごく薄少。それも地盤段をなす

第15号火葬墓



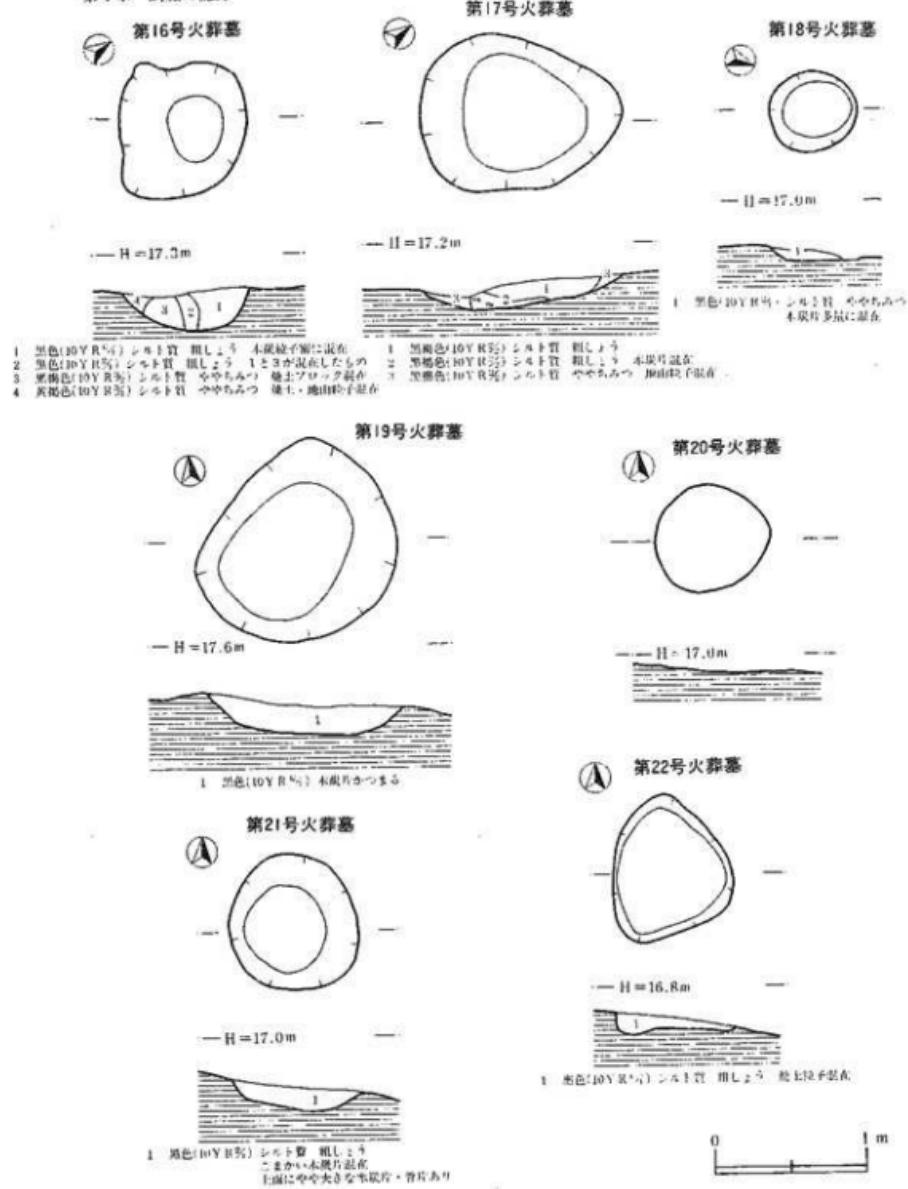
— H = 17.25m —



- 1 黒褐色土(10Y R 5%) シルト質 粗じょう 本炭粒子混在
- 2 喀褐色土(10Y R 5%) シルト質 粗じょう
- 3 地山ブロック混在



第4章 調査の記録



第21図 第16～22号火葬墓

第3節 遺構外の出土遺物

前節では、遺構に伴う遺物についてだけ、紹介してきたが、ここではI～III区の遺構外の遺物を集約した。材質によって大分類し、さらに種類毎に器形・製作技法について観察を行い、年代的な考察を付した。

出土遺物を材質および種類で分類すると以下のとおりである。

〔土製品〕 A：土器— a：土師器（内黒上器）、b：赤焼土器、c：須恵器

B：陶磁器— a：灰釉陶器、b：須恵系陶器、c：輸入磁器、d：施釉陶器

e：染付け陶磁器

C：その他土製品— a：土鍤、b：陶鍤、c：埴、d：ふいごの羽口

e：瓦質土製品

〔石製品〕 石器、砾石

〔金属製品〕 銭貨、鉄塊

〔土製品〕

A：土器について

土器は焼成の違いによって、酸化焰焼成のa：土師器、b：赤焼土器、還元焰焼成のc：須恵器に分けた。それぞれで成形技法・調整技法について観察を行い、分類した。

a：土師器

ロクロで成形されており、内面をミガキ調整後、黒色処理しているものである。杯・甕の種類がある。

< I : 杯 > — 第22図1～3 —

赤焼土器杯と比べて大型のものが1点、小型のものが1点ある。底部外面はナデられて平滑である。他に高台付杯の底部があり、底部周辺をつまみ高台を引きだしており、底部には回転糸切り痕が残っている。

< II : 甕 > — 第22図4 —

小形の広口甕である。底部より丸みをもって立ち上がり、胴部上位でくびれ、口縁部が短く外反している。短く立ち上がる口唇部が特徴的である。底部の切り離しは、回転糸切りであり、胴部下半から底辺部にかけてケズリ調整が施されている。内面のミガキの方向は、胴部上半から底部にかけて竪位に走っている。

b：赤焼土器

ロクロで成形されており、内面が黒色処理されていないものである。杯の他に甕がある。

< I : 杯>—第22図5~10、第23図1~5—

形態のちがいで三つに分けられる。

1. 器高が低く底部が大きい。体部から口縁部までが短く、丸みをもって立ち上がる。
 2. 器高が高く底部が大きい。体部から口縁部にかけてややふくらみをもって立ち上がる。
 3. 器高が低く底部が小さい。体部から口縁部にかけてわずかに丸みをもって外傾している。
- < II : 蓋>—第23図6~24—

実測図に復元できるものではなく、口縁部・胴部・底部の各部位をピックアップして調整技法を書き込んだ。ただし大型・小型のものを分けていない。

c : 須恵器

器種は杯・蓋・甕・壺がある。

< I : 杯>—第24図1~9、第25図1~8—

ロクロで成形されており、底部の切り離し手法と形の違いによって分類した。

1. 底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもので、器高が低く底部の大きいものである。体部から口縁部までが短く、丸みをもって立ち上がる。
2. 底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもので、器高が高く底部が大きいものである。体部から口縁部までが短く、直線的に立ち上がる。
3. 底部の切り離しが回転糸切りによるもので、器高が高く底部が小さい。体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾している。
4. 底部の切り離しが回転糸切りによるもので、器高が低く底部が小さい。体部から口縁部にかけてやや丸みをもって外傾している。

< II : 蓋>—第25図9~11—

3点出土しており、そのうちの1点がつまみ部を含めて3分の1程遺存している。つまみ部は低く、中央が凹んでいる。体部はつまみ部周辺が平坦でわずかな丸みをもって端部まで下る。端部はほぼ垂直に折り込まれ、その断面は三角形を呈している。内面との境は判然としている。

他の1点は、端部のつくりはほぼ同じであるが、肩が急に下がる形状を呈している。

< III : 甕>—第26図1~8、第27図1~6、第28図1~6—

口縁部から胴部上半にかかる大型のものが1点復元できた。胴部の肩が張り、つよく外反する口縁部との境も明瞭である。口唇がハチマキ状の張り出しになっている。その他の甕は破片であり、口縁部・胴部・底部の各部位をピックアップした。ただし大型・中型のものが混在している。各部位について特徴を上げる。

*口縁部では、口唇部のつくりに違いがみられる。口唇が鋭角に立つものと鈍角の斜めになる

ものがある。

*胸部は外面に叩き目、内面にあて具痕がみられるが、叩き目は平行な板目ないし布目であり、あて具痕はい心円になるものと平行になるものがあり、胸部の位置でかわっているようである。底部は大型のものは丸底を量すると思われるが、中型のものについては平底ないし高台のつくものの二種類がある。

<IV：奈>—第29図1～8—

長頸壺になると思われるものが3点あり、大小がある。胸部は丸みをもっているが、上半で肩が張っている。胸部と口縁部は別々につくり、後に接合を行っている。いずれも底部に高台が付いている。

B：陶磁器について

a：灰釉陶器

<淨瓶>—第29図9—

1点だけである。口縁部・高台が欠損しており、胸部が残っている。その胸部の肩に受け口がつく。長頸壺と同様に口縁部と胸部のつくりが別々で接合した痕跡が胸部にみえる。底部の切り離しは静止糸切りと思われ、高台に沿った内側をナデている。

b：須恵系陶器

<I：鉢、擂鉢>—第30図1～9、第31図1～11、第32図1～6—

口縁部・体部・底部のそれぞれの破片が多い。擂鉢は一般的に内面の卸し目の数が、時代が新しくなるほど多くなるといわれ、卸し目の状態に注目して分類を行った。

1. 擂鉢よりかなり薄手の鉢がある。外面は平滑であるが、内面はロクロ成形の凹凸を残している。底部の切り離しは静止糸切りで、底辺部が外に張り出している。体部は丸みをもって外傾している。

2. 卸し目どうしの間隔がかなり開いており、体部中位から下に引かれているものである。また卸し目の器面に対するあたりが弱い。口唇部をみると、外面が斜めに面取りされており内側が高くなっている。

3. 卸し目どうしの間隔がやや狭まっており、体部上位から下に卸し目が引かれている。卸し目の器面に対するあたりが強く、溝が深くなっている。口唇部をみると、内側が2cm前後の幅で面取りされており、外側が高くなっている。

4. 卸し目どうしが重なるように引かれたもので、体部が1点だけある。口唇部と口縁部外面に櫛目波状文が入ったものがあり、ここに含めた。

第4章 調査の記録

底部はほとんどが、2・3類に対応すると思われるものであり、使用頻度がたかいことを示しているのか平滑になっている。とくに体部の厚味に対して底部が薄くなっている。

<II：大甕・壺>—第33図1～6、第34図1～6—

一定の斜め方向に平行叩き目が施され、内側には円形に凹むあて其痕が残る。

<III：小壺>—第34図7・8—

底部が2点出土している。底部の器壁が厚く、内側にロクロの凹凸を残している。底部の切り離しは静止糸切りである。

d：輸入磁器

<I：碗>—第35図1～7—

いずれも中國から輸入された青磁の小破片である。外側に幅の広い片切形の鏤蓮弁文をもつものと、内側に画花文をもつものがある。

e：施釉陶器

<I：平碗>—第35図8・9—

口縁部の内外面に円く鉄釉がついているもので、体部・底部は素地のままである。体部が直線的に外傾し、口縁部が短く外反している。生産地は瀬戸・美濃に推定される。

<II：碗>—第35図13・14—

内側は一様に外面は高台近くまで鉄釉がかかる。体部より丸みをもって立ち上がる。高台を張り付け、後に内側を深く削っている。生産地は関西地域に推定される。

<III：小皿>—第35図10—

口縁部の内外面に円く灰釉がついている。体部・底部は素地のままである。生産地は瀬戸・美濃に推定される。

<IV：瓶>—第35図12—

破片で全体の器形は不明であるが、瓶子の肩の部分と思われる。外に鉄釉がかかる。生産地は瀬戸・美濃に推定される。

<V：擂鉢>—第35図15～18—

内面に卸し目が密に施されており、底部には高台をもつ。内外面に鉄釉がうすくかかる。生産地は肥前に推定される。

<VI：蓋>—第35図19—

土師質の素地の表面に黒い釉がかかっている。生産地は関西と推定される。

f：染付け陶磁器

< I : 瓢 > — 第36図 1 ~ 5 —

小ぶりな磁器甕が3点出土しており、外側の染付は花柄と思われる。内側口唇と底面に線が引かれる。4・5も陶器甕の破片であると思われる。

< II : 猪口 > — 第36図 6 ~ 8 —

破片が3点でたてに矢羽状・格子状の線文様が描かれている。

< III : 盆 > — 第36図 11 ~ 13 —

内側の口縁部に文様を描いたものが3点ある。

< IV : 壺 > — 第36図 10 —

破片であり。形状ははっきりしない。

< V : 戸車 > — 第36図 14・15 —

小さなものが、直徑3.6cm、孔径0.8cmを測り、大きなものが直徑4.5cm、孔径1.4cmと推定している。生産地は肥前と推定される。

註) 輸入磁器・施釉陶磁器の生産地は、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の鑑定結果にもとづく。

C : その他の土製品

a : 土鍤 — 第37図 1 ~ 8 —

中央の孔の大きさが1.5~1.7cmとほぼ一定であるが。長さ、および形状がそれぞれちがっている。また完全な形で残る2点の重さを比較したが、89gと107gで重さがちがう。

b : 陶鍤 — 第37図 9 —

1点だけ硬さのことなるものがあり、焼きしまりのようすから陶鍤とした。土鍤にくらべてかなり大きい。

c : 塚 — 第37図 4 —

1点だけ出土している。端に孔が開く。

d : ふいごの羽口 — 第37図 1 ~ 3 —

破片が3点出土している。

e : 瓦質土製品 — 第32図 7 —

大型の鉢の体部破片が1点出土している。表面は灰白色を呈し、内面はなめらかである。

※土器・陶磁器・土製品の年代について

いまだに秋田県では、古代の土器について編年が確立されていない現状にあるが、ここではこれまでの調査成果をふまえて相対的な年代の考察を行いたい。古墳時代以来うけつがれてきた須恵器・土師器にたいして、県内の赤焼土器の出現時期については、9世紀中頃と考えられ

註1)、待入田遺跡にみられる回転糸切りで底部が切り離された調整のない杯と、ロクロ成形された口唇部が立ち上がる變については、9世紀後半に年代が推定される。b I 2・3類とした赤燒土器杯とc I 3類とした須恵器杯は形態・技法の面で共通する特徴をもっており、ほぼ同時期のものと考えられる。ただし c I 1・2類とした回転ヘラ切りの須恵器杯については9世紀代中頃と推定している。また土師器についても、調査区西谷部での其伴が確認されていることからやはり9世紀後半に推定される。

灰釉陶器の淨瓶は、秋田県ではじめて発見されたものである。猿投窯を中心とする編年に対応させると註2)、胴部の肩が張り、受け口部がかなり簡略化されている特徴から11世紀前半の年代が考えられる。

須恵系中世陶器の年代は、珠洲焼きの編年表に照らし合わせて年代を推定した註3)。鉢・擂鉢の1類は珠洲焼き片口鉢のI期(1150~1200年)に、2類はII・III期(1200~1300年)に、3類はIV・V期(1300~1450年)に、4類はVI期(1450~1500年)に対応すると考えられる。小壺はI期に対応すると考えられる。

輸入磁器について、画花文のある青磁は12~13世紀、鎮蓮弁文のものは13~14世紀に推定される註4)。

施釉陶器のうち鉄釉・灰釉が口縁部に円くかかる平碗・皿は、瀬戸・美濃の大窯生産のものと対比させると14~15世紀代に年代が推定される註5)。染付け陶磁器と施釉陶器のII類碗は、17世紀後半から19世紀に年代が推定される註6)。

土鉢は古代から中世、陶鍋は中世に推定される。

註1) 赤燒土器の年代については、私田櫛跡外郭南門北側のSK60土坑から出た嘉祥2年の紀年のある木筒とともに出土した土師器の特徴から推定したものである。

内黒土師器とともに、回転糸切り後に体部から口縁部にかけてヘラ削り調整が施された土師器とした杯、ロクロ調整のある土師器變口縁部破片、回転糸切り底の土師器長胴變破片があり、いずれも酸化焰焼成の土器であり、内黒処理されていないことから、ここで分類した赤燒土器の範疇にはいるものと考えられる。ただし体部調整が行われていることから、待入田遺跡の赤燒土器杯より古い年代に位置づけられる。

註2) 赤燒土器に器高の低い、小ぶりの皿に近い形態のものが入っていないことが、9世紀代にした根拠である。

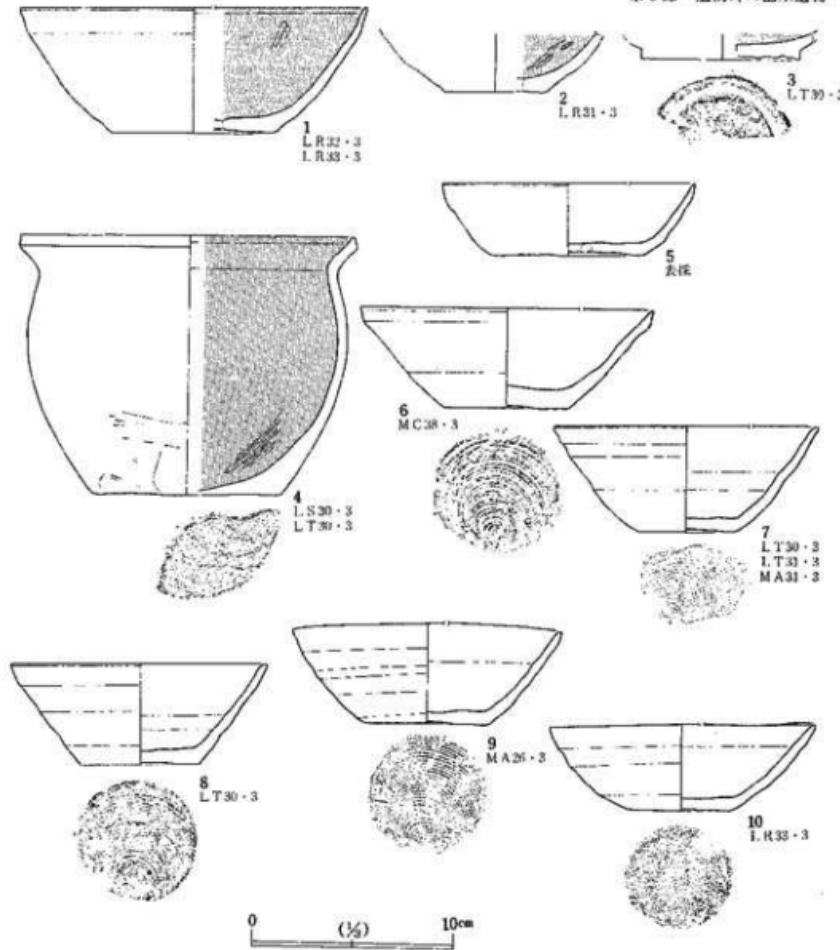
註3) 『日本陶磁全集6白瓷』中央公論社-1976年-の編年表を参考にした。

註4) 『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館-1989年-の編年表を参考にした。

註5) 輸入磁器、施釉陶器、染付け陶磁器の生産地・年代については、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏のご教示によるものである。

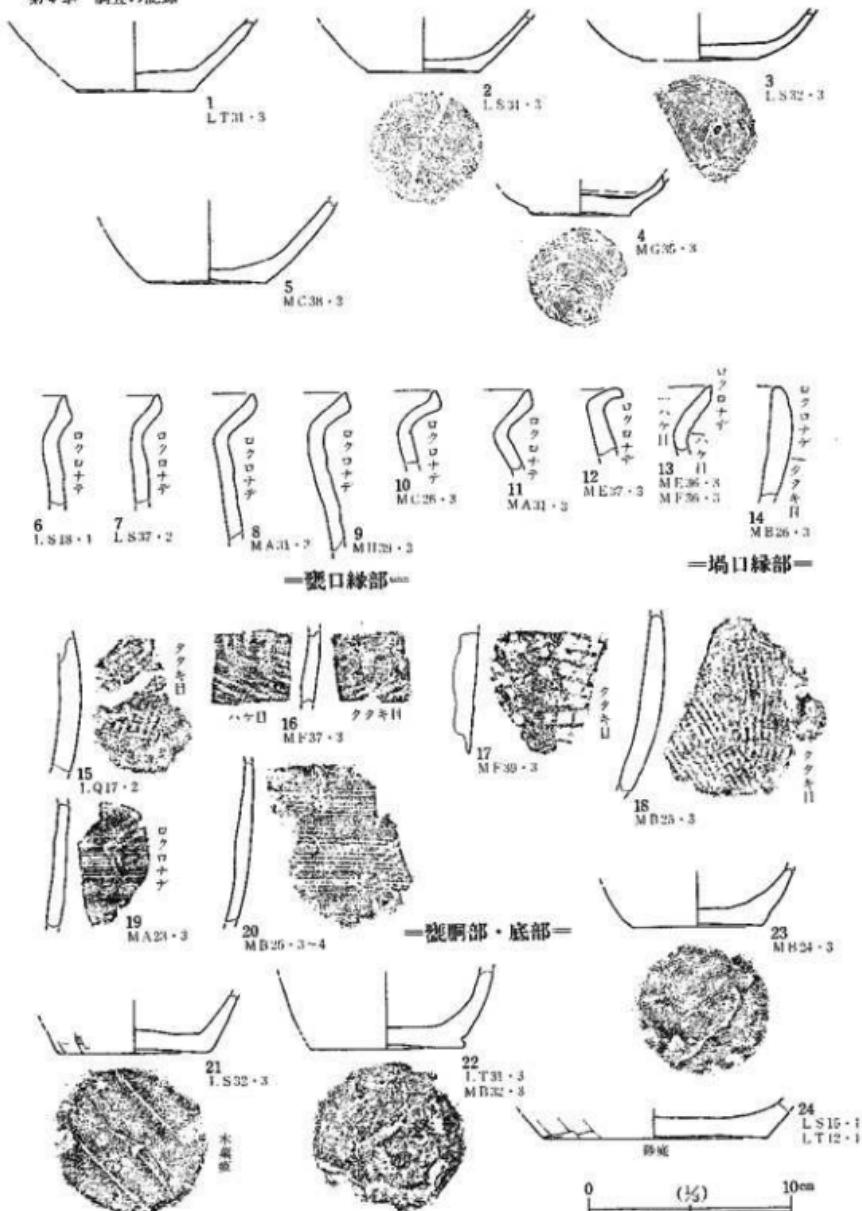
註6) 施釉陶器の瀬戸・美濃の大窯の年代については、瀬戸美濃民俗資料館のご教示を得た。

第3節 造構外の出土遺物



番号	種類	W.H.或り	外側色調	地土	外側被塗	内側被塗	口径	成形	高さ
1	上部器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	117.4	(6.2)	(6.2)
4	土器器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	117.4	(6.2)	(6.2)
5	土器器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	117.3	7.6	3.6
6	底部上器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	114.6	6.2	5.6
7	底部上器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	113.3	3.9	5.3
8	底部上器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	113.0	6.0	5.3
9	底部上器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	113.4	6.2	5.6
10	底部子器耳	A+B	既存品	直上	口縁・底部: ロココナナ 成型: 砂土ナダ	内側: 砂土ナダ 外側: 砂土ナダ	113.4	2.0	4.2

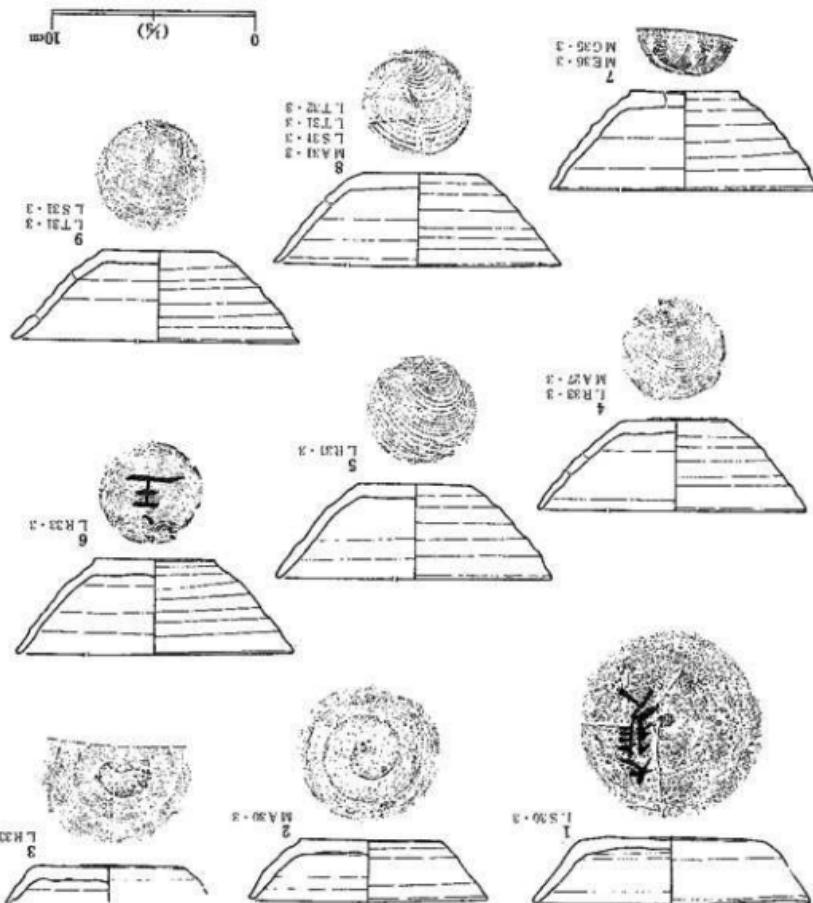
第22図 造構外出土遺物—土器・赤焼土器—



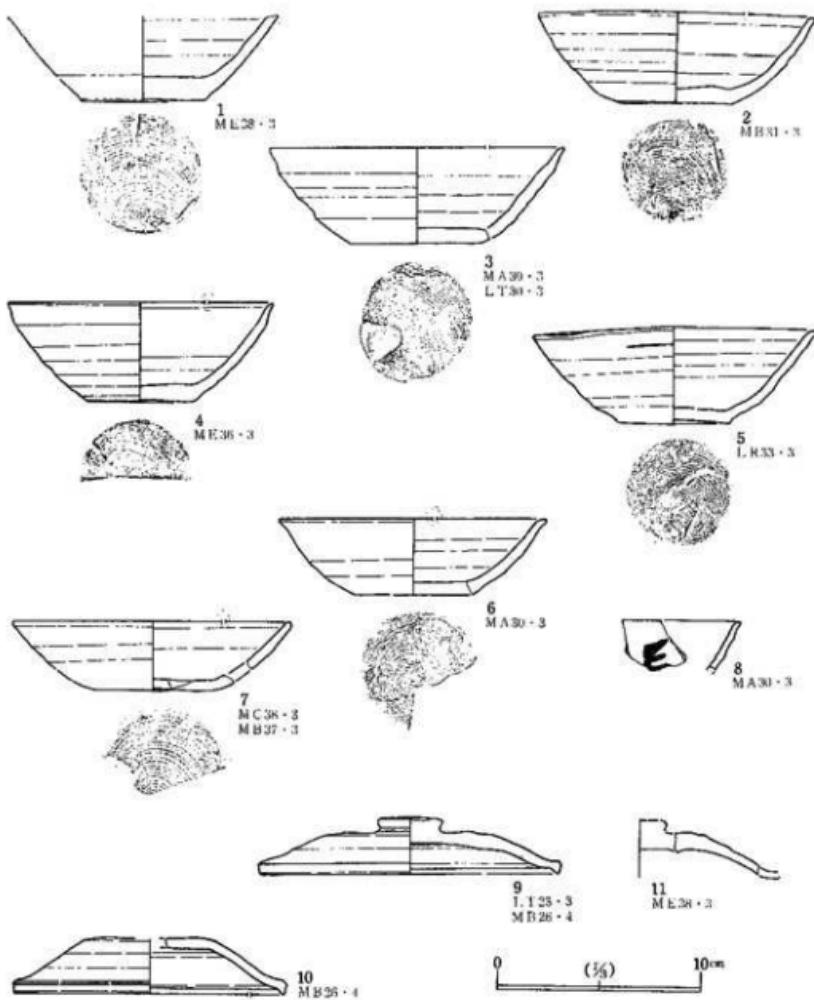
第23図 遺構外出土遺物－赤焼土器－

第24図 遺跡外出土遺物一頭裏器(ア)-

年号	品名	色別	総数	個数	割合
正徳	青磁	青	50	22	44%
正徳	青磁	白	50	18	36%
正徳	青磁	茶	50	10	20%
正徳	青磁	黒	50	0	0%
承応	白磁	白	50	48	96%
承応	白磁	茶	50	1	2%
承応	白磁	黒	50	1	2%
正徳	白磁	白	50	32	64%
正徳	白磁	茶	50	17	34%
承応	白磁	白	50	42	84%
承応	白磁	茶	50	6	12%
承応	白磁	黒	50	2	4%
正徳	白磁	白	50	37	74%
正徳	白磁	茶	50	12	24%
正徳	白磁	黒	50	1	2%
正徳	白磁	青	50	0	0%
承応	白磁	白	50	40	80%
承応	白磁	茶	50	10	20%
承応	白磁	黒	50	0	0%
正徳	白磁	白	50	29	58%
正徳	白磁	茶	50	19	38%
正徳	白磁	黒	50	2	4%
承応	白磁	白	50	35	70%
承応	白磁	茶	50	14	28%
承応	白磁	黒	50	1	2%
正徳	白磁	白	50	26	52%
正徳	白磁	茶	50	21	42%
正徳	白磁	黒	50	3	6%
承応	白磁	白	50	30	60%
承応	白磁	茶	50	18	36%
承応	白磁	黒	50	2	4%
正徳	白磁	白	50	28	56%
正徳	白磁	茶	50	20	40%
正徳	白磁	黒	50	2	4%
承応	白磁	白	50	27	54%
承応	白磁	茶	50	19	38%
承応	白磁	黒	50	4	8%
正徳	白磁	白	50	25	50%
正徳	白磁	茶	50	20	40%
正徳	白磁	黒	50	5	10%
承応	白磁	白	50	23	46%
承応	白磁	茶	50	18	36%
承応	白磁	黒	50	9	18%
正徳	白磁	白	50	21	42%
正徳	白磁	茶	50	19	38%
正徳	白磁	黒	50	10	20%
承応	白磁	白	50	20	40%
承応	白磁	茶	50	18	36%
承応	白磁	黒	50	12	24%
正徳	白磁	白	50	19	38%
正徳	白磁	茶	50	18	36%
正徳	白磁	黒	50	23	46%
承応	白磁	白	50	18	36%
承応	白磁	茶	50	18	36%
承応	白磁	黒	50	14	28%
正徳	白磁	白	50	17	34%
正徳	白磁	茶	50	17	34%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	16	32%
承応	白磁	茶	50	16	32%
承応	白磁	黒	50	18	36%
正徳	白磁	白	50	16	32%
正徳	白磁	茶	50	16	32%
正徳	白磁	黒	50	18	36%
承応	白磁	白	50	15	30%
承応	白磁	茶	50	15	30%
承応	白磁	黒	50	17	34%
正徳	白磁	白	50	14	28%
正徳	白磁	茶	50	14	28%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	13	26%
承応	白磁	茶	50	13	26%
承応	白磁	黒	50	16	32%
正徳	白磁	白	50	12	24%
正徳	白磁	茶	50	12	24%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	11	22%
承応	白磁	茶	50	11	22%
承応	白磁	黒	50	16	32%
正徳	白磁	白	50	10	20%
正徳	白磁	茶	50	10	20%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	9	18%
承応	白磁	茶	50	9	18%
承応	白磁	黒	50	16	32%
正徳	白磁	白	50	8	16%
正徳	白磁	茶	50	8	16%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	7	14%
承応	白磁	茶	50	7	14%
承応	白磁	黒	50	16	32%
正徳	白磁	白	50	6	12%
正徳	白磁	茶	50	6	12%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	5	10%
承応	白磁	茶	50	5	10%
承応	白磁	黒	50	16	32%
正徳	白磁	白	50	4	8%
正徳	白磁	茶	50	4	8%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	3	6%
承応	白磁	茶	50	3	6%
承応	白磁	黒	50	16	32%
正徳	白磁	白	50	2	4%
正徳	白磁	茶	50	2	4%
正徳	白磁	黒	50	16	32%
承応	白磁	白	50	1	2%
承応	白磁	茶	50	1	2%
承応	白磁	黒	50	16	32%
正徳	白磁	白	50	0	0%
正徳	白磁	茶	50	0	0%
正徳	白磁	黒	50	16	32%

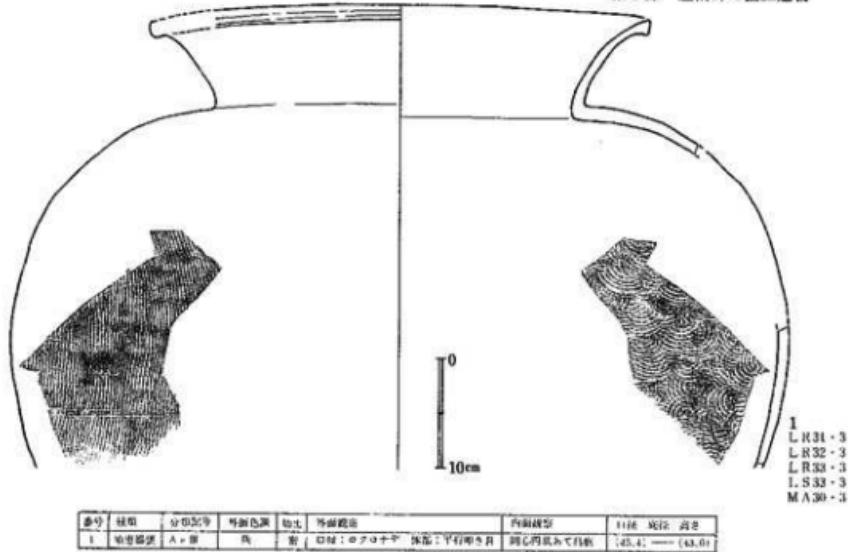


第3節 遺跡外出土遺物

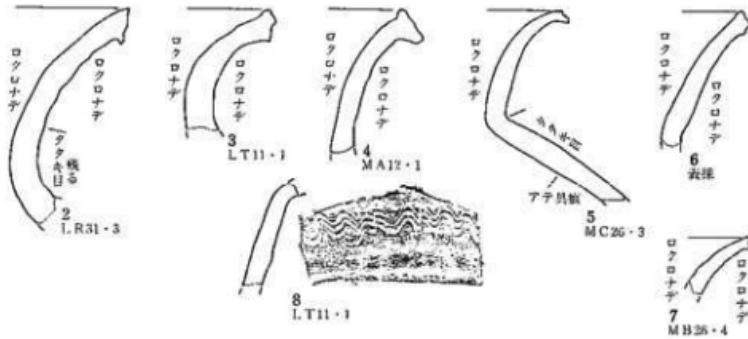


番号	種類	分類記号	外側色調	胎土	外側模様	内側模様	口径	底径	高さ
1	白芯器物	A c 1 2	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	33.2	2.5	4.5
2	白芯器物	A c 1 5	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	34.0	2.0	4.8
3	白芯器物	A c 1 6	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	33.0	2.0	4.0
4	白芯器物	A c 1 9	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	34.1	2.6	4.8
5	白芯器物	A c 2 6	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	33.0	2.0	4.0
6	白芯器物	A c 1 4	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	32.2	2.8	3.8
7	有毛器物	A c 1 4	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	34.0	2.8	4.4
8	有毛器物	A c 2 1	灰	陶	口縁: ロココサザエ	底部: 同上	33.0	2.0	4.8

第25図 造構外出土遺物—須恵器(杯・蓋)—



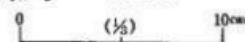
番号	種類	分類記号	当期色調	地土	外縁造形	内縁状態	寸法(底径・高さ)
1	柴世器底	A.面	黄	土	ロクロナデ	平滑無目	143.41 —— [43.0]



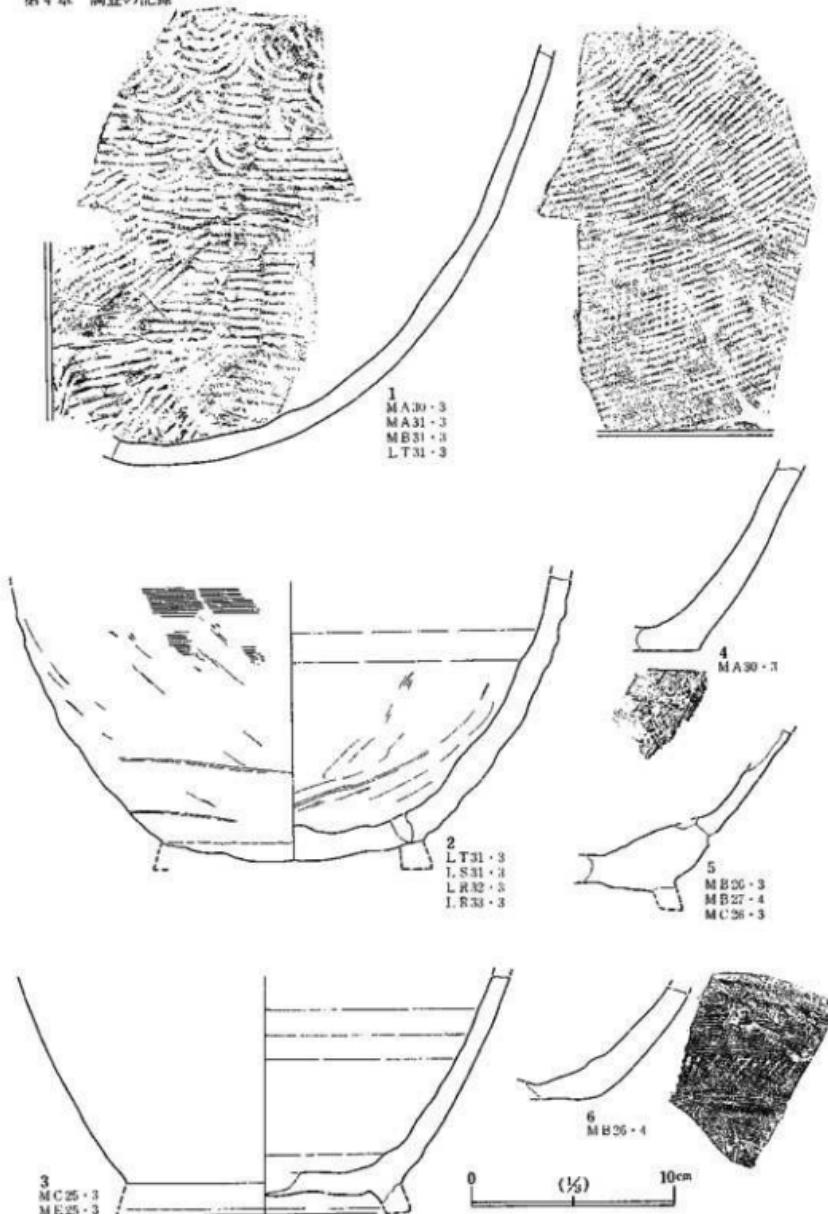
—甕口縁部—



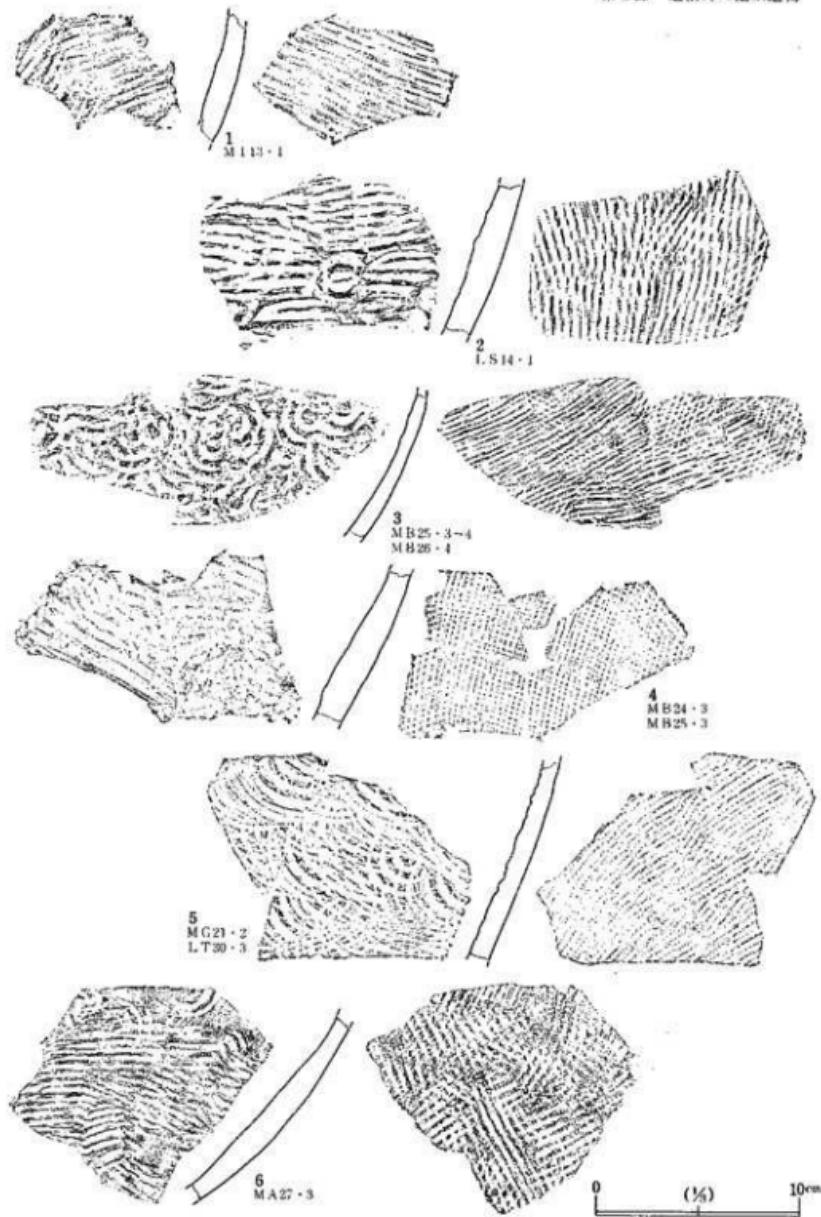
—甕・壺口縁部—



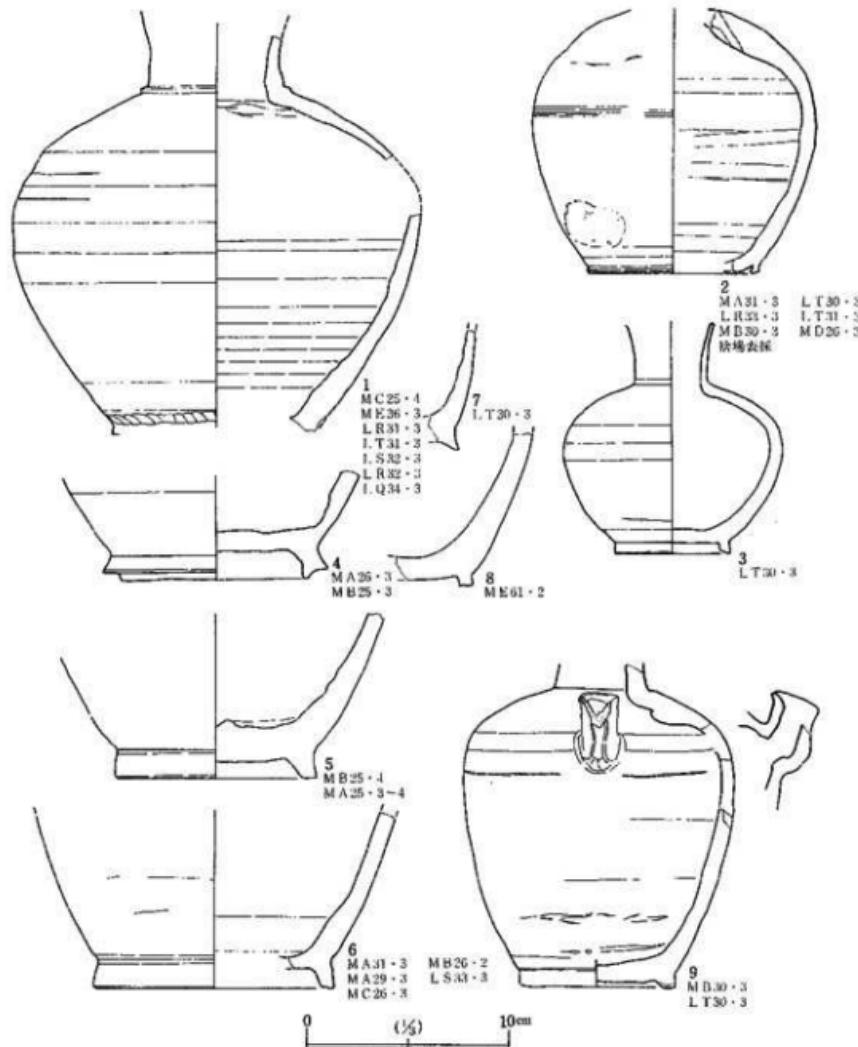
第26図 遺構外出土遺物—須恵器(甕)—



第27図 造構外出土遺物—須恵器(甌)—



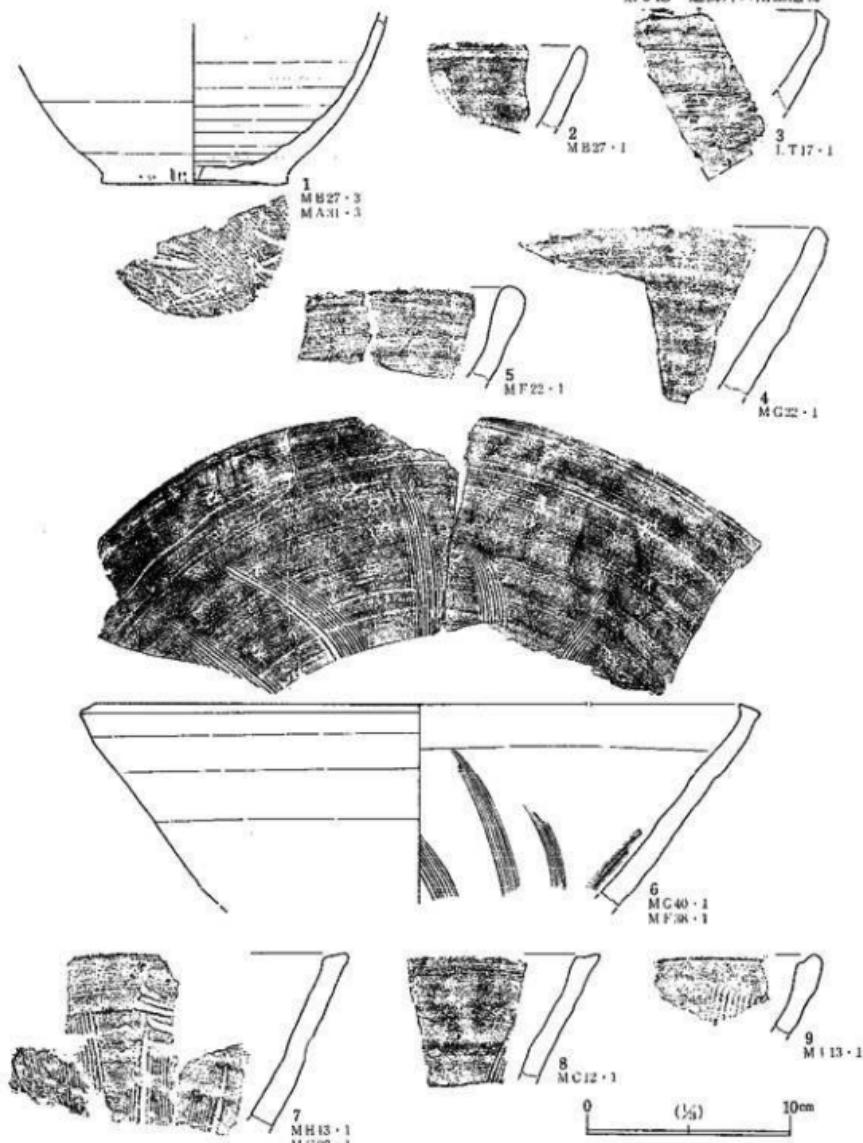
第28図 遺構外出土遺物—須恵器(甌)—



番号	種類	分類記号	外観色調	底上	外観形状	内面観	口径、底径
1	須恵器	A+B	灰	素	口縁:ロクロナギ 体部:ロクロナギ 底部:切欠きナギ	口縁:ロクロナギ 体部:ロクロナギ 底部:無ナギ	— (21.0)
2	須恵器	A+C	灰	素	口縁:ロクロナギ 体部:ロクロナギ 底部:切欠きナギ	— (31.5)	— (5.8)
3	灰釉陶器	H-a	灰白	素	体部:ロクロナギ 底部:切欠きナギ	体部:ロクロナギ	— (17.8) (16.0)

第29図 遺構外出土遺物—須恵器(壺)、灰釉陶器(淨瓶)—

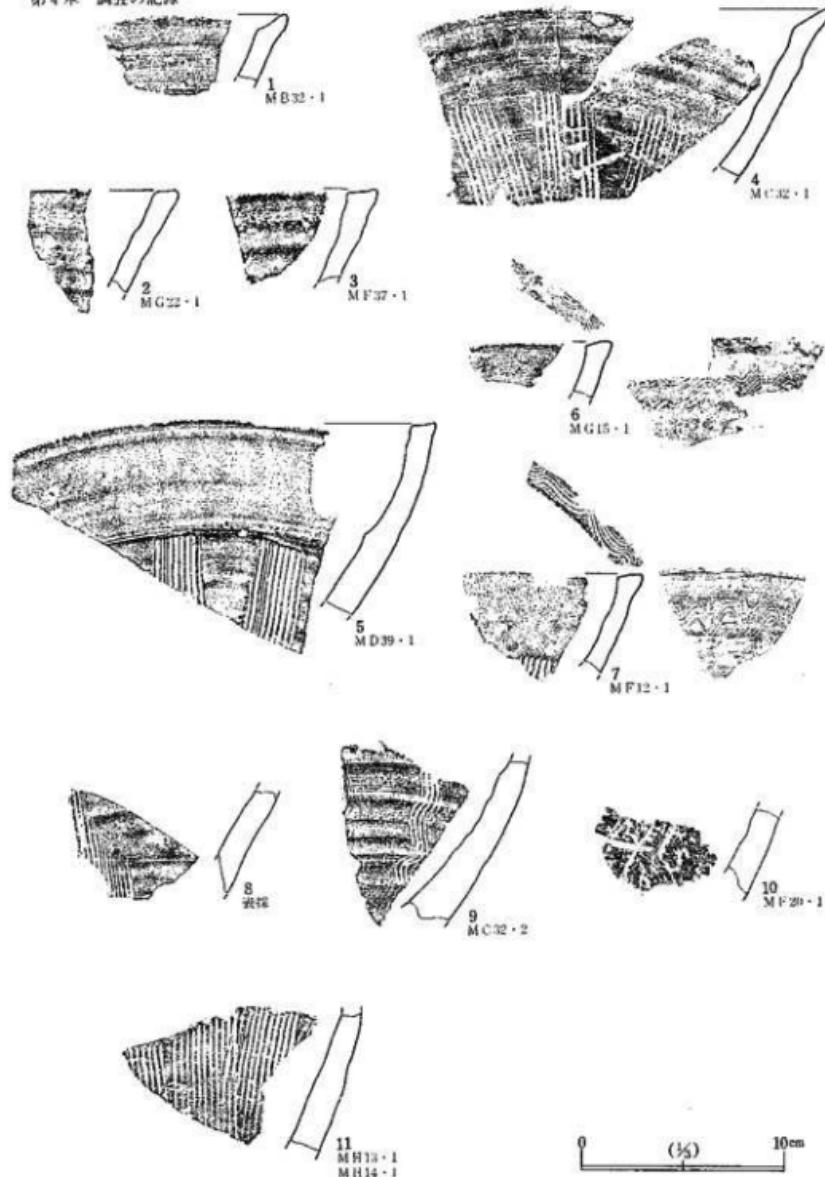
第3節 造構外の出土遺物



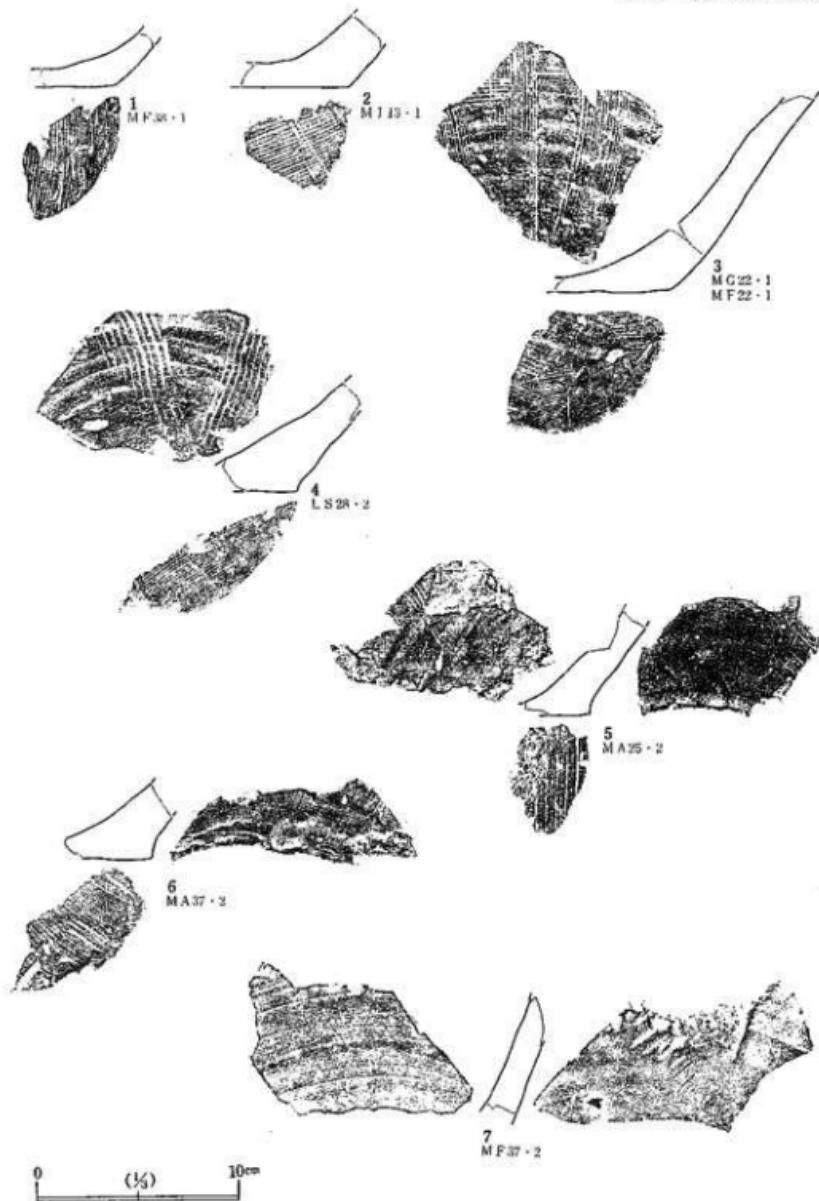
番号	通称	分類記号	外側色調	軸上	外側被着	内側被着	口径	底径	高さ
1	舟形	B6 b 1.1	灰白	素	体部: ハラカナテ 底部: 細部: 細部: 細部: 細部:	内面被着	×	9.3	× 6.0
6	丸鉢	B6 b 1.2	灰	素	口縁: ハラカナテ 底部: ハラカナテ	内面被着	24.0	—	10.0

第30図 造構外出土遺物—須恵系中世陶器(鉢・擂鉢)—

第4表 調査の記録

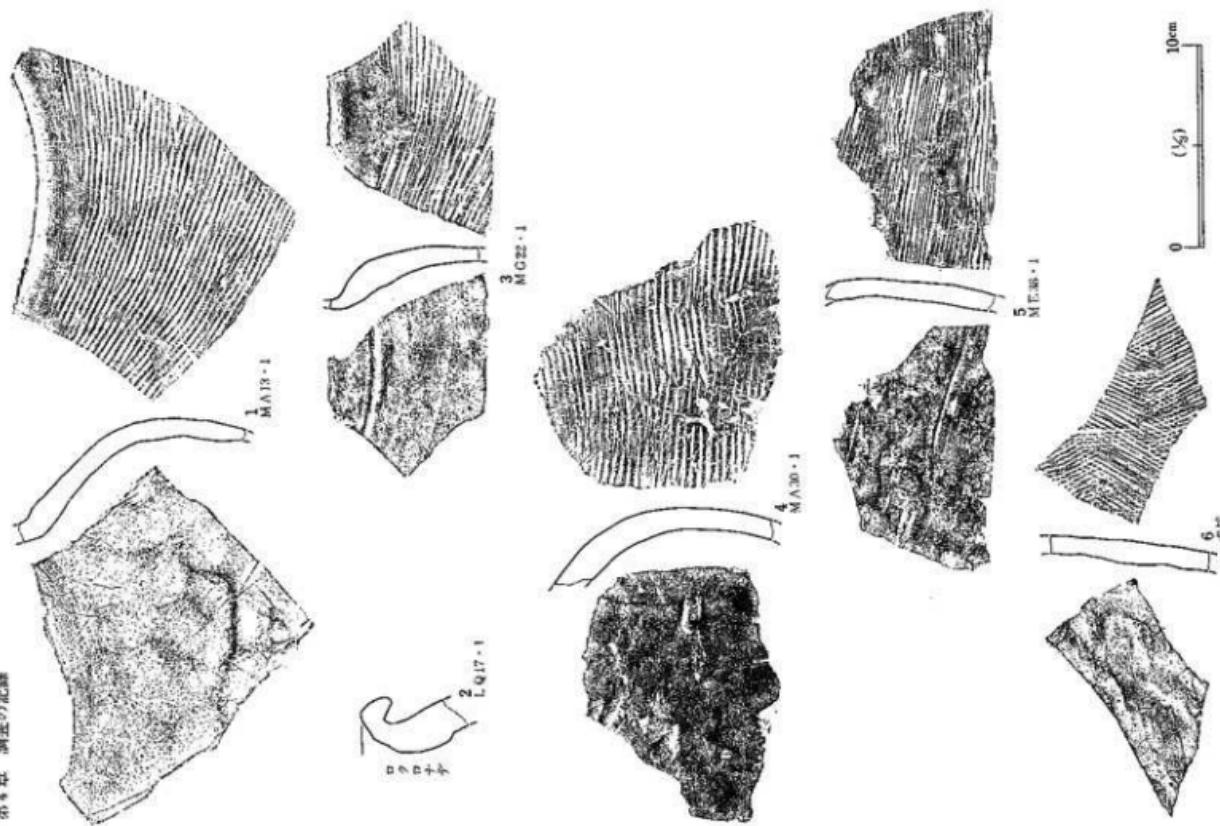


第31図 造構外出土遺物—須恵系中世陶器(擂鉢)一



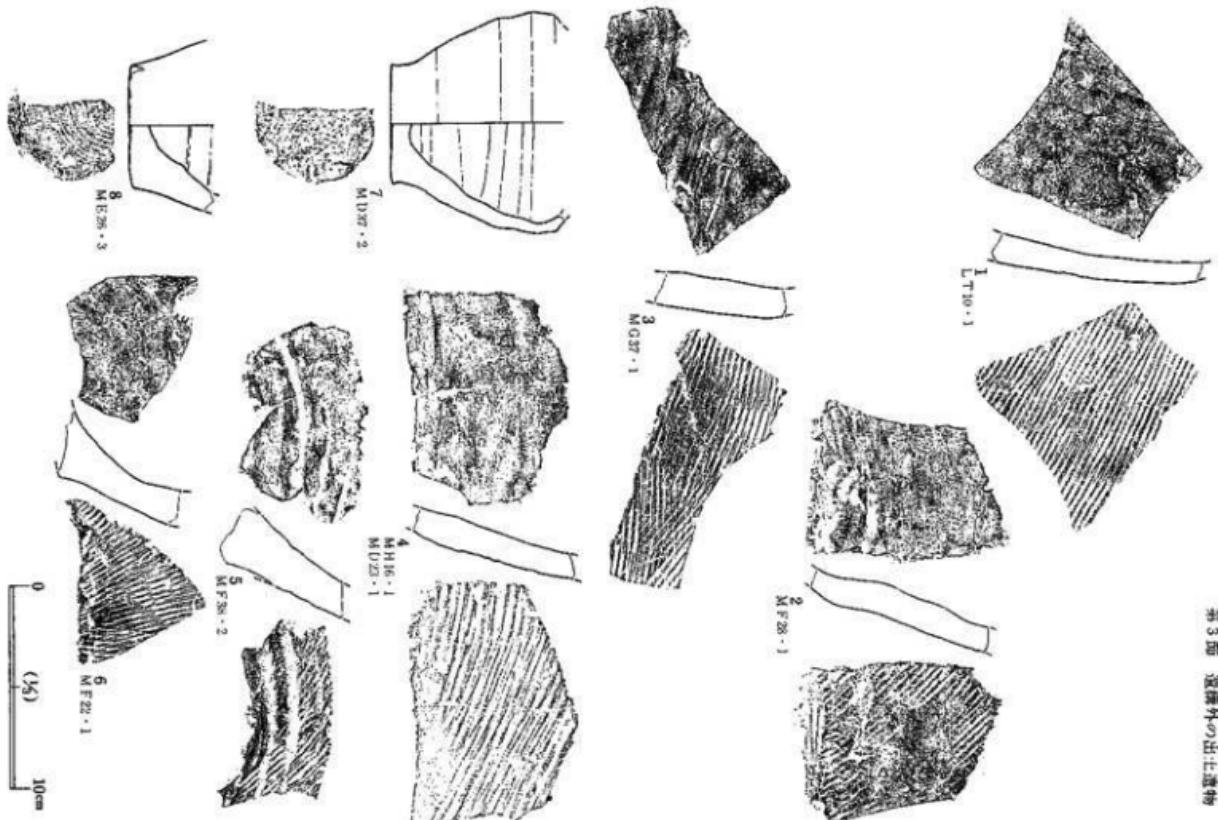
第32図 遺構外出土遺物—須恵系中世陶器(擂鉢)、瓦質土製品—

第4章 調査の記録



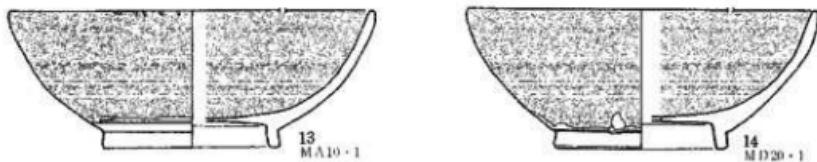
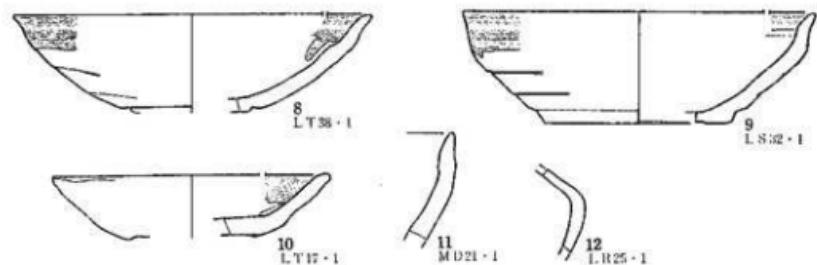
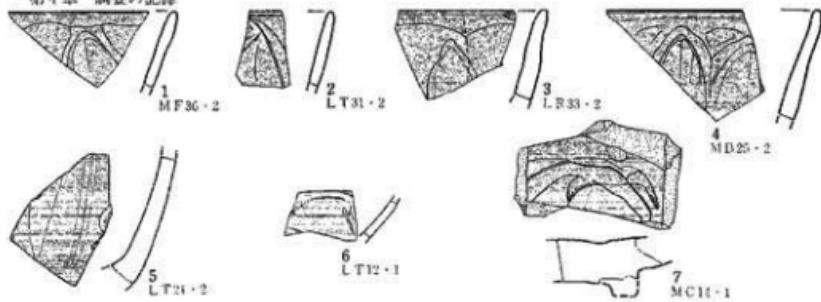
第33図 通標出土遺物—須惠系中世陶器(期・型)一

第3節 遺構外の出土遺物

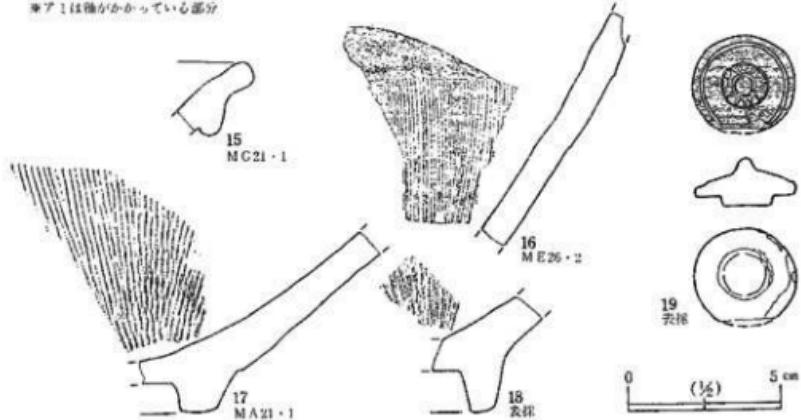


第34図 遺構外出土遺物—須恵器中世陶器(壺・小豆)一

第4章 調査の記録

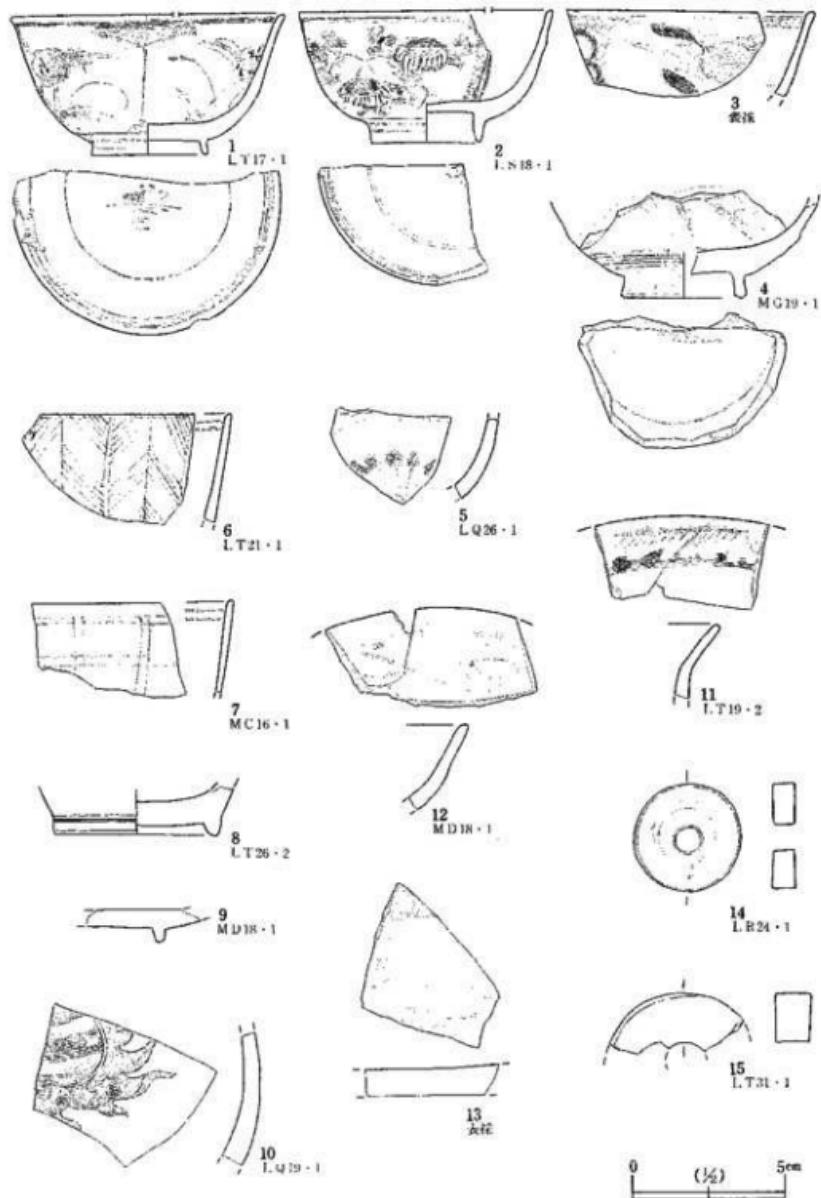


※アリは強いかかっている部分



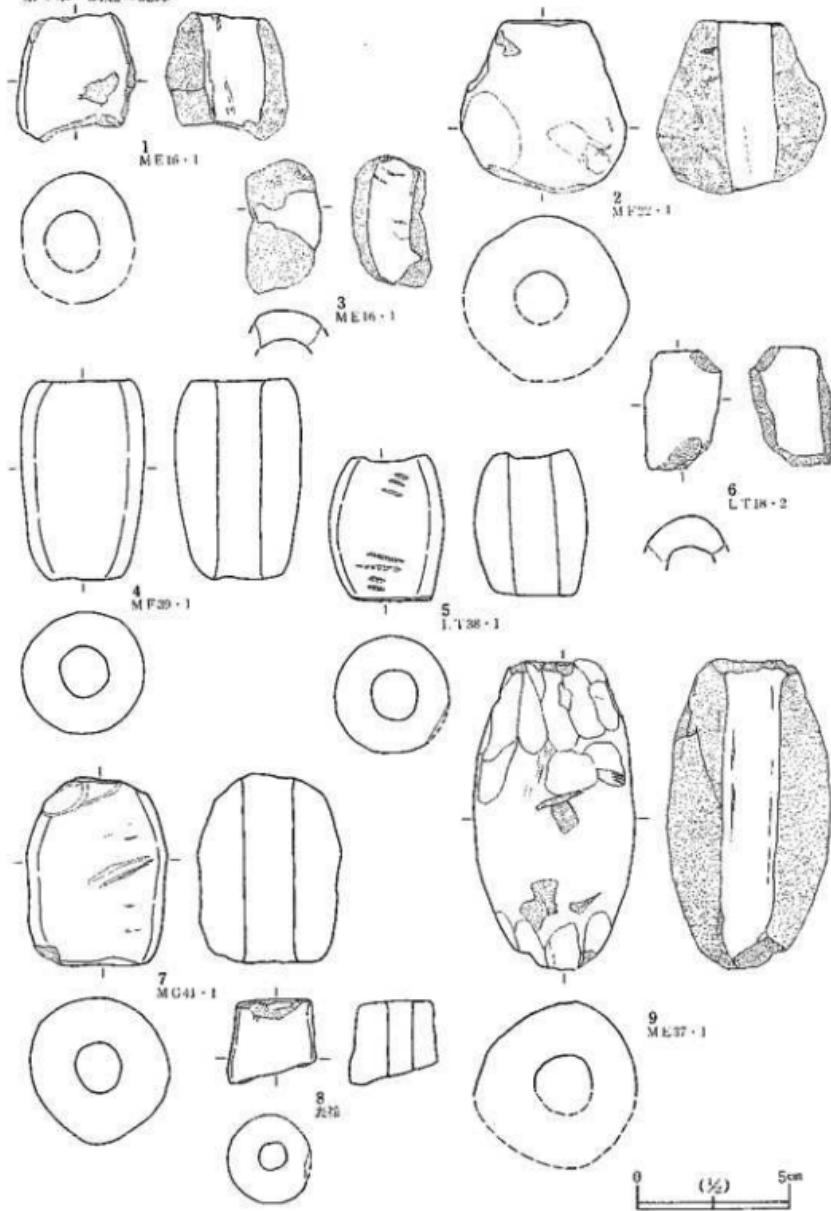
第35図 造構外出土遺物—輸入磁器、施釉陶器—

第3節 道構外の出土遺物

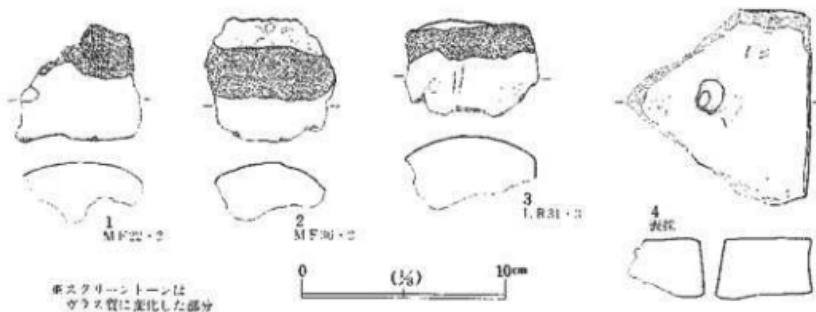


第36図 道構外出土遺物－染付け陶磁器－

第4章 調査の記録



第37図 造構外出土遺物—土鍤、陶鍤—



第38図 造構外出土遺物—ふいご羽口、場一

〔石製品〕

<剝片石器>—第39図1~12、第40図13~19—

—石鎌—

無基のものが2点あり、(1)が二等辺三角形を呈し、基部が凹んでいる。やや厚みのある剝片に、両面の側縁から調整加工を施し形を整えている。(2)は表裏に剝離面を残しており、薄い剝片の素材の側縁に、短く連続する調整加工を施して形を作りだしている。(3)は側縁からの調整加工があるが、左右対称でなく未完成品と思われる。

有基のものが4点あり、(4)は尖基で全体が柳葉形を呈している。厚みのある剝片に両面から細かい丁寧な調整加工を施し形を作りだしている。断面はレンズ状を呈している。他は凸基であるが、形状がわかるのは2点だけで、(5)は二等辺三角形、(6)は左右のバランスを欠いているが、ほぼ二等辺三角形を呈する。いずれも裏面に剝離面を残しているが、側縁からの調整加工で仕上げている。(7)は基部だけである。

—石槍—

(8)は基部が平らで先端が鋭く尖る。縦長の剝片を側縁から丁寧な調整加工を施し仕上げている。中軸に稜をもつ。(9)は凸を呈する基部の破片と思われる。側縁からの加工も丁寧で、断面はレンズ状を呈する。(10)は先端が欠損している。側縁からの加工は粗い。

—石箒—

(11)は刃部が丸い範囲を呈しており、肉厚の剝片の両面から調整加工を施し形を作りだしている。表面がややもりあがっており、中位での断面は凸レンズ状を呈している。

—石匙—

(12)はつまみ部の中心線をとおる長さに対し幅が狭い、いわゆる縦型の石匙である。縦長の剝片の裏面に平坦な剝離面を残し、もりあがって凸を呈する片面に上に調整加工を施している。

調整はつまみ部から先端までおよぶ。裏面の一方にも連続する調整加工痕がある。

(13)は三角形の頂部に近いところの左右をへこませ、撥形にしている。打撃面に対する辺に両面から調整加工を施し、刃部を作りだしている。

(14)は表裏に剝離面を残し、打撃面に対する先端につまみ部を作り出している。一方の側縁に両面から調整を加え、刃部を作り出している。

—その他の剥片石器—

(15)は欠損しており、継長の剥片の側縁および先端に片側から加工を施している。

(16)は欠損しており、先端に連続する加工がみえる。

(17)はかなり厚手の剥片で形状が円に近い。一部に調整加工が施されている。

(18)・(19)はいずれも剥片で、連続する加工がわずかにみえる。

〈礫石器〉—第40図20～22—

(20)は磨製石斧で、基部が欠損している。短冊形をしており、刃部は両刃である。

(21)は三角彎形石製品で山形の面は磨られて滑らかであるが、下面是粗い加工が施され凹んでいる。

(22)は石棒の破片と思われる。

※石器の年代について

石鎌など剥片石器は、縄文時代前期以降、石斧など礫石器は、後期以降と推定される。

〈砥石〉—第41図1～10—

大きさ・形状に違いあり、共通する点だけ上げると、次のようになる。

1 細長い長方体を呈し、両端が幅広のものである。四面を使用し、一面にU字状の凹みあるいは線状のするどい刻みをもつ。

2 小形のもので偏平な石の広い両面、左右のせまいところを磨面としている。

3 大きな自然石の上面に磨面が見えるものである。

※砥石の年代について

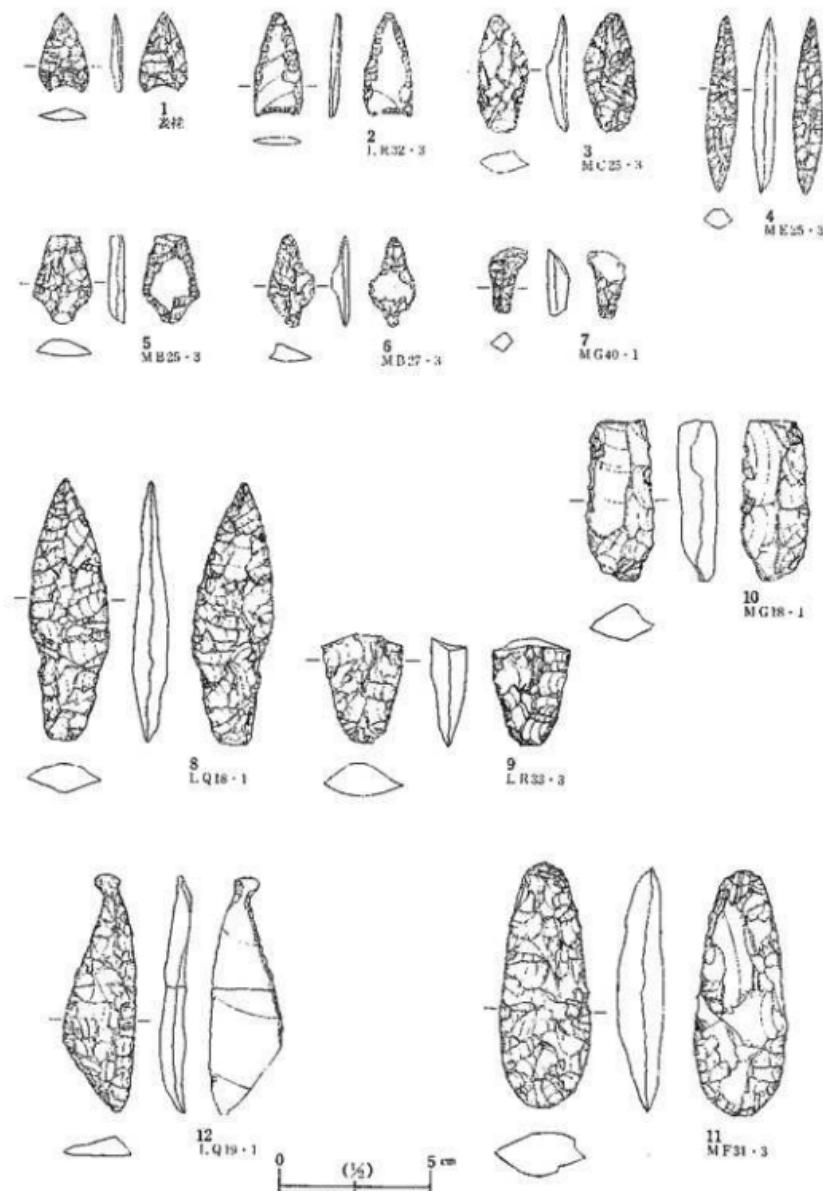
土器との共伴関係から古代から中世のものと考えられる。

〔金属製品〕

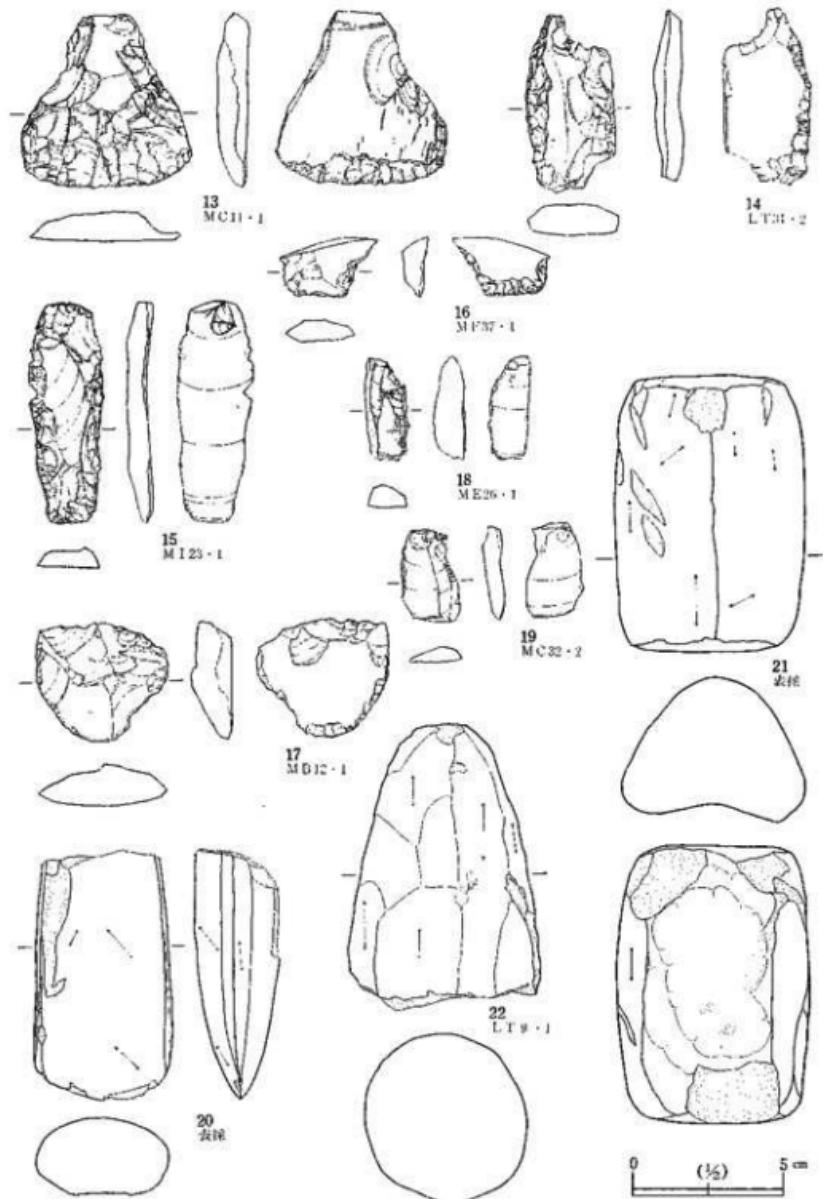
〈銀貨〉—第42図1～13—

丘の頂上部から12点の寛永通宝が出土している。文字の形・背文字の有無でバラツキがある。

他に文字不明のものが1点ある。

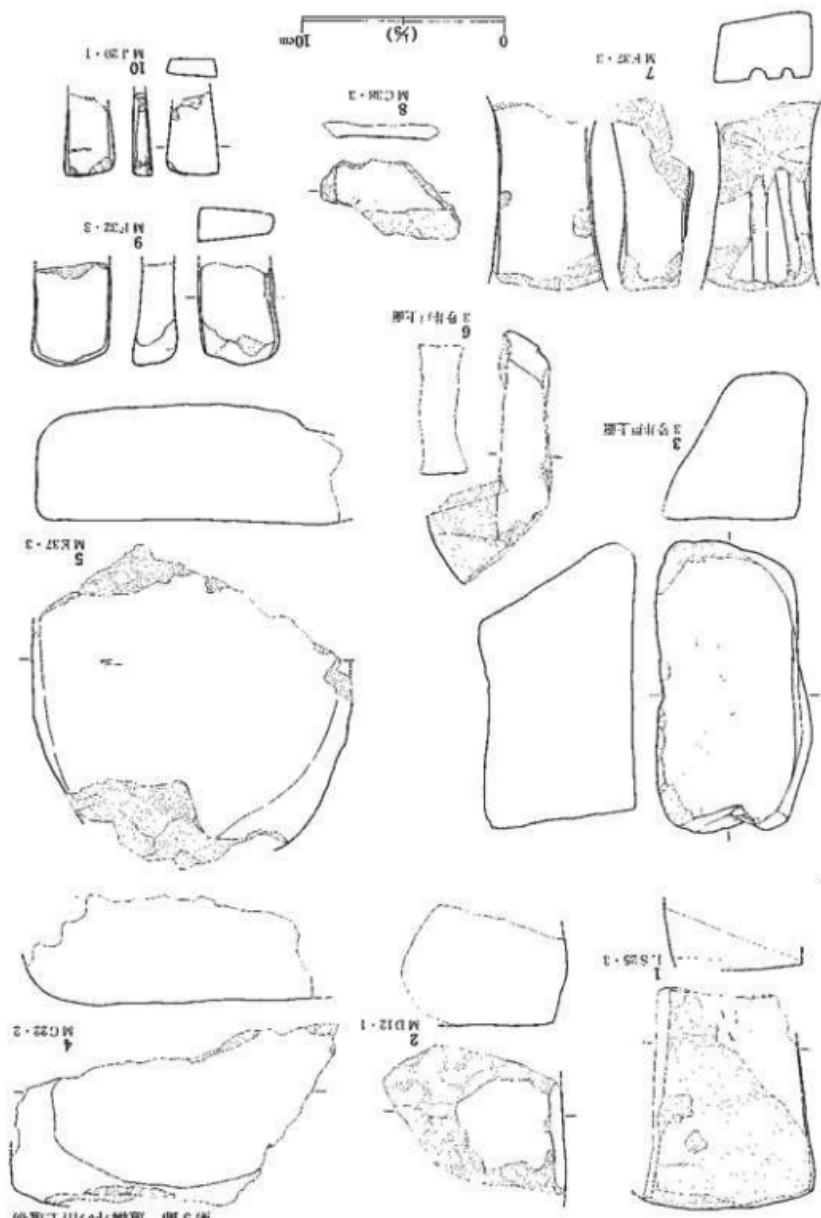


第39図 遺構外出土遺物—石器—

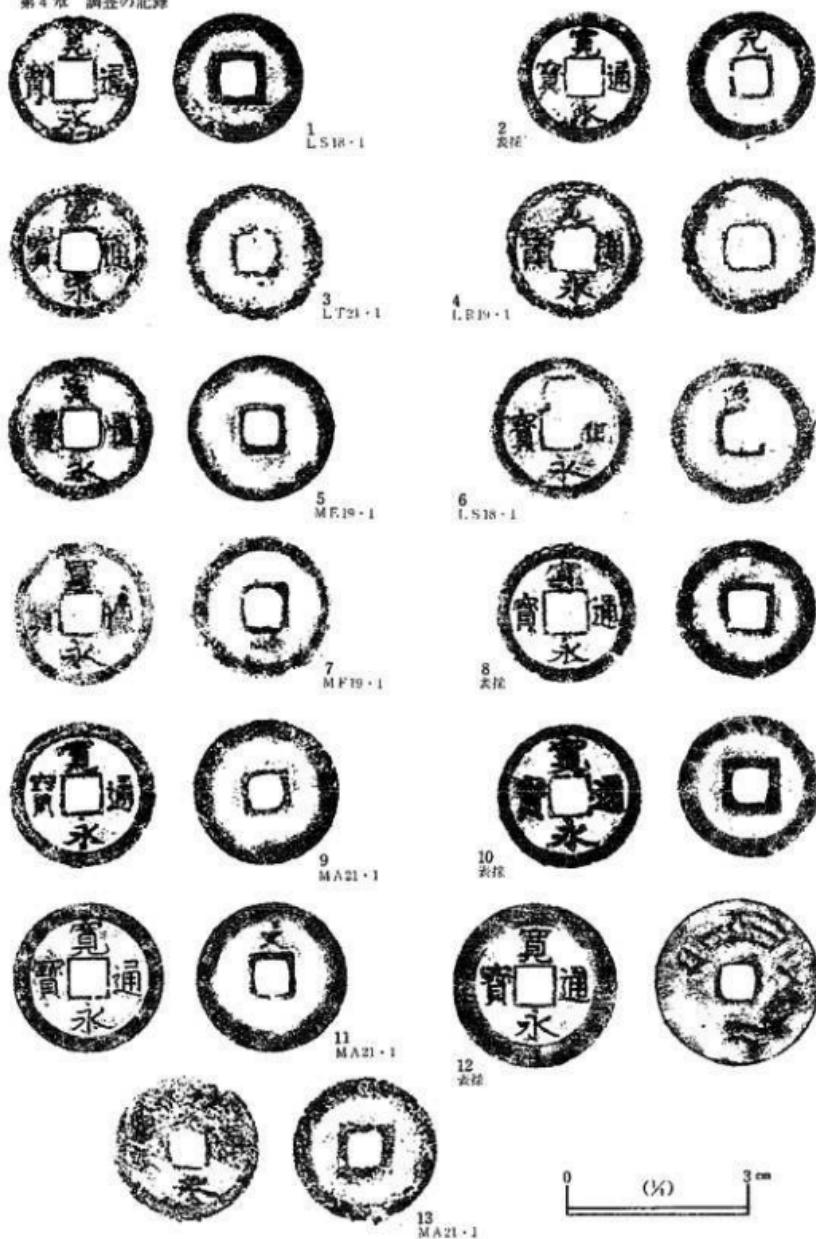


第40図 造構外出土遺物—石器—

第41圖 遷都外出土遺物一組石器



第3組 遷都外出土遺物



第42図 遺構外出土遺物一錢貨一

第5章 まとめ

第1節 遺構の立地と年代

旧神社があった丘の上で確認された土坑については、遺構内からの出土遺物もないことから年代については不明である。丘都平坦面で確認されたものに第1号井戸跡がある。井戸跡の底面付近から須恵系中世陶器の擂鉢・甕破片が出土していること、木組みが方形隅柱型であることから14～15世紀の年代が考えられる註1)。確認状況から井戸跡の構築は丘都を削りだした平場造成後である。

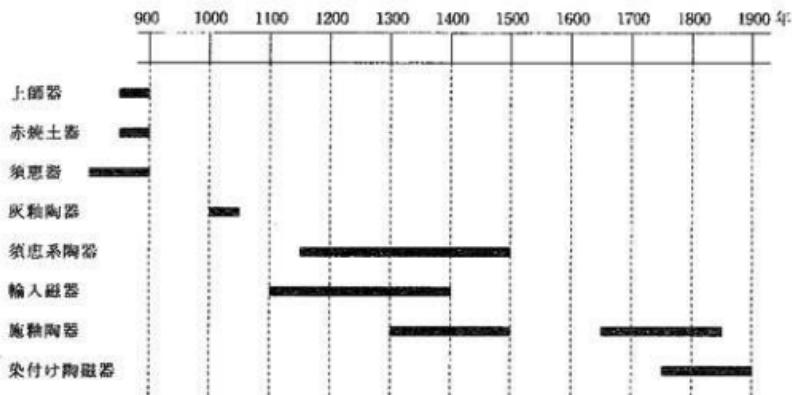
西谷部で検出された3基の井戸跡については、第4号井戸跡底面で回転糸切りで切り離された赤焼土器杯底部が出ていること、第2～4号井戸跡がいずれも円形の素掘り型であることから9世紀後半に年代が推定される。

西谷部をはさんで、東に張り出した平場のつけねで建物跡が検出された。張り出しはほぼ長方形に近く、平場の南辺と建物跡の南辺が方向を同じにしている。西側の畠との段差があることから、なだらかであった中腹斜面を削り出して平場を造成し、建物を立てたものと考えられる。平場の落ち際で須恵系中世陶器がまとまってみつかっていること、第1号井戸跡のある平場とほぼ同じ高さにあることから、建物跡の年代を第1号井戸跡と同じ頃と考え、また十器・陶磁器を次頁の表に示したが、陶磁器のまとまりがみられる14～15世紀に年代を推定したい。

建物の北側、浅い谷の縁辺で井戸跡・土坑が検出されている。第5号井戸跡は円形の素掘り型であり、第2～4号井戸跡同様に9世紀後半と推定される。

そこで第2～4号井戸跡・第5号井戸跡の古代に属すると考えられる遺構のありかたと、東谷部・西谷部の谷底に近いところで多量の赤焼土器および須恵器が出土している状況から推して、谷がほぼ埋もれた段階で平場の造成が行われたものと考えられる。

北側中腹斜面で検出された火葬墓群については、尾根筋にまとまっているが、配列に規則性は見いだせない。ただ中がぬけているので円形を意象しているのかもしれない。全体に上面が削られているが、骨蔵器をともなわない火葬墓群であると判断される。第6・8・11号火葬墓の埋上から併せて4点の銅鏡が出土した。第6号火葬墓から政和通宝の文字のあるものが見つかっており、中國からの渡来鏡であるとする鑑定を得た註2)。こうした中國の北宋鏡が流通したのは、鎌倉時代後半から室町時代中頃にかけてであり、火葬墓の年代もほぼ同じ時期と推定したい註4)。



第2節 遺跡の性格

遺物としては縄文時代、古代、中世、近世の遺物が出土しており、複合遺跡としてとらえられる。ただし調査区内で縄文時代の遺構は確認されておらず、当該時代の様子については言及することができない。それと同じように古代についても井戸跡の検出だけであり、調査区内で居住にかかわる遺構は見つかっていない。中世以降の平場造成によって削平された可能性も指摘できるが、西谷部の遺物包含層が調査区外にのびていることから調査区外の西の山腹に遺構群の存在する可能性がある。西谷部から仏具である淨瓶（県内ではじめての発見例である）が出土しており、寺にかかわる遺構の存在も考えておきたい。近世の陶磁器・貨幣といった遺物は旧金比羅神社周辺から多く見つかっており、神社に供えられたものの可能性が高い。

中世の遺構は、建物跡を中心とする居住区域と火葬墓がまとまった墓地がある。総社の建物跡の秋田県内での検出例は未だ少ないものの、比内町谷地中館の建物跡と柱間間隔が近似している。付録で復元作業を行い、地侍層の居館とする見解を示しているが、その見解は、建物を立てるための土地造成行っていること、周辺から中世の輸入磁器・国産施釉陶器の出ていることからも裏付けられる。墓地については、その占地状況から居館との関係が深いといえる。

待入田遺跡の性格を考える上で、地理的要件も加味する必要があろう。遺跡のすぐ西に高岡館が、さらに北には片田館があり、その間をつなぐ位置にある。しかも下を流れる馬踏川がかつては遺跡近くでもっとも川幅を広げていたと推測され、水上交通の要衝地として物資の流通にかかわっていた可能性も指摘できる註5)。

最後に、これまで県内各地で多くの中世遺跡が確認されているが、ここで居館と推定される

遺物跡が検出されたことで、秋田県の中世社会の様相を一步ふみこんで想定できるものと考えられる。

註1) 木組み井戸については、鎌倉考古学研究所の調査から、方形構桟支柱型が鎌倉時代、方形隅柱型が室町時代とする変遷が示されている。

『掘り出された鎌倉』鎌倉考古学研究所 1981年

註2) 秋田市下夕野遺跡では51基検出された井戸のうち45基が素掘り井戸であり、中世の方形隅柱の木組み井戸より古いという見識をよせている。

『下夕野遺跡』秋田市教育委員会 1979年

註3) 大西 良彦氏の鑑定による。

註4) 『図説 日本の貨幣 I 原始・古代・中世』東洋経済新報社-1972年-

秋田市後城遺跡では骨蔵器を伴わず、掘り込みをもつ土壙墓が20基検出されており、大部分の掘り込みから木炭・焼土に混じって骨片が見つかっていることで、火葬墓と考えられる。陶磁器および中国北宋錢がでていることから14世紀～15世紀に年代を推定している。

註5) 船着き場があったという伝がある。

一付編—

待入III遺跡の掘立柱建物跡について

五十嵐典彦

掘立柱建物跡の実測平面図は各柱穴が整然と配列されている様子が見事に描き出されている。Y通りの各柱穴は完全に揃い、X通りもY₁～Y₇までは完全に揃っている。ただY₈～Y₁₁のX通りの柱穴のうちいくつかは通り心を半分ずつずれている。これは施工誤差によるものではなく意図的にずらしたと考えられる（後補の可能性もある）。なお柱及び床束はすべて角柱であり、柱穴の大きさもほぼ揃っている。

各通りの基準寸法は、X軸が平均3.63尺、Y軸が平均5.67尺である。このことからX軸は半間毎にならんでいることがわかる。つまり柱間基準寸法は7.3尺前後である。一方Y軸は柱穴毎を一間と見なすか半間と見なすかが検討を要するところである。前者とすれば柱間基準寸法が5.7尺前後で、中世の柱間としては少し狭い。また後者とすると柱間基準寸法が11.3尺強になり、柱間としては明らかに広すぎる。室町時代大同年間に立てられた古井家住宅のように10.65尺の柱間の例もあるから一概には言えないが、中世以降の住宅は7尺を上限に減少するのが一般的であるから、当遺跡の場合は柱穴毎を一間とみなした方が妥当であろう。

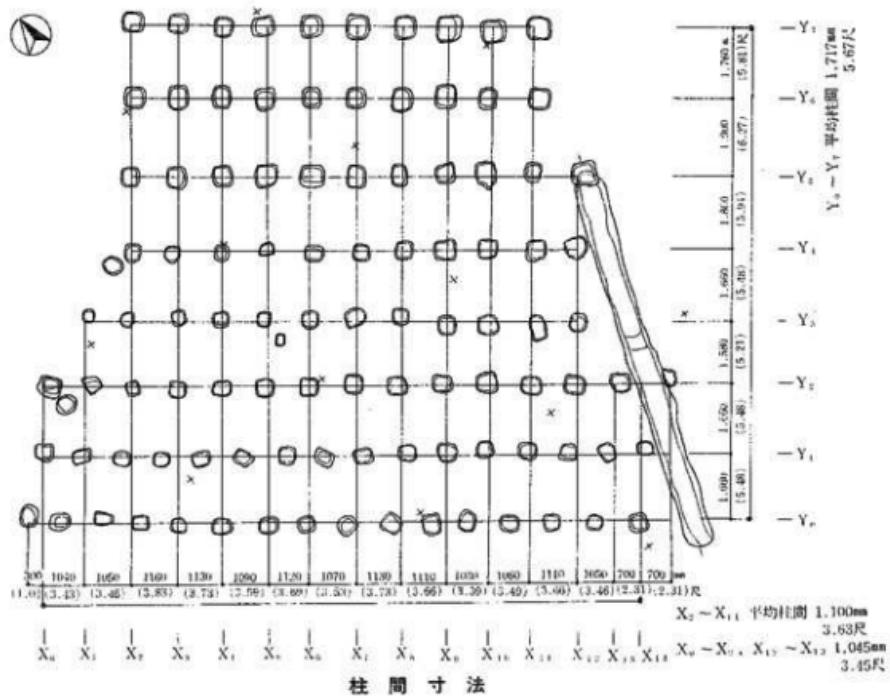
次にこの掘立柱建物跡の形式と間取りの復元を推定してみよう。当遺跡の柱穴列から判明することは、十間を有しないということである。ということは農家でないことを示している。遺跡の立地場所などから推定すると、地侍層の居館と考えられる。この遺構の年代については出土遺物等から推定するのが妥当であろうが、あえて私見を言えれば、秋田県の中世の館跡は室町時代後期から戦国時代にかけてが大半を占めると考えていることから、この掘立柱建物跡もそのころの時代のものと考えたい。

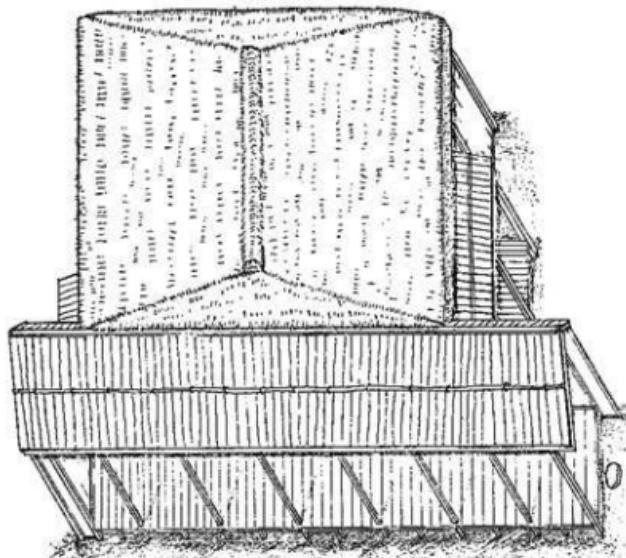
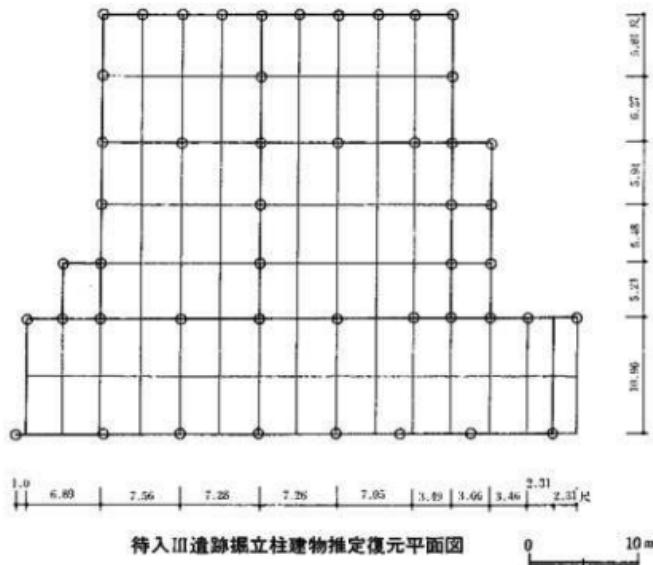
以上のことを前提として推定復元すると、建物の形式・間取りは各種想定できるが、そのうち形式と間取りを一例ずつのみ図示しておく。中世の地方豪族の住宅に関する遺構の類はほとんど無く、史料も少ない。確実なものは皆無に近い。少ない史料から類推するしかないが、復元に当たってよりどころになった史料を上げておく。「法然上人絵伝」は14世紀初頭に描かれたものである。美作國の押領使漆間時晴の屋敷であり、主殿に中門廊が張り出した形式である。萱葺の母屋の四方に庇を巡らしている。部屋は襖を敷きつめ、建具は蔀・造戸・障子・襖が見られる。柱は石揚立である。「蒙古襲来絵詞」の秋田城介泰盛邸は13世紀の武士住宅を示している。襖は部屋の周囲に置疊にして、建具は蔀・造戸が見られる。「一遍上人絵伝」は13世紀の地方武士の居館を描いている。その中で、信州佐久郡の大井太郎の屋敷は、母屋の前面に取り付けられた庇がそのまま横にのびて短い中門を成している。屋根は板葺である。「町田家本洛中洛外國屏風」のうち細川管領邸なども、主殿は同種の建物として参考になる。

これらの絵は外観を伝えるだけで、間取りはわからない。間取りについては平内政信が慶長13年に書いた『匠明』のうち殿屋集の「昔六間七間の主殿之圖」が一応の参考になる。この図に類似した平面をもつ遺構として岡城寺光淨院客殿（慶長6年）があり、また同様の形態をもつ建物として岡城寺跡学院客殿（慶長5年）がある。さらに寛正年間の地侍屋敷の間取りを書いた「備中國新見庄地頭方所指圖」も参考になる。

当遺跡の掘立柱建物跡の復元はこれらの少ない史料や遺構を参考にしたものであり、推定の域を出るものではない。しかし、この遺構が用途は明らかでないにしても、接客部を備えた中世の主殿の形式を想定させうる住宅であろうことからすると、この遺跡の価値は決して低くないし、今後詳細な検討と分析を必要とする。

最後に復元間取りについて要点のみ記しておく。Y₁～Y₂通りとX₁～X₁₂通りの空間は柱穴の位置から考えて、庇形式の広縁で、その東端部は中門風の玄関と考えられる。X₁₁～X₁₂とY₁～Y₂の張り出しは縁と考えられるが、あるいは押板形式の座敷飾りであった可能性もある。母屋はとりあえず単純な田ノ字形に分割したが、先述したように多様な間取りが考えられる。いずれにしても南側前半部は接客を兼ねた主室で、北側後半部は寝床などの私室であろう。





待入III遺跡掘立柱建物推定復元図



遺跡遠景(東→)



遺跡遠景(北→)

図版2



丘中腹から中央平坦部調査前の状況(南→)



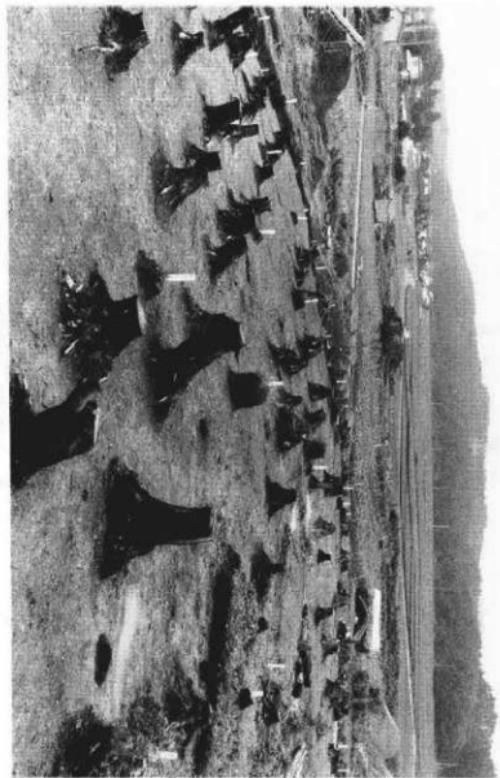
丘樁北側および谷部調査前の状況(西→)



丘頂部調査状況(西→)



丘中腹部東側調査状況(西→)



丘頂部調査状況(南西→)



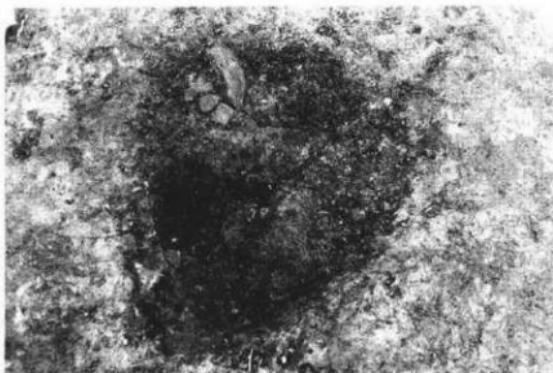
丘頂部調査状況(南→)



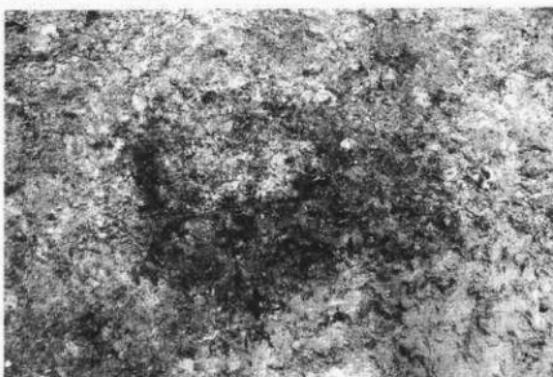
丘中腹から谷部調査状況(南→)



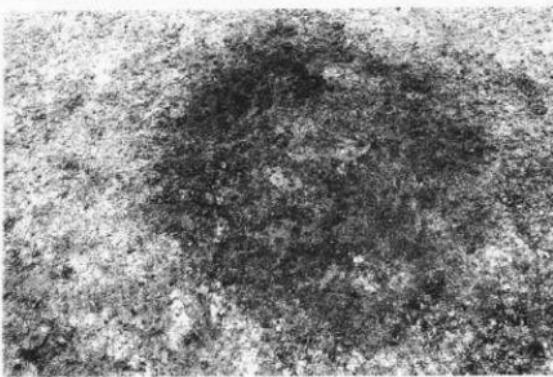
丘中腹部北側調査状況(西→)



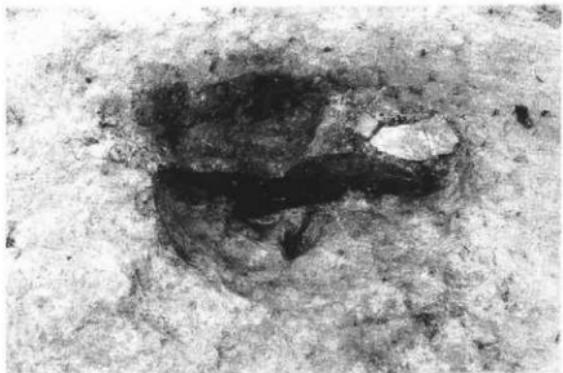
第1号火葬墓
確認狀況(西→)



第2号火葬墓
確認狀況(西→)



第3号火葬墓
確認狀況(西→)



第1号火葬墓
断面(東→)



第2号火葬墓
断面(東→)



第3号火葬墓
断面(南→)



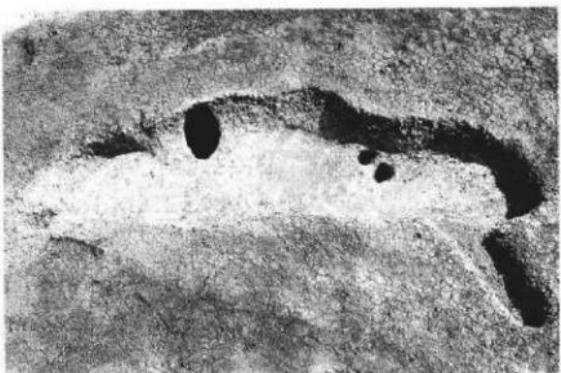
第 1 号土坑
確認狀況(東→)



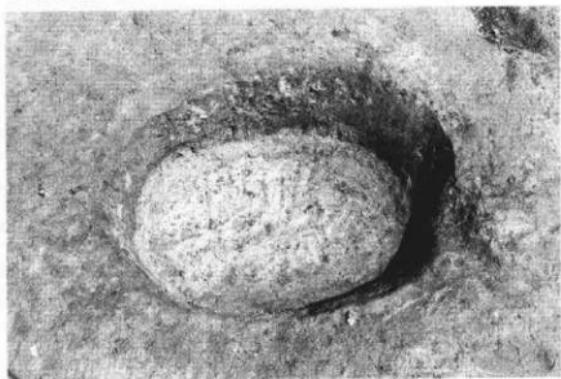
第 2 号土坑
断面(南→)



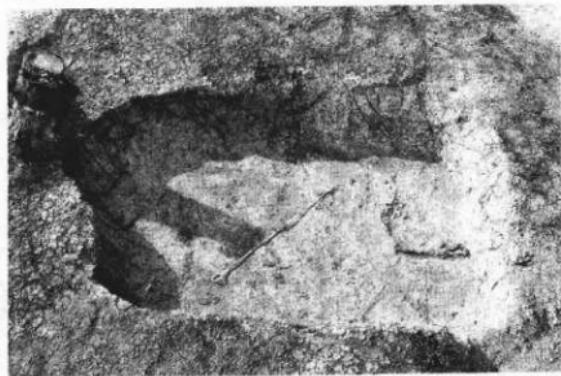
第 3 号土坑
断面(北→)



第1号土坑
完掘状况(北西→)



第2号土坑
完掘状况(南→)



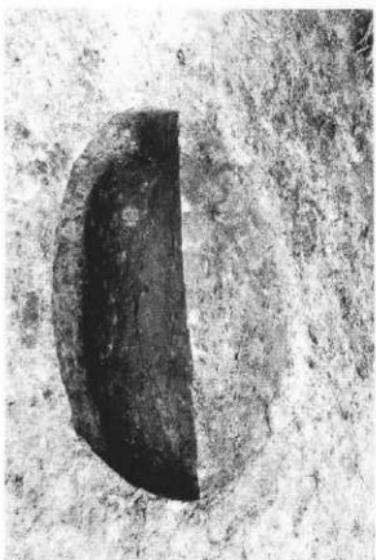
第3号土坑
完掘状况(南東→)



第 5 号土坑
完掘状况(东—)



第 4 号土坑
完掘状况(北—)



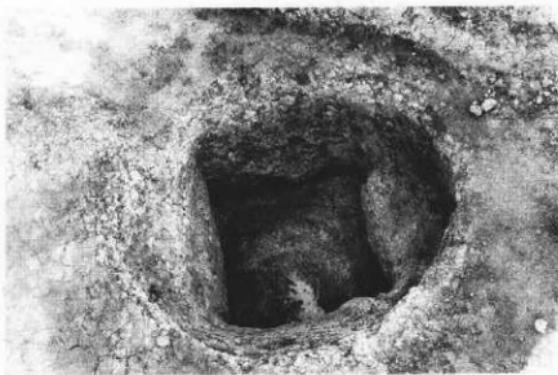
第 4 号土坑
断面(西→)



第 1 号井戸跡
断面(西→)



第 1 号井戸跡
底面(北西→)



第 1 号井戸跡
完掘状況(南→)



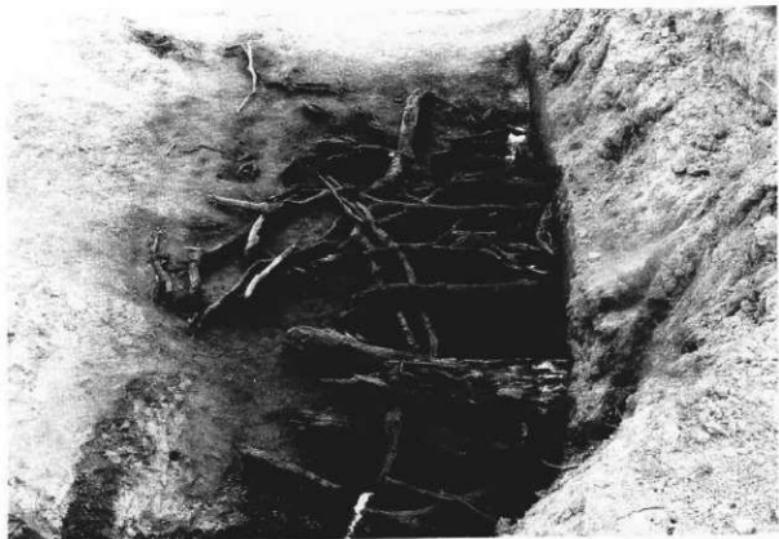
丘下東谷部調査風景(南→)



丘下谷部調査状況(南西→)



丘下東谷部調査状況(北東→)



丘下東谷部木材検出状況(東→)

圖版
14



丘下東谷部
木材(西→)



丘下西谷部
杭検出状況(東→)



丘下西谷部
木材検出状況(南→)



丘下西谷部土層断面(西→)



丘下西谷部完掘状况(東→)

第2号井戸跡
木製品出土状況(北→)



第2号井戸跡
断面(西→)



第2号井戸跡
検出状況(南→)





第2・3号井戶接
近景(北→)



第4号井戶跡
斷面(南→)



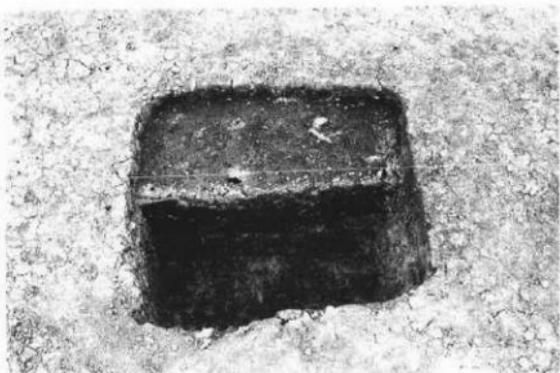
第7号土坑
完掘状況(南→)



掘立柱建物跡確認状況(北西→)



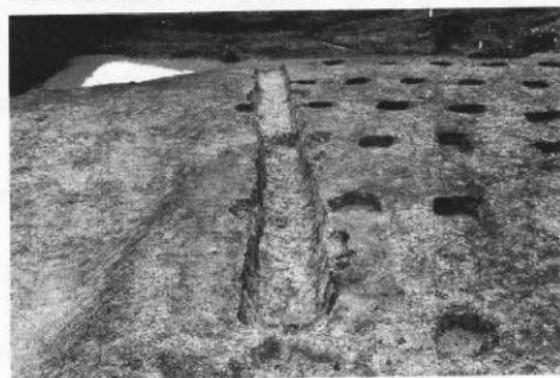
掘立柱建物跡調査風景(北西→)



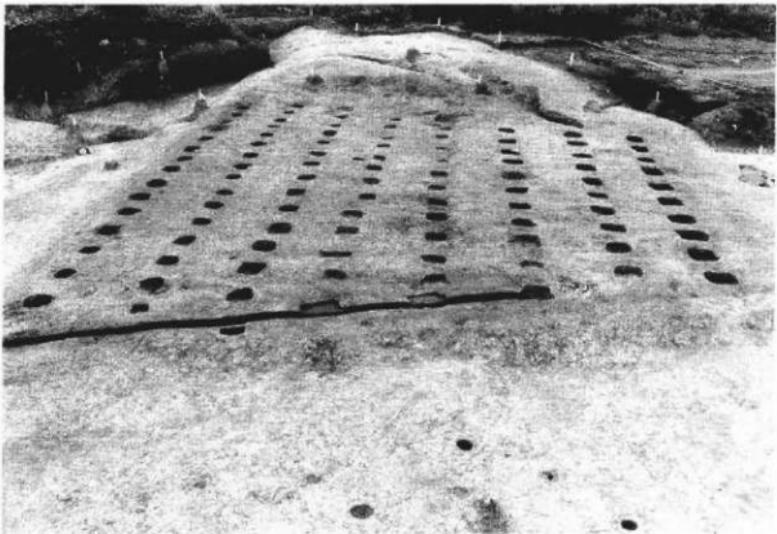
建物跡掘り方
断面(南→)



建物跡東辺溝跡
断面(東→)



東辺溝跡
発掘状況(北→)



掘立柱建物跡完掘状況(東→)



掘立柱建物跡全景(北西→)



平坦部南側調査風景(北西→)



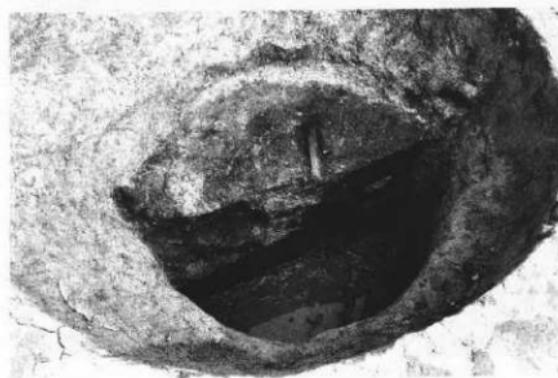
平坦部北側調査風景(西→)



第7号土坑
断面(南→)



第8号土坑
断面(南→)



第5号井戸跡
断面(西→)



第 7 号土坑
完掘状况(南→)



第 8 号土坑
完掘状况(南→)



第 5 号井戸跡
完掘状况(南西→)



中腹斜面調査状況(南東→)



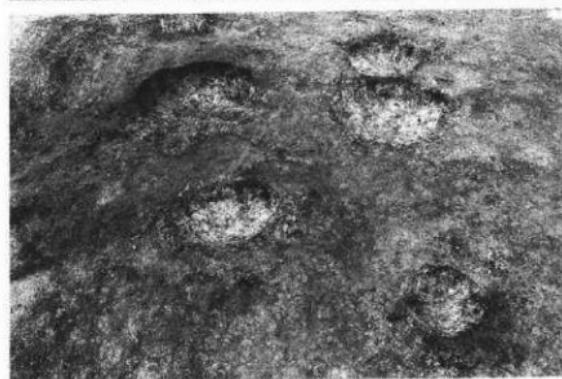
中腹斜面調査状況(東→)



火葬墓群
確認状況(西→)

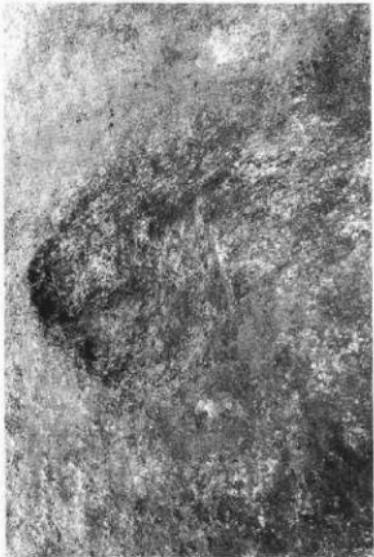


火葬墓群
確認状況(西→)



火葬墓群
完掘状況(東→)

第4号火葬墓
完掘状况(南→)



第4号火葬墓
完掘状况(南→)

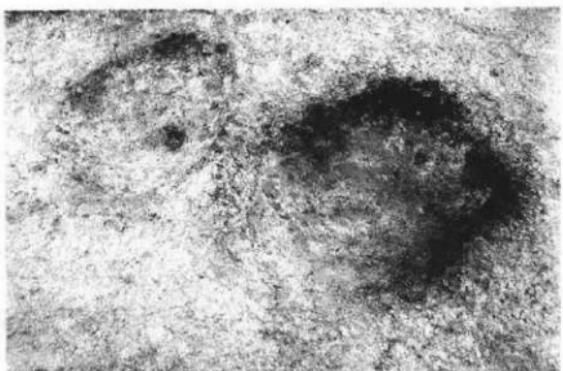


第8・9号火葬墓
完掘状况(西→)



第8号火葬墓
桥残出土状况(西→)

第4・7号火葬墓
完掘状况(南→)

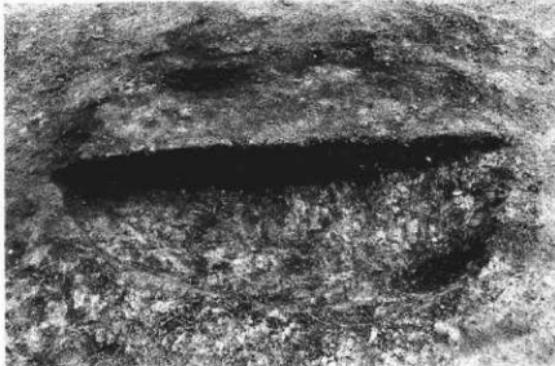


第8・9号火葬墓
断面(北西→)

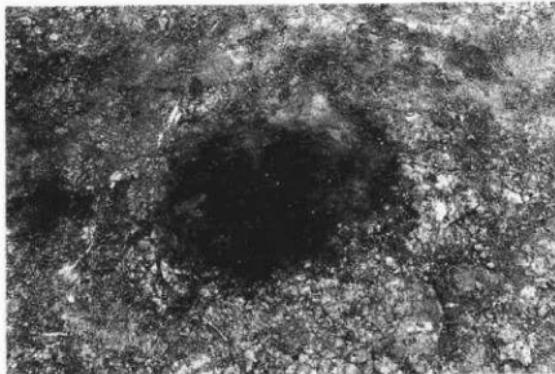


第9号火葬墓
断面(北西→)

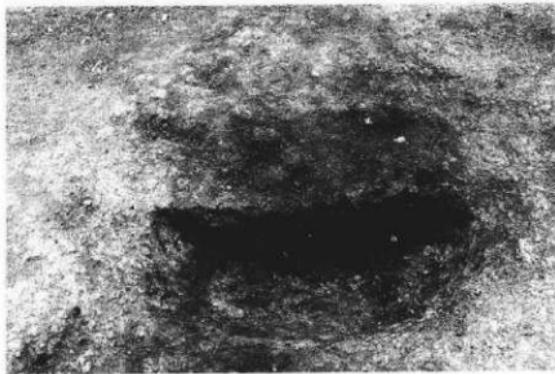




第14号火葬墓
断面(東→)

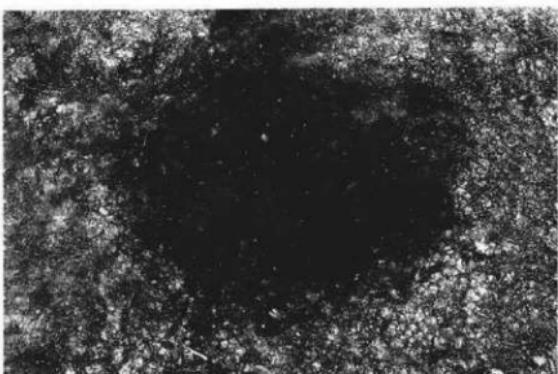


第15号火葬墓
確認状況(東→)

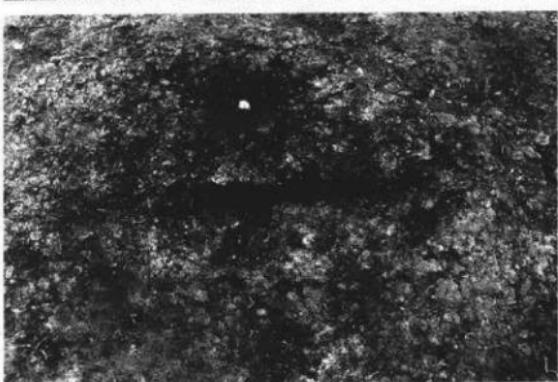


第16号火葬墓
断面(東→)

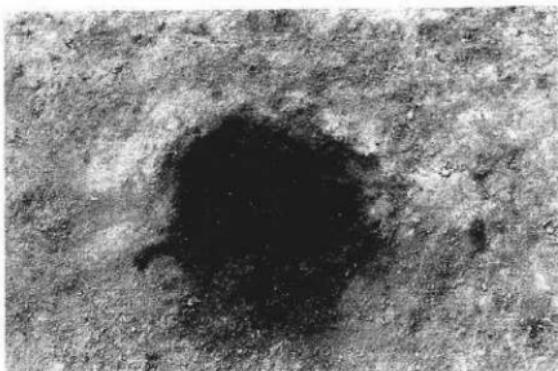
第17号火葬墓
確認状況(東→)

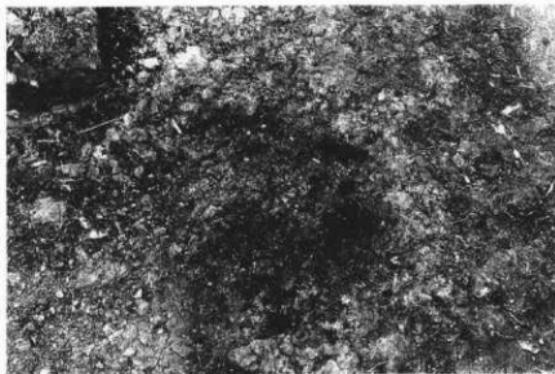


第18号火葬墓
断面(東→)

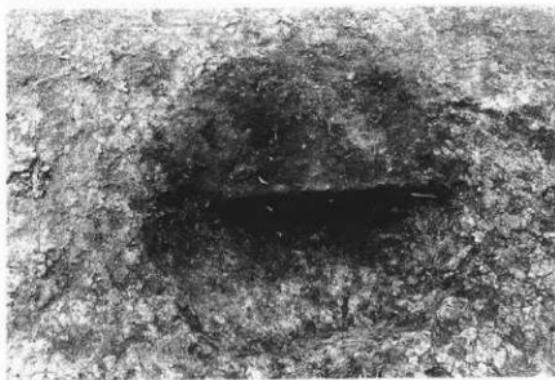


第19号火葬墓
確認状況(東→)





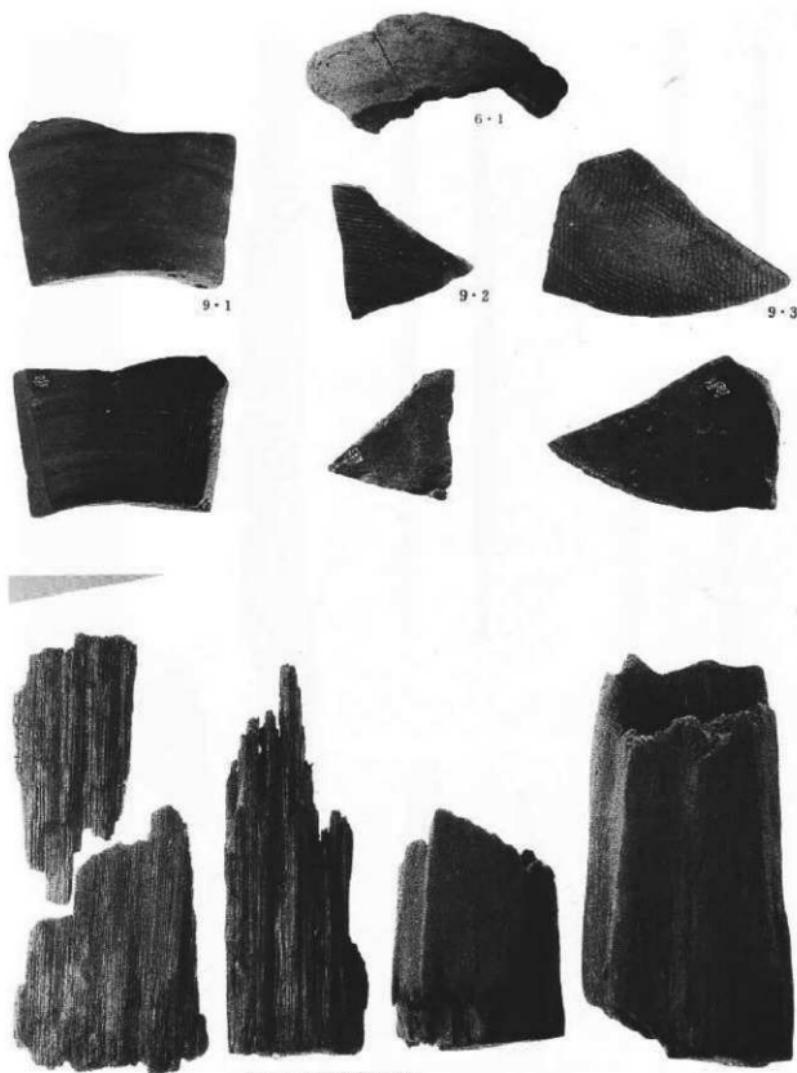
第20号火葬墓
確認状況(東→)



第21号火葬墓
断面(東→)



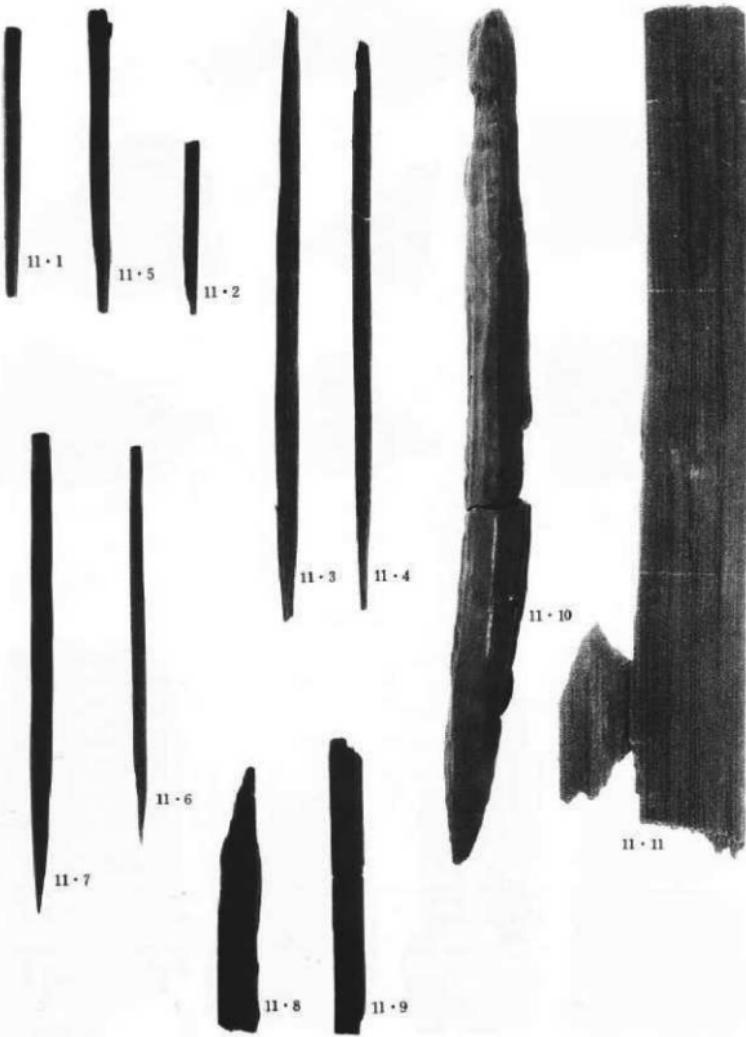
第22号火葬墓
断面(東→)



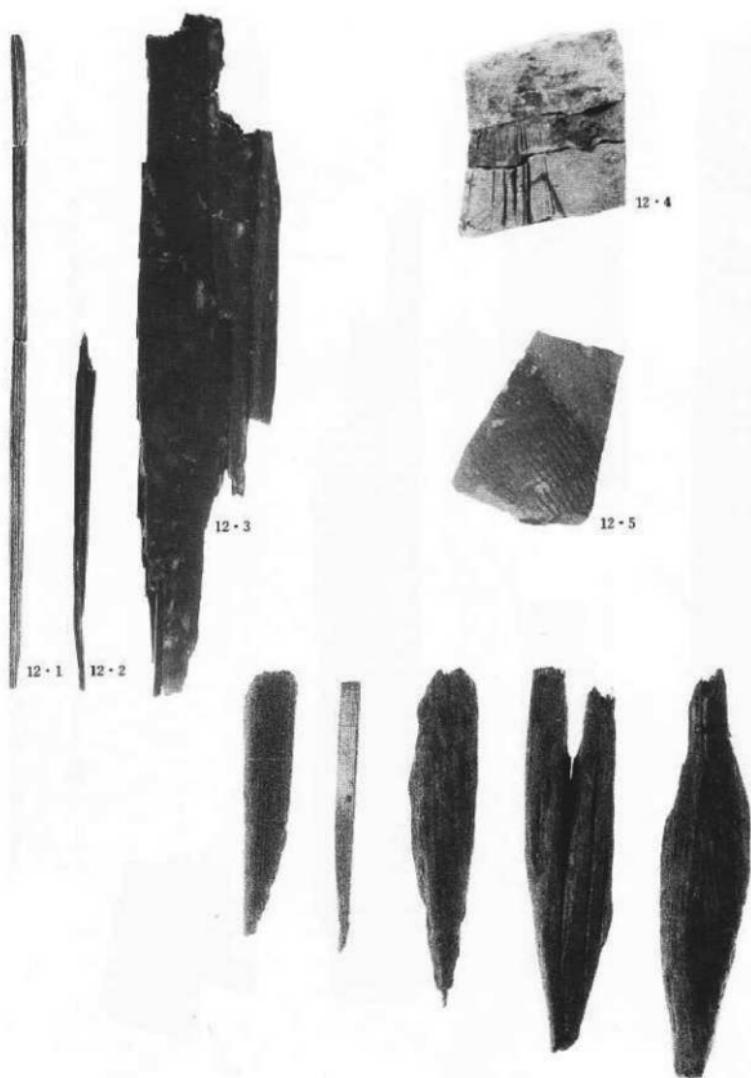
第1号井戸跡木組み材

*遺物に付した数字は検査番号・検査内番号に対応する

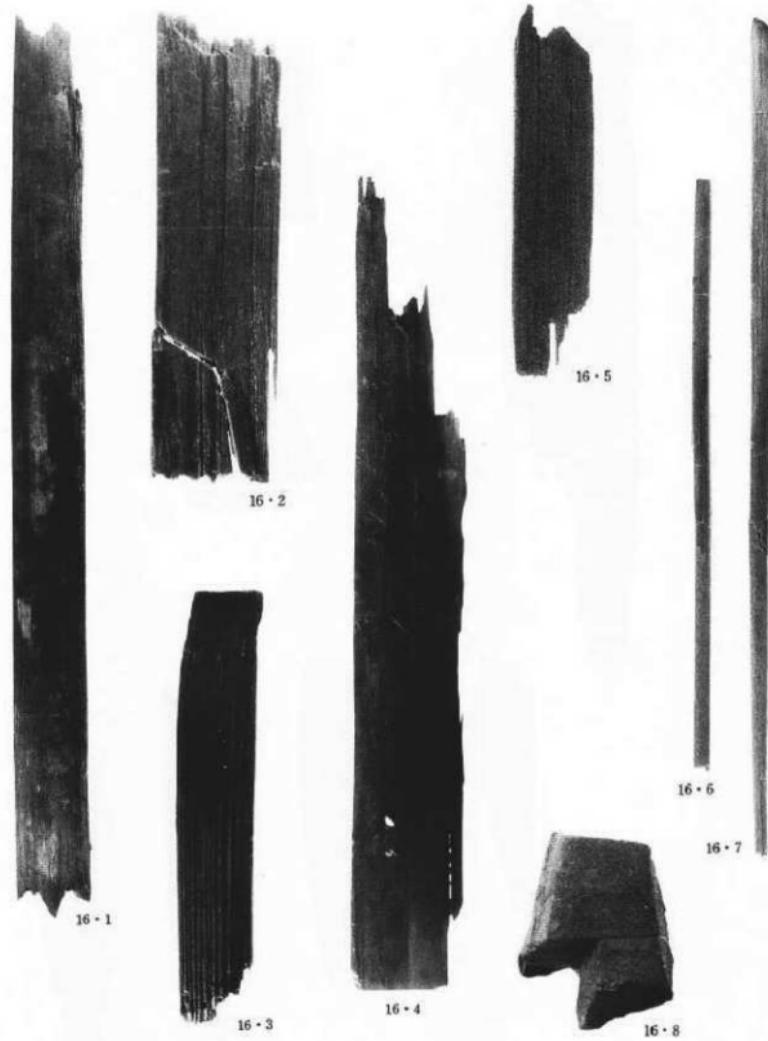
遺構内出土遺物—第1号火葬墓・第1号井戸跡—



遺構内出土遺物—第2・3号井戸跡—



遺構内出土遺物—第4号井戸跡、西谷部—



遺構内出土遺物—第5号井戸跡—



17·1



17·3



17·2



17·2

第7号土坑内



17·4

第8号土坑内



17·5



17·6



17·7

第6·11号火葬墓内



19·1



19·2



20·1

遗构内出土遗物—第7·8号土坑、第6·11号火葬墓—



22·1



22·2



22·4



22·5



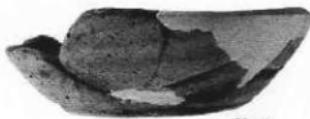
22·6



22·8



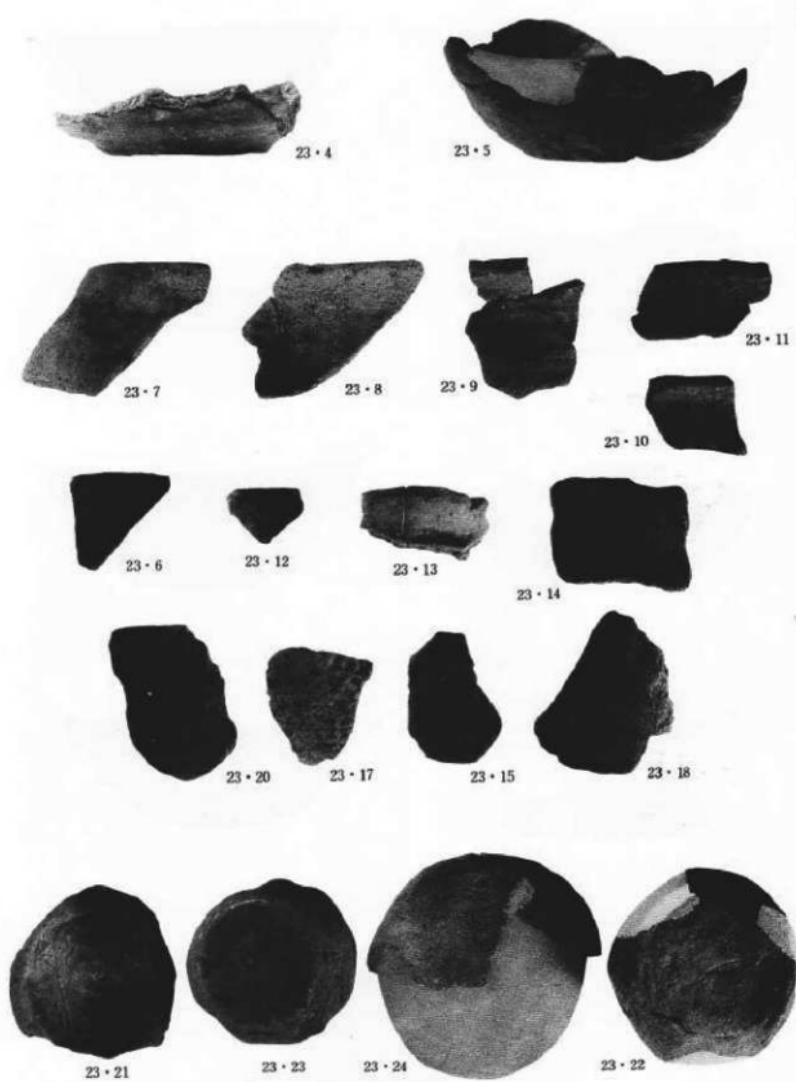
22·9



23·1



22·10



遺構外出土遺物—赤焼土器—



24·1



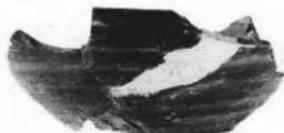
24·2



24·5



24·3



24·4



24·6



24·8



24·9



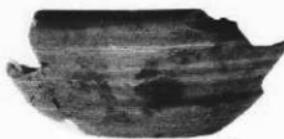
24·7



25·1



25·2



25·3



25·4



25·5



25·7



25·8



25·8



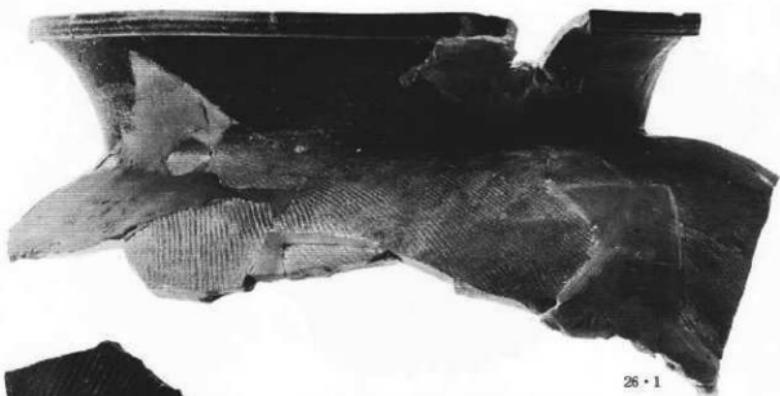
25·9



25·10



25·11



26・1



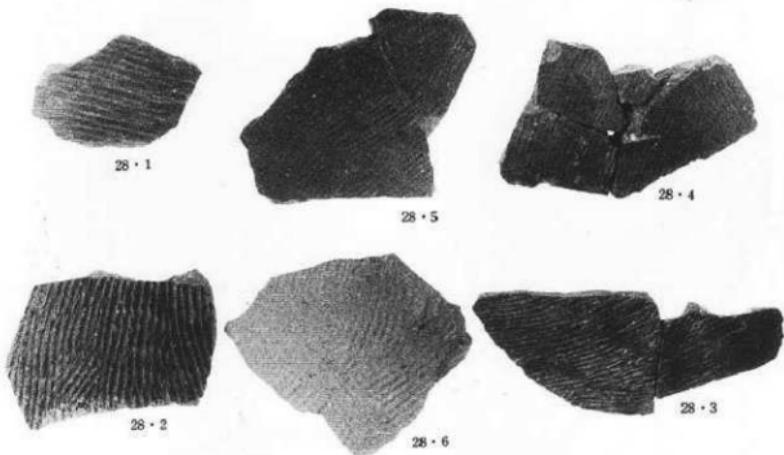
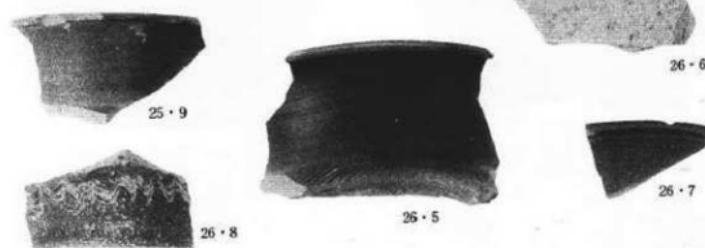
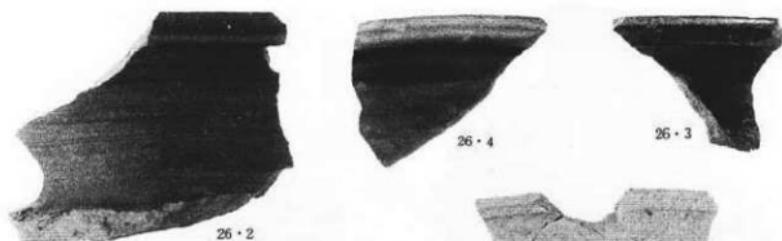
27・1



29・6



27・2



造構外出土遺物一須恵器(變)一



29・1



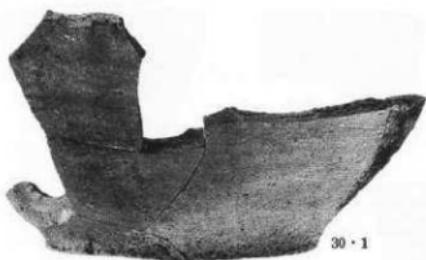
29・3



29・2



29・9



30・1



30・6



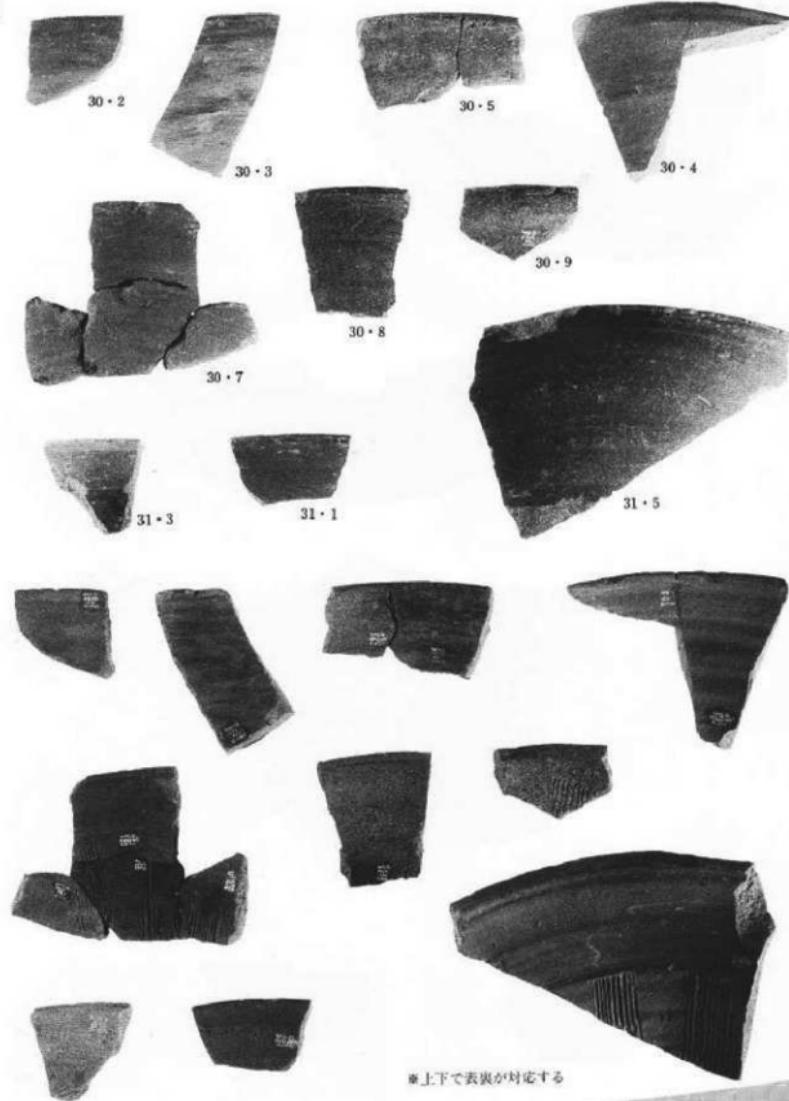
32・3



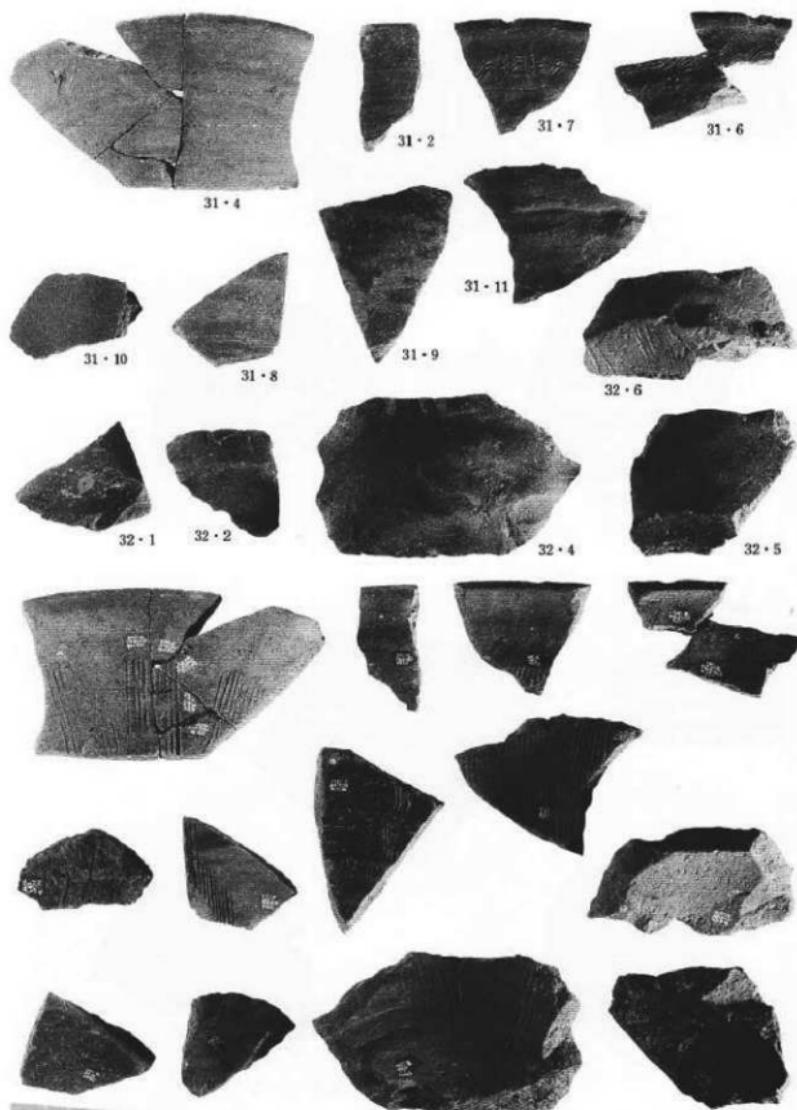
34・7



34・8



遺構外出土遺物一須恵器陶器(擂鉢)一



※上下で表裏が対応する

遺構外出土遺物—須恵器陶器(擂鉢)一



33・2



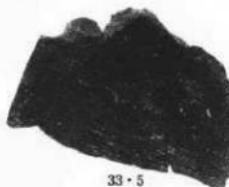
33・1



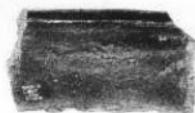
31・3



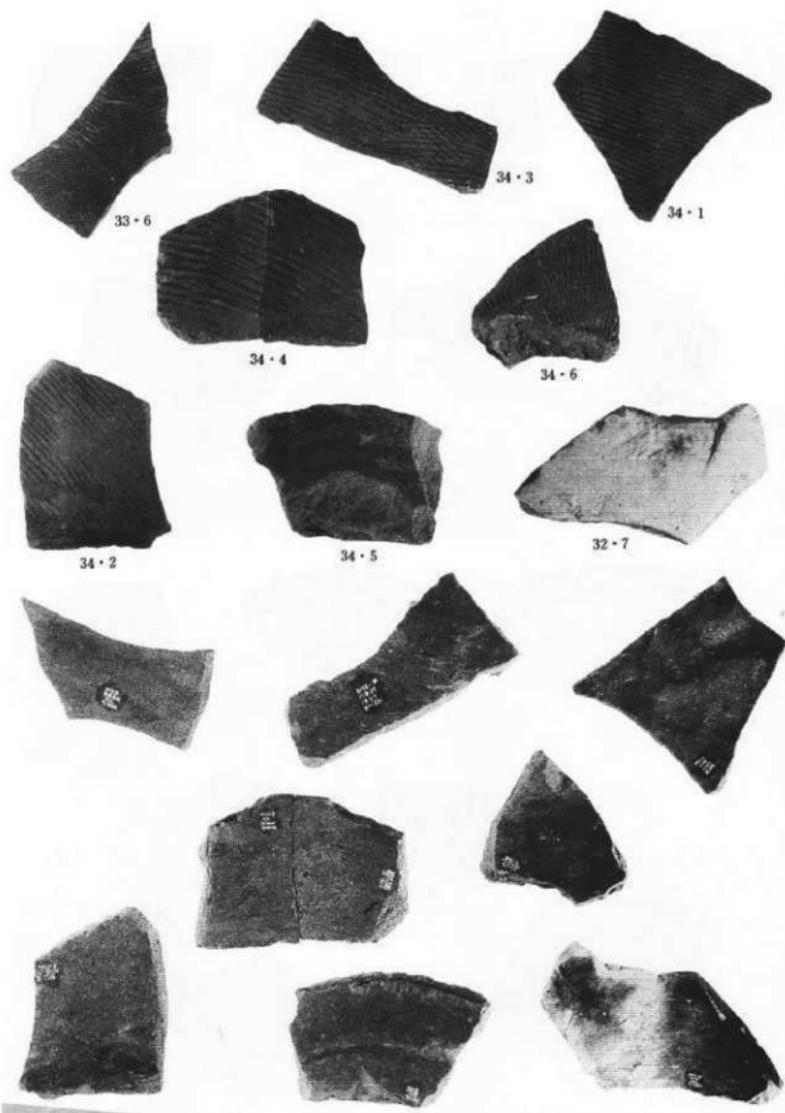
33・4



33・5



■上下で表裏が対応する



※上下で表裏が対応する



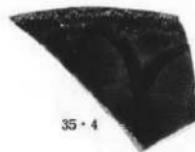
35·1



35·2



35·3



35·4



35·5



35·6



35·7



35·8



35·9



35·10



35·11



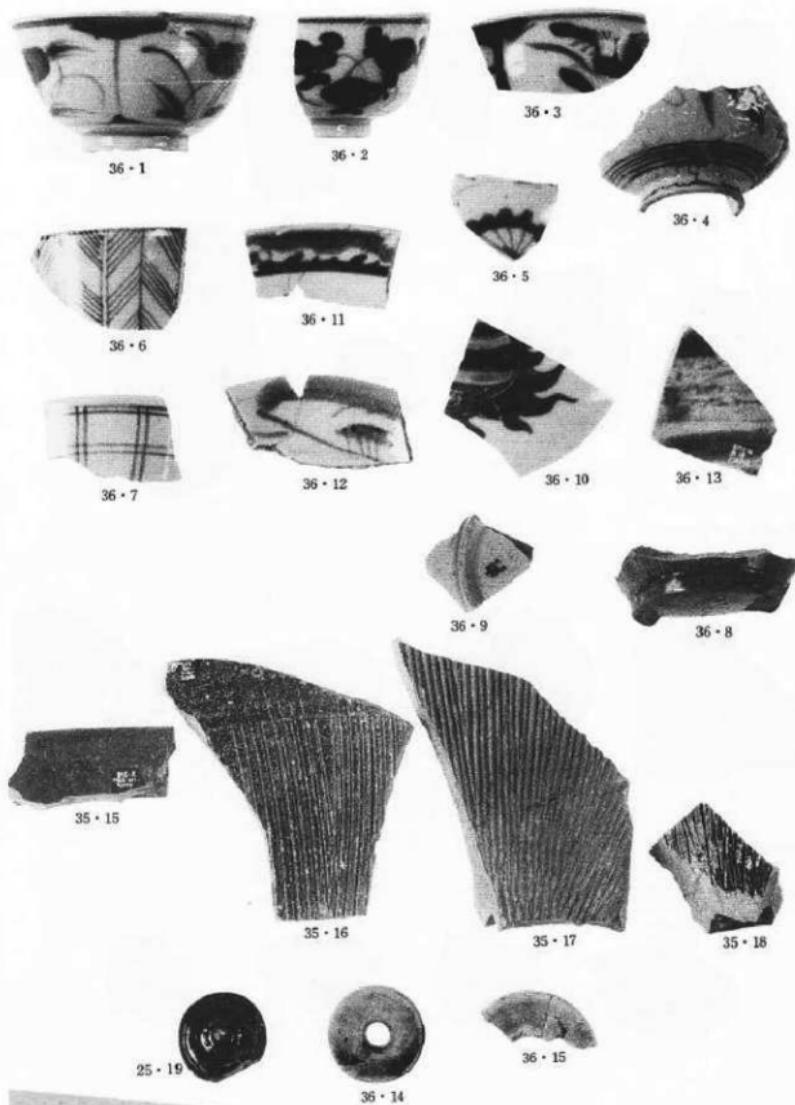
35·12



35·13



35·14



遺構外出土遺物—染付け陶磁器一



37・1



37・3



37・6



37・4



37・2



37・5



37・7



37・8



37・9



38・1



38・2



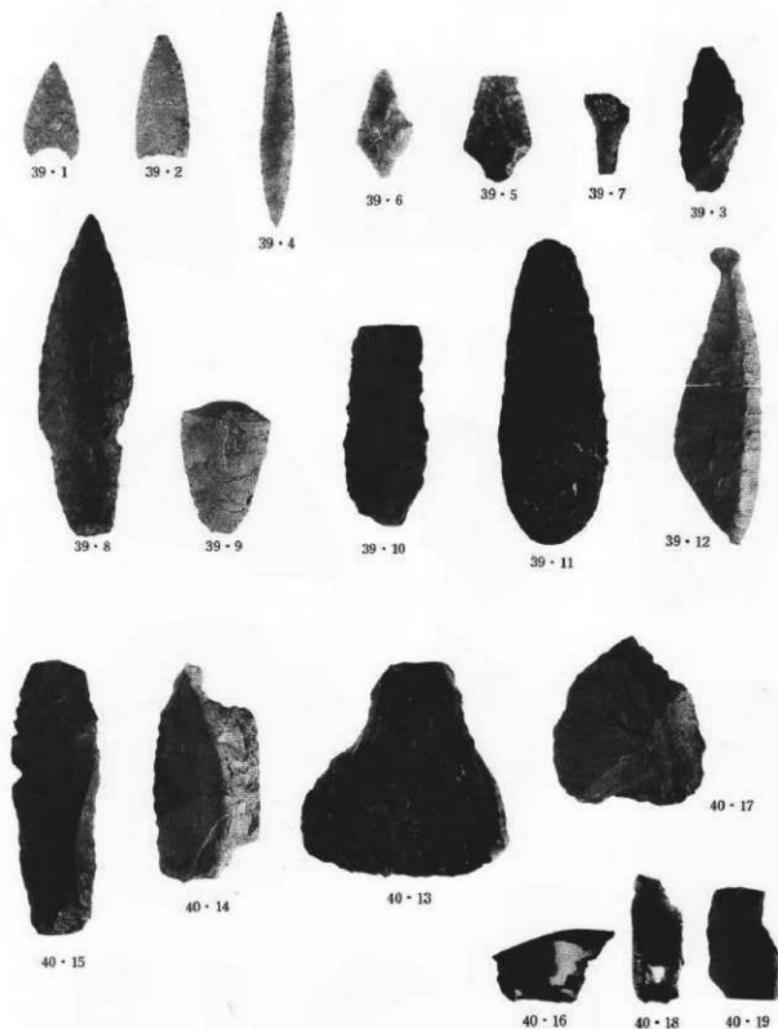
38・3



38・4



遺構外出土遺物—土錘・陶錘・磚、ふいご羽口、鉄塊一



遺構外出土遺物—石器一



40・20



40・21



40・22



41・1



41・2



41・4



41・3



41・5



41・7



41・8



41・10



41・9